

販促！

~~反則~~



# 文章読本

キミのヒーローが書いた文章が名文だ



販売促進を目的とした本書について

## 販売促進を目的とした本書について

---

ずっと書きたかったネタである「文章読本」を、出版社からオファーがこないから、自分で書いてしまえ、という乱暴力で作られている。

その『文章読本』の販売促進を目的とした、本書は販促本である。

それは反則である。

広告もたくさん入れようと思う。

それが目的で主眼である。

そんなことをしたら、本書の質が落ちるのではないかと、危惧されるかもしれないが、『文章読本』よりも質を落としたものなのだから、しょうがない。したがって、この販促本では本編から漏れたことを書く。とくに批判されるものが、掲載されてしまうだろう。

樂吉左衛門さんの創作漢詩を引用して、「これ名文か?」「名文か?」ということをやする。ベビーフェイスにヒールが噛みつき攻撃するような、こっそり口に含んだ丸薬を唾で溶かして反撃に出た善玉にここぞというところで毒霧を吐くような真似である。

これではいじめだ。

本人はプロレスをしたいと思っているわけではない。

「文章が拙い」という、いじめをしたいからではなく、樂さんの書いた文章が名文と判断するのは、茶の湯をする茶人グループしか評価しないに決まっていることを、あえて書かないとわからないだろう。

別項を設けてやるけど、彼が漢詩が書けるというのは「額縁効果」しか生まない。

それははっきり言うと、悪口である。

どんなに取り繕って、真面目な批評の体裁をとろうが、論理的に正しかろうが、樂さんを英雄視している人間には、悪口にしか読めない。読者が悪口と受け取れば、樂さんを英雄と認めていることになる。つまり、それが英雄趣味である。

それは貴族趣味やエリート趣味をたしなんでいる証拠でもある。そういうものは否定して「次の段階に行きましょう」というのが、本編の『文章読本』だ。小学生向けの言い方なら、めあて、ねらいである。

その本編でもやる「原平翁はキャプシヨンの名手（一行スナイパーといふもの）」などの説明をしたい。本編でやるはずが、「PickUP!」の方にコンバートす。んとす。

そこでは、写真画像掲載の問題で著作権法に抵触する可能性があり、それをクリアするためには、販促では自筆イラストを掲載することにした。イラストに満足できない人は、直接赤瀬川さんの著作にあたってほしい。

それで著作である本を手取る人は、少ないけどね。

本書では執筆中の「文章読本概観」までは掲載する。実は校正が済んでいない。

一部、本編の記事が連載のように載っている時もある。更新を繰り返していく内に、無くなる

。

「販売促進って、そういうものだよね」

本編での別角度になるのものが、本編の販売促進として掲載されるのだが、それは本編では載せられない事情があるということでもある。

構成上、流れに反するとか、たいした価値の無いドラクエテキストの話題は、収録されないだろう。未来、未来の文学者が文読作ったときにも、引用されない。（『世界樹の迷宮』の有名な繰り返しのギャグは引用されるだろうけど）

「堀井のブンブン調査」は、堀井憲一郎の「ホリケンのずんずん調査」が元であって、これをもじったら普通、「ゆうていのブンブン調査」じゃないか？ しかもう、堀井雄二がゆうていであった頃を知る人が少なくなっている。

だから、「堀井のブンブン調査」にした。

記事内で断言しているように、『ドラゴンクエスト』シリーズに名文は存在しない。

ドラクエテキストが引用句として流通するのは、別に名文だからではない。皆が知っているだけだ。

本編に引用した『MOTHER3』には名文があった。それはけして万人、万人どころか、日本人が信じていいものじゃない。その悲しみが一時代があって、差別という同情をしているから名文なのだ。

そこをあんまり詳しくは書けない。

書ける範囲では、博多大吉先生の文が引用されていたりするが、その理由は大吉先生が私のヒーローだからだ。英雄趣味である。

相方の華丸先生の「チャッカマンは、魔法の杖たい。」も、好きだ。（SF作家として「実はサイエンス思想として正しい」とか言いたくなる）

…これは「サイダーは、魔法の水たい。」が元ネタだろう。

九州出身の伝助にシンパシーがありすぎて、博多華丸先生がリスペクトをこめたオマージュ、これが本当の本歌取りである。

関川夏央さんなら「九州の石炭王がサイダーを夢の水と無邪気に喩える。炭酸水の工法が輸入され、冷水に二酸化炭素と砂糖を溶かし、ビンに入れ蓋をする工業を支えているのは、間違いなく自分の掘り出した石炭を熱源とするエネルギーが関わっている。近代化で夢の実現に導く証であるサイダーは、石炭王にとって勝利の美酒なのだ」と、書くだらう。（注・パスティーシュ）

ところが蓮様は、この男に寄り添うことが出来なかったのだろうか？ そりゃ感情移入できねえよ。（ハンソクだからドラマ批評でもないのにこんなこと書けるが「花子とアン」のネタを入れたせいで古くなっている）

もしかしたら、蓮様に感情移入できる人間は、まだ貴族趣味を残している人かもしれない。立身出世の近代的亜エリートな伝助を階級的な差別をしていることに、感情移入するって、どれだけ性格が悪いという話になる。

そういえば最近、若手の編集者たちの前でワンテーマを話して、一冊本をでっちあげてばかりいるけど、本来の関川さんはファミレスでウンウン唸って作った文章を書いてそれが好きな私には、本が面白くないということはないが、物足りない。

あとは大吉先生みたいに三年間も本を完成させられなかったということは、ゴーストライティ

ングさせずに、ちゃんと書いているということで、私もメモ書き（撮影が終わったら、裏紙）の写真掲載をしているが、それがゴーストライティングさせていない根拠にはならない。こうしてブツを見せられて騙されるのは、よくある。

佐村河内に天才新垣さんが書いた楽譜を写譜した物を見せられ、オレオレ詐欺に騙されたようなNHK取材班の例がある。バートルビーという言葉が一瞬浮かんだ。

佐村河内問題でもわかるようにゴーストライターが書いたモノを、名文と評価するために引用されたら、どうするか？

ミナ坊の（あ、イカン。女子禁制じゃないのに口を滑らせた。しゃべるように書くとは、こういうことだけだね）『文章読本さん江』以上の問題をはらんでいる。まあ私は出版業界のことまったく知らないわけじゃないから、「これやっているな」というのは、なんとなくわかったりする。

幽霊作家が業界の通例になってしまったとき、「文章読本」は息の根を止められたのかもしれない。他にも語りおろしやワープロの登場が「文章読本」をダメにしたかもしれない可能性はあるが。（手作業による名文信仰）

複合的に考えて、文章の階級主義は、無くなっていく。無くなっているから、大衆民主主義でゴーストライターがたくさん発生したのかもしれない。

結論を言うと、別に文章読本を読んだからといって、名文が書けるようになるわけではない。それは販売促進の略称、販促ではなく反則だろうと、私も思う。

もっと反則を言うと、文章読本は「終わりの日（ラグナロク）」を迎えた。

文学が「終わりの日」というよりも、昭和という元号内でしか正統な文章読本は無い。それは同時に昭和天皇の即位期間しか「現役がなかった」ということで、陛下の死に殉ずるカタチでもある。明治天皇に乃木将軍、昭和天皇に文読だ。これは後年、真面目な文芸評論家が挑むテーマである。ここまで書けば誰でもわかると思うが、文章読本は天皇像を裏書したものかもしれないという、私のような奸臣が書いてはいけない主題は、いずれ誰かがやるであろう。（日本国民ではあるけど自分が陛下の臣民であるかは、ギモンだなあ）

だいたい、そんなことを書いたら販売促進のための目的を失っている。

単純に、日本固有の近代文学が終わったから、文章読本も終わったと考えるのが、わかりやすく良いと思う。近代文学の終了が文章読本の終了である。

こんなこと書いても販促本の閲覧者数から、何も影響は無いだろう。近代文学者ではない人間が文読を作るとなると、このような話になるし、前書きが長くなる。そこは致し方ない。

現代文学者の書いた文章読本が存在しない以上、こういうことになる。一石を投じるつもりはないが、好きな人間だけが楽しめばいいのである。谷崎文読、三島文読、丸谷文読をちゃんと読んで内容を消化して取捨選択できれば、文章はうまくなる。

その、一番大事な部分が本編の『文章読本』にあるのかは、わからない。

広告

マンガとかを「天体観測」



Architecture  
Product  
System

[アマゾン](#) [キンドル](#)

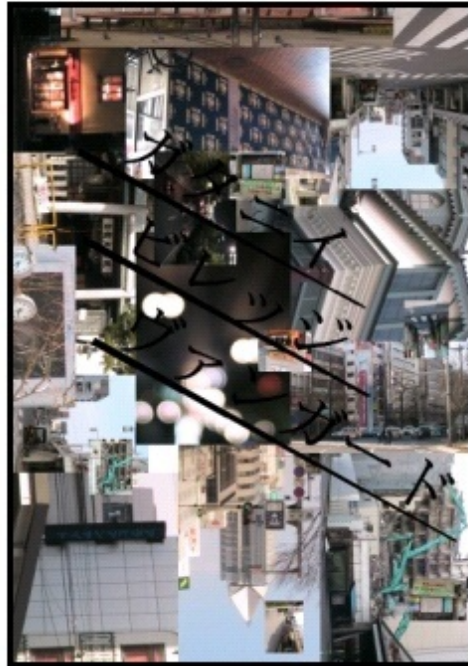


GVV

ジャズ喫茶小説  
という分野がある。  
これはそのひとつ。

Architecture  
Product  
System

ブックログのパー  
¥50



広告  
ガタニイ  
ビレッジ  
ヴァンガード

五島千尋

広告

ドラクエ研究指針

ブックログのパー



「80年代のテキスト空間」より  
ドラクエを確実にプレイした作家は、糸井重里と高橋源一郎さんである。作家と限定しなければ、斎藤はドラクエをプレイしていたと思われ、天野祐吉はドラクエをプレイしたことをエッセイに書いている。彼らをひとくりにすると、みな文筆業を営んでいるといえる。文筆業を営む彼らがどうして、ドラクエにはまったか。

「80年代のテキスト空間」の作家たち、ドラクエにはまる



100yen 税抜き

Architecture Product System

# 特別掲載・文章読本概観

第一部文読の近世 第一章



文章読本というのは、日本にしか無いジャンルだ。

文例集的な書籍は、イギリスなら「シェイクスピアのどれそれを引用しろ」というモノがあるだろう。そのため、スピーチの言葉はシェイクスピアに彩られている。それを知らないでシェイクスピアの原典を読むと、「なんかスピーチの言葉ばかりじゃないか」と、見当違いな逆転現象の批判が起こる。

シェイクスピアについては覚えておいてもらいたい。彼の名は「槍の達人」の意があり、イタリアやオーストリアなどのヨーロッパのことは書くが、すでに発見されていたアメリカ大陸のことは書かれないなど、気に留めておいてほしい。（伏線回収しないこともある）

海外だとちゃんと大学あたりで創作科があり、そこで講師・教授職にある人から文章の書き方をレクチャーされる。時には同じ志の学生と書いたものを講評しあうこともある。こうした創作科には出入りしている出版エージェントがいて、彼らに原稿を読まれてお眼鏡にかなえば、出版にこぎつけられる。

ちょっとした海外事情だが、出版された書籍についての賞は存在しても、国内のように創作小説を募る新人賞というのは存在していないと思われる。日本では一部例外はあっても、文芸誌の新人賞でデビューしないといけない。

そのため、文芸教育の外から小説を書く人々が、その手本となる書籍が文章読本となる。文章・小説の書き方、それを分割して行って、センテンス（文）の書き方、究極的な目標「名文を書ける」ようになる、文章読本はその手引書である。ここで、ジョークとして「まあ、読んでも名文を書けるようになるわけではありませんが」と、言いたくなるのを堪える。

こういうモノに関して、明確に答えすぎてしまったのが斎藤美奈子『文章読本さん江』だ。

文章読本とは名文紹介や文章の書き方、それを教えることによって、近代文学者の書くものが名文であると設定する文筆業者のプロパガンダであった。

つまり文章を書く者には高次低次があり、その原則を作るのが、「教える側」である近代文学者の役割で、谷崎潤一郎の『文章読本』は貴族趣味で書かれている。文学者を頂点とするピラミッドがあり、高次に属する自分が低次の者へのノーブレス・オブリージュで、文章の書き方を教えるという中世的考え方だ。それを斎藤は「サムライの帝国」と呼んだ。

はじめに断っておくべきだったが、これらの意見は斎藤の『読本さん江』の意見を越えて、すでに半分以上私の意見になってしまっている。書評としては、文章読本は「葉隠」である。

“武士道とは死ぬことと見つけたり”の侍の心得を叙した「葉隠」は、良くも悪くも武家社会という階級社会を統治することに利用されただろう。

江戸時代に書かれた「葉隠」が主君に仕える心構えなどの階級制度の強化に利用されたように、近代文学者貴族説を補強する考えとしては、文章読本は士族階級の文士版のようなものだ。

文章を書く心得を教えるということは、武士道の心得を教えることに似て、まあ、余計なおせっかいである。下心として「葉隠」が侍たちから戦国時代の下克上思想を抜くためにあるように、近代文学者が書いたモノを名文だと思わせる。

さすがに「葉隠」の“武士道とは死ぬことと見つけたり”のような極端なことは書いていないが、読めばこうしたマインドコントロールをされて文学者が高次と刷り込まれてしまう。

名文引用もギリシャ哲学の「この行いが正義だ」というソフィストの如く、「名文とはこれなり」と箔付けをするのである。名文の定義をしているようでして、階級制度を強化する装置にできるのだ。どこそこの侍がこのようなことをして、士道として褒められるべきとか、逆に愚劣であるとか、「葉隠」でそうしたエピソードが引かれていたら、間違いなくそうした強化装置として機能させようとしたことになる。

古典からも名文が引かれていたとしても、それは「古典主義者であるあなた方を否定するわけじゃない」という、エクスキューズに過ぎない。

有名な「造語をみだりに作っちゃいけない」と、谷崎文読で書かれているが、文芸貴族が持つ特権を作ろうとしている。そのまま真に受けると、裏づけの無い支配階層の隠されたマインドコントロールにはめられてしまう。造語を作るとか、そういうものはポリティカルコレクトネスなどの政治的な問題を孕んでいる。つまり、造語をできるのは近代文学者で、諸君ら貴族ではない者は貴族特権をみだりに侵してはならないという、ことだったのではないか？

階級闘争史観の見方だが、とりあえずこれを踏まえる。

ここで伊丹十三さんが出てきて「文章読本というのは、頼まれもしないのにやることだから、そういう魂胆があって当然なんですね」と、言ってくれると有難い。

本当に華族や士族というゆるやかな階級制度が、戦前では残っていて、ほぼ近代文学の評価が定まってきて、近代文学者が書くモノを階級制度上は高次であると設定できると、気づいてしまった。

普通に考えたら、「なんで近代文学者が高貴なる者で、そうでない一般的な人間が賤なる民なんだ？」と、疑問に思う。そもそも、なんで文学者は勝手にそんなことを思っているんだと、疑ってみたくるのが、階級の無い社会で暮らしている我々の考えである。緩い階級制度があった社会でもなんとなくそう思っていた人間もいただろう。（貴族に収奪される民草のように、文学者に収奪される読者にはなってもらわないのだ）

多くがその疑問に思う前に、次の一手が来る。

それは川端康成の『文章読本』ではなく、三島のモノだ。

戦後、三島由紀夫が書いた『文章読本』はエリート趣味で、選良的なところがある（選民的だとシオシズムだ）。三島はご存知の通り、エリートだった。大蔵省を十ヶ月でやめたとはいえ、エリートはエリートである。悔しかったら現財務省に入省して十ヶ月でやめてみる、なのだ。

その彼がドロップアウトして文学者、専業作家になった。森鷗外のように軍医というエリートをやりながら文芸活動をし続ける手段よりも、専業作家を選んだ。公務員が副業を禁止されているのに抵触する恐れがあったからかもしれない。

近代国家は性質上自然に官僚、エリート層を形作る。

貴族趣味と比べるとだいぶ近代的な考え方になったが、一部のエリート層だけで国家を先導するところくな目に合わないように、一部のエリート層たちが書くモノだけを名文とする考え方は「文芸の選良主義」、言うなればエリート趣味だった。

実際の三島やその文学はエリートに批判的というよりも官僚に批判的である。三島の性格上、国民をリードするはずのエリートである高級官僚が、俗物に見えてしまっただろう。

エリートというよりも官僚批判を少しだけ書いたら、官僚作文が名文になってしまう。これが三島が許せなかったことでは？ 官僚の中にいたら自分たちが責任を取らなくていい、何を書かれているか、さっぱりわからず国民をミスリードする作文を作れることが、能力的に優れているという誤認・誤謬が官僚エリート社会では蔓延しているらしい。素晴らしいが、これは近世時代の頃からあるものだ。そこは美しい国だから、相続してしまったのだろう。（アイロニーを理解していれば書かれていることがわかる）

彼のイデアルな考え方では、選良とされるはずの人間が、実地の大蔵官僚として働いた勤務時に、選悪とされるような幻滅があったのだろう。

たとえ官僚とはいえ、そこは人間。大なり小なり、卑俗的なところはあるものである。それを言語芸術家になる三島の美学では、大も小も受け入れられるものではなかったに違いない。美学を持つものは寛容ではないのだ。

彼の最後の話として繋がるか、三島は生前にアトランタのディズニーランドを見てきて、「それなりに面白かった」と語っている。ギャングや娼婦の溜り場だったコニーアイランドを反面教師にしたディズニーランドの常に汚れもゴミが無い嘘臭さ、作り物めいた町並みに共感を覚えるのは、自身の美意識に反しないからだ。選良主義者である三島が嘘臭さがあるのに認めるというのは、何か繋がる気がする。

彼の求める世界がイデア界にしかない、話を繋げれば趣味の世界でしか実現できないという、限界を知ったのではないだろうか。

三島問題に戻ろう。

官僚をやめて文学者になった彼は、エリートのままでいられるように文章読本を書いて、近代文学者が選良であると設定しようとした。エリート官僚が自分たちが勝手に法律やルールを作れるという思想である。行政の長の大臣も甲案乙案があまりにも酷いと、どうしても官僚が通したい丁案を採択させる騙しを、文章読本でやっていないか。

それは名文を書きたいと思っている読者諸兄淑女の皆さんを哀れで白痴な大衆として侮蔑していないか？ だいたいなんで文学者は我々国民が書いているものをとやかく言うのか？

読者に間違っていたかと困るので書いておくが、文学者になったからといって、エリートになったワケじゃない。ただ、出版社からハイヤーで送り迎えされたら、間違えるようになるだけである。

そういうことをしてもらって「先生」「先生」と言われると、本当に自分が高い地位の存在になったかのように誤解してしまう。自分自身をも、騙すようになってしまう。（別に最近の作家たちのカンチガイぶりを馬鹿だと言っただけではない。言っただけではないぞー）

くわばら、くわばら。

そもそも、文章読本は「先生」「先生」と呼ばれる人しか書いてはいけないという、不文律があった。

もう、文読の時代は終わったのだから、それはやめようというのが本書のコンセプトである。現在は貴族でもエリートでもない、氏族・民族や国民すら離れた大衆の時代に入った。

そこで名文とは「自分にとっての英雄が書いたモノが名文だ」ということになる。ヒーロー主義ではなく、英雄趣味の立場をとる。

わかりやすく単純明快にすれば、こうである。

それはもう、丸谷才一あたりからはじまっていた。

一部の文芸を読む人たちにとって、丸谷はアイドルというか、「古典から近代まで文芸を網羅できるヒーロー」という、その人物像が書く文章読本はインテリの慰めになったと思う。それも昭和の時代までが限界であったと思う。

昭和末期、バブル景気で出版業界が大きくなりすぎた。そこで起こる経済活動が生み出すものは、正しかったのか。それは三島が望んでいないことだし、昭和饒舌体の登場やタレント本の横行でテキストの価値も、こうは言いたくないが話をわかりやすくするためにあえて「下がってしまった」ということになる。

それは近代文学者が書くモノに劣等感を持たなくなった。

おさらいしよう。

中世であれば、貴族の書いたものがイヤでも名文となる。高貴な身分の書いたものに価値があるのは、身分制度や階級制度のためだ。

近代であれば、国民国家を先導するエリートが書いたものが国民は名文として受け取る。学歴主義もからむ。本来は学者を生み出す機関であった大学がエリートを生む組織化を果たし、とくに日本各地に外地にもあった帝国大学が中央政府の礎となるエリートの生産を主にしていく。

ただ、日本の場合、近世に比べて緩和された階級制度があり、立憲君主主義で天皇機関説を取る国家体制であるため、戦前は（華族令による）貴族が残っていた。だから谷崎の貴族趣味がありえた。それが戦後に無くなり、華族などの階級上位層を廃してエリート層が国家を運営すると建前上はなったときにエリート趣味が現れ、わかりやすく言えば三島の登場になる。

だが、徐々にエリート趣味は廃れて、インテリとしての体面を保つ教養もまた、廃れた。

丸谷才一は谷崎と三島のハイブリットともいえるし、「文芸最後の英雄」かもしれない。その丸谷が「文章読本とは変なモノだ」と言い出した。彼が日本にしかないジャンルと気づいたのである。それで塩田丸男の『文章毒本』あたりで、文章読本がからかいの対象になっていく。プロパガンダがバレはじめていくのである。

『読本さん江』でも、「綴り方教室」のプロパガンダ性を「暴く」という表現ではおおげさだが、少しやっている。同じようなことを書くが、世話をしあげようとか言う人に限って、実は労働力を搾取しようとか、そういう魂胆があってやっている。文読のアイディンティー 危機が訪れた。

一九九〇年代にはもう、「文章には序列がある（はず）」という撤退戦が繰り広げられたと、評価が下されるのはこれからだろう。文章には序列があって近代文学者が書いたものが名文と当たり前に皆が思ってくれなくなっていく。

マインドコントロールが解け始める。

近代文学者から一線を引いて自意識は現代文学者で、言葉の糞尿主義者でもある私は「英雄趣味」の側には、回ってはいる。だが、現代文学者が書くモノが名文であるという、今までの文読の考えを延命・相続する気は、無い。

自分が書いたモノが名文としての評価を受けてしまうなら、大衆のイケニエにならなくては行けない。

そんなのは、ご免被る。

私は一行も名文を書いたことがないし、これからも書けないだろう。

こんな当然、あたりまえのことをわざわざ書かなくちゃいけないのだが、文読を書くのだから、仕方ない。そういうことをわざわざ書かないとわからない人に向けているんだろう。

中世の階級社会、近代の国民国家を経て、大衆の時代では「自分の主義主張にあったことを語ってくれる人物」が書いたモノが名文になる。

それをもうちょっと短縮すると、自分の英雄が書いたモノが名文となる。

これを「英雄主義」と呼称するのは、反論もあるだろうが、現状としては大きく外れることではない。本書を読みきれば、正確には「英霊趣味」となろう。

英雄は本来、戦争の中でしか生まれえない。戦争の無い時代だと趣味の世界にしか英雄は現れなくなる。擬似英雄しか生めないが、その人物が書くモノを名文として流通させるのが、商業主義を全否定するわけではないが商売であった。

その擬似英雄が書くモノが商品価値があってしまったから、本という商品に整えて、売ってしまったのだ。

日記的に制作進行を



## 日記的に制作進行を

---

こういうものが無いと、何もしていないと思われる。  
仕事をしていないと思われる。  
とりあえず、「こういうことをしている」と業務日誌的に書いてみる。  
人の日記を読む気でいればいい。

### 四月下旬期

資料集めをはじめ。  
これが楽しいが、なかなか骨が折れる作業でもある。  
原監督の謝罪文はどうしても使いたい。  
どこにしまったのか、忘れてしまった。  
雑誌「タイム」で宮本茂の記事が載っているのも、どこかにやったままで、未だに見つからない。よく考えたら、この記事は英文でも、自分にとっての英雄のことが書かれているから、英文だけど名文である。  
だいたい読めて、全内容を理解できなくても、名文なのかと言うと、「自分の英雄」のことが書かれていたら名文になる。

### 五月上旬期

いわゆる、順調に資料が集まらない。  
鴨ちゃんの引用するテキストは、『遺稿集』に収められているのではなく、『日本はじっこ自滅旅』とわかる。  
四コママンガを通して、「段落（パラグラフ）一つにつき、一コマだ」という持論を語るために、四コマを用意しようとして、いしかわじゅん先生の『桜田です！』を引用しようということを決めたのだが、著作権的に問題があると気づいた。  
マンガを文章に書き起こすと、それは翻案権に抵触すると気づいた。  
マンガを批評しているなら、絵や内容に触れていけばよかったかもしれないが、全体をほぼ小説化して四コマを四段落にわけるということをするのは、小説化だろう。それは翻案にあたる。一応「文章読本」は文芸批評という体裁があるから引用はできるが、そこから外れることである。  
毎日新聞側に使用許可を取ろうすれば、まず許可がおりないだろう。  
使用料を請求されたら、お金が無いのでできない。  
しかたないから、自作の四コマの内、「山田」とか、いろいろ。  
そういえば、「赤瀬川“字幕”」のために新潟市を探訪し、アラビアンナイト以外のネタ（『ガタニイビレッジヴァンガード』を読むとわかる）で、トマソン物件に近いものを探し、素材を撮影してきた。

### 五月下旬

そろそろ章構成をして、全体の構成を考えてみる。

丸谷オーの「文読」みたいに、第一章第二章とする方式が、構成として正しいだろうか。

章題は「絶筆はメメントモリ」「物量作戦はインフレーション」とか、考えているが、順番はまだ決めていない。一応「幽霊作家見参」は後半に位置させる。

今のペースなら、完成は年末でなんとか。

「物量作戦…」で、マンガ雑誌の名前を並べ立てるとか、奈須きのこも含まれる官能小説家たちの名前とか、中原昌也の意味が無いけど面白いセンテンスを並べ立てる物量の話して、これを突き詰めると「通貨論」になっていくと気づいた。通貨供給量を増やすようなもので、伊丹十三さんがエッセイを書いていた頃からの問題で、いまだに決着がついていない。

それが文章の世界でも同じで「悪貨通貨の流通ではないか？」という問題提起にはなっている。しかし、「語彙の多さは軍事力の高さ」みたいな、国語問題にも展開する。

それはやらないとまずいだろう。

## 六月上旬

原監督の謝罪文がでてこない。

だが、昔やろうとした資料が出てきた。

当時の題名はそのまんま『文章読本』ではなく、『クレオール礼賛』から取られた『文章礼賛』であった。新左翼の人は書評にあげない『大日本帝国のクレオール』とは違い、こちらはフランスの植民地にされた人が、仏語と現地語を合わせた独自の言語体系での文学作品の称揚のマニフェストである。

その資料（メモ）は本書後半に載せる。

「文章礼賛」という章を設けることにした。

それはもちろん、『文章読本さん江』で書かれている、プロレタリアートライターの記事。

まあ、プレカリアートライターで働いても働いても貧乏を抜け出せない書き手だけだ。

ブルジョアライターしか、作っちゃいけないとマインドコントロールされていたのが、文章読本だったけど、その精神管理は終わらせる。ただ、このマインドコントロールが近代文学を「商品」として成り立たせて、それは作者だけが悪いというより、読者も共犯関係を築いていた部分があったらう。

それを壊し始めたのが、何度も語るとおりゴーストライターの氾濫、たけしさんのようにテープで吹き込む人、そしてワープロの登場だ。

## 六月中旬

順調に執筆が遅れている。資料収集、裏取り調査が手間取っているのだ。

下準備をきちんとしていなかったからだ。

…樂さんの悪口を言った因果応報だ。

「樂さん、ごめん。

オレはあんたのことが憎いから、引用する。

それは文章をケナしているが、ソレハシカタナイ」

実は心を痛めていると、心にも無いことを言うことが、かえって悪いと思う。「桜の枝を折ったのは、わたくしめです」と正直に言おう。

間違っほしくないのは、「樂さんをケナしたいから、ケナしている」のであって、別に他意があるわけではない。

七月上旬

堤清二さんのことを少し調べたら、「この人をブルジョワだから、いじっていいのだろうか」と思った。

それでも「一度いじると決めた以上、いじる」と、現代文学者としての矜持を見せなくてはいけないと思うので、そこはブレてはいけない。

堤さんが悪いというわけではないが、死んでしまった彼が文句を言わないと思うので、OKである。

思想的には一致している。文読を作って自己ブランドを高めようというモノに反逆しているのが、ガイ・モンターグにしてボダン大司教である私の側だけど、無印良品を作った堤さんも「ブランドになるな」という思想を持っている。

逆英雄になる可能性は、否定されている。

七月中旬

『ありえない未来の思い出たち』のマンガを描いていたので、まったく進まず、進ま虫が出ている。

“まったく話が進ま虫”は江口寿史のマンガに出てくるケムンパスみたいなキャラクターだ。

『ペテン師と天才』をさらっと読んで、いかに佐村河内がズル賢くて悪い奴で、それに比べて新垣さんが報われない天才か、よく書かれている。小学生高学年でフルオーケストラの曲を作曲しているんだから。

それで『赤毛のアン』の音楽担当した人の弟子になって、その先生から下請けを受けてないか？ 音楽業界の悪習として弟子筋に当たる人に作曲依頼をさせるのがあるらしいが、これをジャスラックは見ても見ぬフリをしていたんじゃないか？

音楽著作権料を払う相手が違うことに、問題視していないのか。

この問題はさらっと流して終わりにはできない。

こいつらがゴーストライダーをしたから、今文章読本を作っているんだから。

七月下旬

猛暑到来で、まったく筆が進ま虫。

壊れかけのエアコンの調子に合わせて暮らしていた。

そんな中、ある理由から、『DS文学全集』を久しぶりにプレイしてみる。

しかし、必要な箇所が見つからない。

おかしい。

暑さにやられて、記憶が混同してきたのか？

雑誌「週刊ポスト」でナメダルマ親方こと島本慶さんの連載記事があるのを読んで、「文章礼賛」のコーナーに“チューハイでカンペー”とかの引用をしようと思う。島本慶さんは日本3大親方の一人だぞ。他はクメダルマ親方と近衛おやかただけど。

自分の精神的な年齢層が中年になったから、ナメダルマ親方の文章をいいと思える。読むと、謎の幸福感が得られる。それも、私の世代が最後じゃないかな。

私の世代よりも下になると、親方の文章がよくわからなくなるだろう。

名文には賞味期限がある。

それは間違いない。

八月上旬

『吾猫』をアマゾンのキンドルを使って、ダウンロードして調べた。

くだんの“読点抜き改行鍵括弧挿入”がちゃんとあったことを発見する。ゲームソフト『DS文学全集』を読み返してみたら、なかなか発見できず、いらだって、つい、文明の利器の力を借りてしまった。

自分はどうしようもないクズだ。自力で『DS文学全集』を読んで見つけなくてはいけないのに、キンドルの力を借りたなんて劣っている。

「これは文学者にとって、敗北を意味する」

なんだっけ、吉本隆明の文章みたいなことを書きそうになった。リンチ殺人した赤軍派の人が「総括できなかった、敗北死だ」と、吉本隆明の文章とそっくりなことを言う。

そうだ、思い出した。

隆明先生の書いたことを、悪文として引用しなくちゃならなかった。

やっと原監督の謝罪文が出てきた。（後は宮本茂の記事が載っている「タイム」を見つけるだけだ）

久しぶりに読んで笑った。

名文だね。（←アイロニー）

原さんは女遊びして、プロ野球選手としていい思いをしたじゃないか。

これからはダブルゲッターで人生を送ってほしい。

浮気したのでゆすられて、隠していたのにリークされてそれがバレる。

まさに「お前がダブルゲッターだ」である。

八月中旬

特に記すことは無いが、順調に資料収集、執筆ともに捗っていると思ったら、『ファイアーエムブレムif』を手に入れて、滞ることになった。

これなら、来年の春頃に完成するかもしれない。（後日年内完成は難しいと気づく）

そういえば、このゲームソフトにカミラという名前の女性が出てくるが、これはカミラ婦人からとられているのだろうか。主人公の立場は王子で、それならば皇太子を取り合ったダイアナは誰だろう。ヒノカ姫なのだろうか？

「そいつはナバタの砂漠に呑まれたのさ」

「身の程をわきまえよ」

みたいな名言が出てくるか、楽しみだがシナリオを書いた樹林伸だと難しいだろうなあ。

…マンガ原作者の文章を引用するのは、難しい。

小池一夫あたりは、ちゃんと原稿用紙に書いているから、本人執筆を特定できるが、マンガのセリフは編集者に変えられて、それも原作者に承諾無しだったりするわけだ。

すると、名言引用でも難しい。

## 八月下旬

引用を控え忘れたり、車の運転で危ないことになったり、『FE』のやりすぎで、まずいことになっている。

そうそう（げんとく）。

本書の漢文の引用は、手書きしたものをスキャンして画像を作ることにした。ワードソフトの記号挿入で、文字表には確実に変換できない漢字があるはずだが、探し出すのが難しく手間がかかる。

手書きが一番手っ取り早いと、気づいた。ちょっと暑さが遠のいて、頭が回るようになった。

「わかるか？ 本当に人をいじるというのは、このように情熱を傾けて、キミたちはわかるか？」

## 九月上旬

何をしていたかというと、『ありえない未来の思い出たち』第二巻、先月収録予定を描いていたので、大幅に予定が遅れる。

こんなことでいいのだろうか？

ここにメモがある。

「八月上旬」と書かれている。“又吉くんは芥川賞受賞後第一作は文章読本がいいんじゃないか？”と書かれている。

“文壇バーにて”とも書いてある。

無責任と言うか、一ヶ月前のネタをここで書くか？

それで「あの人はゴーストライティングさせているから、名文として引用しちゃダメ」いう情報を集めさせて、どうやら私はその情報を入手して、スリップストリームで文読を書くという、構想があったようだ。

忘れてた。

九月中旬

だいたい、三部構成で一部に四章分収録というカタチになる。

まだ、台割をつくれていないし、全体の三分の一しか、出来ていないかもしれないが、ゴールは見えてきた。

第一部 文読の近世

文章読本概観

大衆がプロスポーツを生み出した

人文一致主義批判

文章力は肩書きは勝てず

第二部 文読の近代

文章教室的ネタ

語彙の多さは軍事力の高さ

校正は人海戦術にかぎる

物量作戦はインフレーション

第三部 文読の現代

幽霊作家見参

テープに吹き込めば誰だって名文家

絶筆はメメントモリ

文章礼賛

これに、最初の方に「はじめに」を、終わりにそのまんまの「おわりに」を付ける。

「一行スナイパーといふもの」は、どこに入れよう。

第一部と第二部の間に、箸休めとして置こうか？

さらに、もうひとつ、ネタを入れれないといけない。

九月下旬

インテリゲンちゃんの『ぼくらの文章教室』の紹介と解説にあたる記事を、「絶筆はメメントモリ」に関連させるために、どこかで入れたい。真似して書いたのではなく、「絶筆はメメントモリ」では似たようなネタになってしまった。

話を変えるとちゃんとした文読を作ればいいのに、「文章教室」系統の題名になってしまうのも、致し方ない。幽霊作家の文章を引用していると、文章読本の品格が問われる。



本編でも語りたいジョブズのスピーチは、ちゃんとスピーチライターがいて、ヤマザキマリさんのマンガや原作である『スティーブ・ジョブズ』にはスピーチのキーワードになる言葉は雑誌の裏表紙に書かれていたとか、そういうのを読んだ方がいい。（この部分、ほとんど「インテリゲンちゃんの教室」で同じことを書いている）

インターラード（「間奏曲」の意）として、「一行スナイパーといふもの」と仮タイトル「インテリゲンちゃんの文章教室」を、部と部の間に入れるとか、そういうことをしないとイケないなあ。

インターラードなら、サービスでこちらに収録してもいいと思うけど、過剰なサービスだと思うなあ。

## 十月上旬

今年が後三ヶ月で終わろうとしているのに、半年以上執筆期間を経過して、第一部の原稿も完成していない。

夏までには終わらせたかった羅列ネタの入力も、まだ終わっていない。

丸谷が少しだけ羅列しているのを、過剰としているのに、中原昌也さんの“50代でもパンタロンでもセクシーでありたい願望に殺害予告”なんて、意味の無いセンテンスが山ほどあるのは、インフレである。「物量作戦はインフレーション」だ。

文芸批評として、やらないとイケない。

しかし、入力するのが面倒である。

このあたりは、事務所を構えていたら、雇っている雑用係に「ここからここまでを引用したいから、入力しておいてね」とできるが、私はそんな雑用を雇えるほど金持ちではないので、自分で自力入力するしかない。

編集者がいれば、引用部分をコピーしたものを原稿用紙に貼ればいいのかね？

## 十月中旬

三島文読を読み返すというか、話の内容と外れるモノは、全て「文章礼賛」の章に収録しよう、と思う。

文読の現代問題は再考されていない。特に翻訳の問題は、文壇にいるようなちゃんとした文学者が文読を書くときは、かなり問題になる。「テケテケン 翻訳こんにやく」みたいな一章を設けないとイケない。

翻訳エンジンがあろうと、血の通った翻訳は必要。沼野さんが言っているように、翻訳文は一頁につき一つは誤訳がある。

ビデオゲームの世界では、翻訳・ローカライズがあり、宮本茂がちゃぶ台返しをすると、翻訳もストップされる。『ポケモン』は伝説のポケモンだけでも、各国の女性器男性器などの卑猥な単語と一致しないように、かなり気を使っている。

翻訳関係の章を一章設けるのは、必要。十分条件。

そうでないと、国語問題との関係も語れない。

## 十月下旬

「絶筆はメメントモリ」の主演はカモちゃんでもいいのか？

サイバラマンガで、アル中病棟に入れられ、冷たく伸びた麺をうまそうにするカモちゃんがまさか、こんな文章を書いているとは……

又吉くんの悪口を言いたいわけじゃないけど、『火花』は敵わないよね、カモちゃんの無頼派の文章には。

本物である。

本物の無頼派は、生きてるうちに評価されるわけじゃない。

あんまり、ギリギリのネタだなぁ言うのは、新明解の古い、山田先生が主幹期のやつがほしくて、新古書店を回ったら美装で100円のヤツ（第四版）が売っていた。背取りできるかもしれないぐらい、状態がよくて、これがフクザツ。

もっと、辞書として勉強や何かに使われてから、売られてほしかった。

痛んでいる辞書が、できればよかった。

十一月上旬

やっとゴールが見え始めた。

だけど、見え始めたゴールテープは年内じゃない。

年内までに終わらせたいけど、それをすると体を壊す。『俯瞰の男』を無理して完成させて体を壊した経験があり、「あっ、自分は体が弱いんだ」と自覚し、それから才能が無いということも自覚することになる。

そういうことは、ものすごくストレスなわけで、他の要因も相まってストレスで直腸炎になってしまったこともある。羽海野チカさんがアニメ化が決まって直腸炎になったのに比べて、なんて情けないんだ、と。当時思っていた。

ただ、結果だけ「直腸炎になった」と告げると、勝手に同性愛者だと思っらしい。ストレスで苦しんで、直腸炎になって死ぬ思いしたのに、勝手に人はそう思う。プレドクしていた円城さんが、お金が無くて背広を新調できなかったら、「あの人はお金を何に使っているのだろう？」と、勝手なことを思われていた。

ともかくも、年内に終わらせたいのは山々だけど、ちょっと無理そうだ。

でも後がつかえている。

『第三ライトノベル』のメモを溜めて、できれば『蜷川幸雄と富野良幸』（幸の字が同じ赤の表字）も書きたいが、お二人が死……二人のことを両方書けて、日本にシェイクスピア演劇の受容が出来た背景などを語れるのは、私の他にいない。（いくら日記でもそこまで書きちゃダメだろ）

別に商業媒体からは、才能が無いと評価されたし、それなら自由にやるしかない。

もしかしたら、二人よりも寿命が、私の方がもたないかもしれない。

「体弱いんだモーン」

葦原大介くん、また休載している。

『アオイホノオ』は二ヶ月連続で、休載しているけど、大丈夫なのか？ やっと新谷かおるこ

と冰山一角のオリジナルが出てきたのに…この方のアシスタントをしたから一般では流通しないところで「キミは新谷かおるになりたいか〜」という、本を描いていて新谷かおるソックリの画風を描く…これって、よく考えたら文読とやっていることと同じかもしれない。

#### 十一月中旬

今書いている文読で批判していることを、橋本五郎がやっている。

それはこの販促本の記事「ノスタルジジイ・ゴローちゃん」として書くことにした。つまり本編文読には収録できない内容だと。

悪口である。

「私は所詮、ネットの住人だから悪口を言っている」

ゴローちゃんは、まだヒエラルキーを信じている。

遅れている。

それが新聞の遅れを生み出していると思う。

このあたりは、ちゃんと記事で書こう。

マスゴミとして認定し、生贄になってもらう。

#### 十一月下旬

やっと中原の「誰が見ても人でなし」の引用文をデータ入力できた。

後は、アドルフ・ヴェルフリのやつを少し引こうと思うが、これは九分九厘泣く泣く割愛だろうなあ。

資料的には控えているけど、引用の引用（孫引き）で原典がパンフレットか何かで、書誌データをおさえることができない。原文と翻訳文を併記するかとか、そういうのに頭を悩ます。

芸術的には、過剰だと美が生まれるみたいな、それは結果に過ぎないと思う。

『ガルガンチュア』で放尿によって約25000人が溺死したのを、サドの化学者アルマニが地震を（人為的に）起こして250000人殺したと、十倍にインフレさせるようなものが、どうして美になるのか、美学をもってしても説明がつかない。

過剰だったから美が生まれたのではなく、美だから調べてみて過剰だった。

むずかしいなあ。

『ありえない未来の思い出たち』を休んで少し手を加えれば完成すると思ったけど、「完成しませんでした」となるのも、ありえないわけじゃない。

#### 十二月上旬

笹野さんのものも、引用しよう。

人生には×切があるから、次を作れる時間的余裕は無い。

笹野頼子さんの文章を引用する機会が、これからないかもしれない。ここで引用しないと、次がもう無いかもしれないのだ。それはイヤだ。

できれば、「文章礼賛」も作りたいが、文章読本が500円ぐらいで、一万部ぐらい売れば次も作れるが、そんなに売れるわけが無い。アマゾンの印税率から考えると、350万円の利益だけど、

一万部というのは超人気マンガで累計一千万部以上いくタイトルの電子書籍を売るネット書店の一チャンネルの売り上げ本数だから、こんなに売れるわけが無い。（アマゾンやiBooksはもうちょっと多いと思うが）

そもそもなかなか完成しない。

『先生ロックオン!』とかを読んで悶々としている。

もんもん。

マンガで思い出した。そういえば、久米田康治や吉田戦車の文章を引用するはすが、どうも構成の流れの中に入れにくいと、気づいた。

ナメダルマ親方の文章は「チューハイにカンペー」とか引くのに。

別にまったく文読と関係無い話題がないわけではない。「俺ボンボン」でキントッシュ（マツキントッシュの略号）でテキストを作るとか、紀伊国屋書店で英訳された『さよなら絶望先生』の紙ブログのコーナーを読んだら英文がカッコよく、原典はグチを言ったりクラスの子をストーキングした思い出が書かれているとは思えない、何か違うことが書かれている印象を受ける。印象に過ぎなくて同じことが書かれているはず。翻訳された文章と邦文を翻訳した文章は文読のテーマとして重要なのだが、それを引けない。

もう一章作る、時間が無い。

多和田葉子さんのカフカ「変身」と今までの邦訳、そして独語原典の違いなんて、それだけで一冊本が出来分量（にして文量）だ。

そもそも、英語訳の本は高くて買えない。「俺ボンボン」をピックアップした文庫本を持っていない。

別にいいか。

本人たちが見ているわけではないし、実際にお金を払って本を読むわけでもないし、気にせずやろう。本当に字面だけを見ると、Coolなことが書かれているように見えるから不思議だと、文読本編でやりたかったな。

「かなしみのオカズ盗み」には影響されたなあ。

十二月中旬

結論。文読は旧仮名遣いで書くべき。

というのを、文読を書いている途中で気づきはじめた。なぜ、旧仮名原理主義に至ったかのは、もちろん本編を読んでもらわないといけない。黒い目出し帽を被り、ある宗教教義に反している欧米にテロをすることを辞さない集団と似たようなことを言い出したのは、別にお金を払って買えば読めるので、ここでは言わない。

ジハーディなんたらみたいに「今日から旧字体の漢字を使え！ さもなくば日本教に背いたとして処刑してやる」とか、言っているわけじゃないが、前半部は同意見である。

もう折り返し地点は過ぎたので言えるけど、今回、文読を書いてよかった（あとがきを書くことを日記風なところに書いていいのか？）。

売り上げという結果は芳しくないだろうけど、それさえ眼をつぶれば、いろいろ収穫があった

。

十二月下旬

なんてことだ。

“ナメダルマ親方の文章は「チューハイにカンペー」とか引くのに。”とか書いてあるのに、島本慶さんの記事とか本を押さえておらず、このままじゃ、引用できないことに気づく。雑誌「週刊ポスト」の記事を引こうか思って、うかうかしていたら、連載記事が休載していることに気づいて、「アレ？ どうしちゃったんだ？」となってしまった。

“ヘコキむしのきおく”の一部は、もうデータ入力している。メモに書いてある糸井重里はこの文章と、決めていた。リダのモデルである人物はすでに亡くなり、彼を支持するのは英雄趣味だったという、悲しい話である。

それから、文読の第一部を少し編集し、いろいろ加えたものをフリーミアムとセールス？ の中間に位置するものを作ることにした。「ピックアップ文章読本」という題にして、100円ぐらいで書籍内容が分かる、お試し版が必要だと、フリーミアムのことが書かれた新書を読んで気づいた。

それにしても『アオイホノオ』が三ヶ月連続で休載で、『アラタカンガタリ』みたいに何かあったのだろうか？

邪推しちゃうな。

---

年を越してしまった。

一月上旬

2015年までに出したかったが、残念ながらできなかった。

『マッドマックス 怒りのデスロード』みたいに、資金繰りが悪くなかなか撮影にゴーが出なくて、その間に撮影機材が進歩して、昔からファンの間で言われていた「このカースタントは絶対に死んでる！」というオーストラリアの無茶な撮影環境をできる…少し離れたが、皆はもう著作権切れした谷崎の『文章読本』を読んだ哉。

谷崎の著作権が失効せしめるのを狙っておった訳ではない。ただ、無為に時間が経ち、谷崎の死後五十年を越してしまったとふう次第である。ナオイズム。

だから、今年に出さないといけない。でも、TPPに基本合意したから、2020年頃にはまた著作権が復活する。手元にタイムスケジュールがあるわけではないが、だいたいその辺りで、ミッキーマウス法案と呼ばれた50年から70年に延長した著作権の権利は、どう考えてもディズニーの保護政策だけど、阿呆な人はそれを国際スタンダードだと思っている。

でも、著作権が復活すれば、谷崎賞を運営しているところに著作権料が再び入るとしたら、それはそれでいいと思う。賞金や選考委員への謝礼が出て、一応文芸活動に寄与する。ノーベル賞みたいにノーベルの資産の運用益で賞金が出るシステムと同様の場合だが。

一概に著作権の延長が全て悪いとは思っていない。ただ、ほとんどの場合、パワープレイヤー

の保護政策、強い者だけがバカ勝ちするルール改正で、ゲームソフトで言えばバランスが悪いと叩かれて当然だけど、マスメディアに広告出向すれば「札束で口を塞ぐ」が出来てしまう。マネーイズパワーで、ちょっといただけない。

最後にいえることは、手塚マンガの著作権は切れることによって、シェイクスピアの戯曲を誰でもどの劇団でもかけることができるように、どのマンガ家でも手塚マンガを素材に、マンガが描けるのが平成51年頃にあったが、それはなくなった。

つまり手塚マンガを素材に舞台演劇にかけることが、予定表に入っていた。しかし、二十年先送りされた。さずかに手塚マンガは忘れられることはないが、関谷ひさしとか、ちょっとトランスメディアになっていない作品の作家は、保護期間中に忘れ去られるかもしれない。

一月中旬

困った。

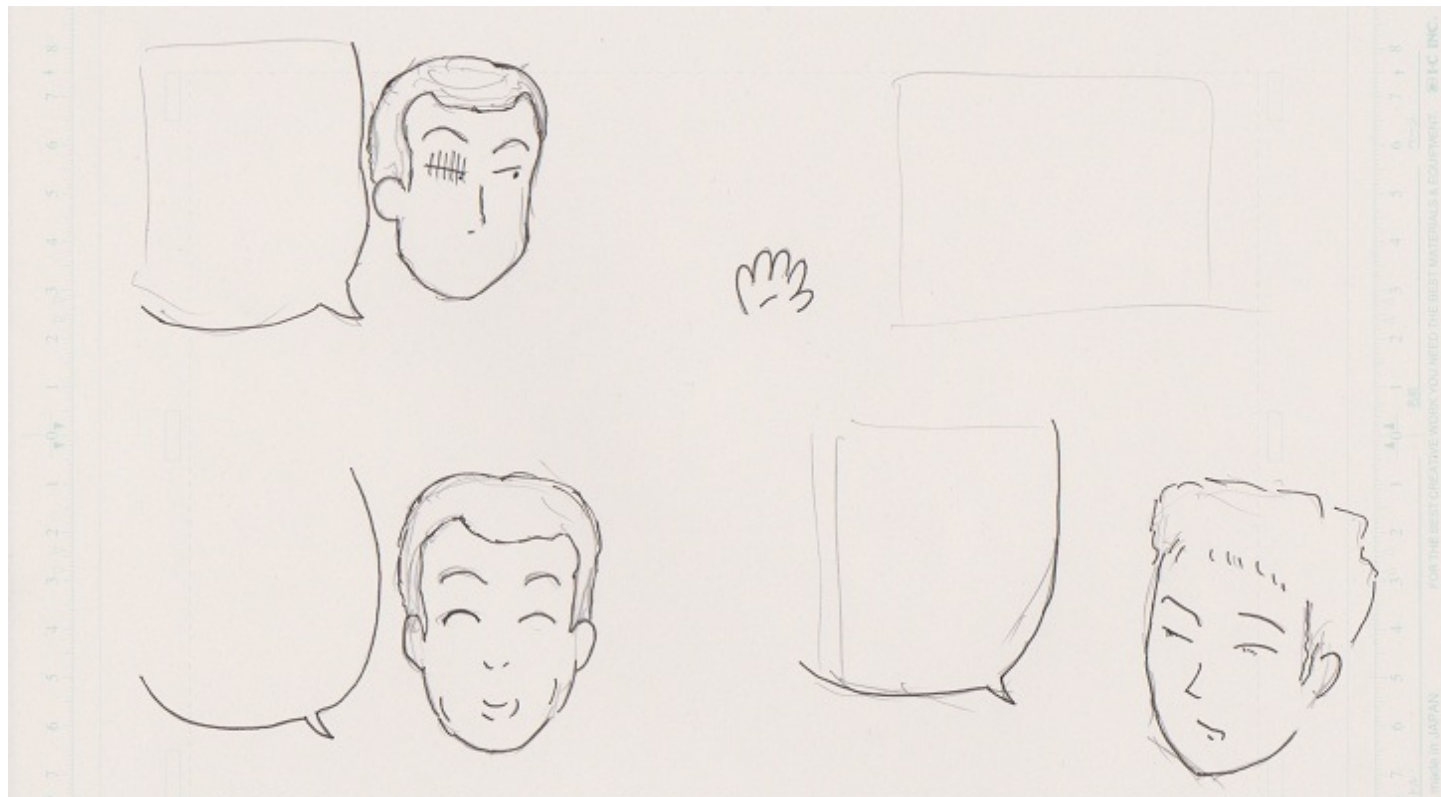
雪が降って県立図書館に雪ない（ユケない）。

島本慶親方の文章「チューハイでカンペー」や「くけー」や「ふに一」とかを、引用するためにわざわざ週刊誌を定期購読していて、保存している（あのテキストを保存しているって素晴らしいなあ）知の殿堂に行けない（雪ない）。

だいたい県庁所在地の駅から百円レンタルの自転車に乗って、日頃の運動不足解消もかねて…ホントウの日記みたいなこと書かなくていい。

営業だから。

少し、予定が組めれば、国会図書館に行けなくもないが、それだと少しねえ。



段落問題で、どうしても図画作成をして説明しないと、しっくりこない問題がある。それで作図して、二パターンを用意して読み比べさせることにした。

それにしても、半分出来たものを自己校正を兼ねて、読み返してみると酷い文読だよ。堤さんの書いたものをいじってるのはよくないし、独文学者のエッセイを読んで「性格悪っ！」とバカ



正直に書いたり、文章なんて書いたことが無いプロ野球の監督の不倫謝罪文をあげつらい、「俺嫁が金髪ですいません」とか、時間的に消費期限があるギャグ（でもコマーシャルを見かける度に笑う）をぶっ込んだり、無茶苦茶やってるよ。

今まで文読を書いてきた文学者がもし読んだら、谷崎はOKだと思うけど、三島が読んだら「誅をくれてやる」とデニス・ホッパーよろしく口紅を塗り始めて、楯の会のメンバーに後からはがいじめされ、

「これが俺のレター教室だ」

「ラブレターだぞっ」

「いいか、これが俺のラブレターだ！」

と、キスを何度もされてしまう。

三島は同性愛をしていた手紙を文芸春秋に公開されて、遺族とケンカしてるからシャレにならない。今の文壇は新左翼に牛耳られているから、私のような右系な作家は右傾いられない。

文壇デビューできなかつたから、気を使わなくていい。

一月下旬

もう、『吼えろペン』第一話の焰燃の気分だ。

文章読本なんて、谷崎文読を読めばいい。

2020年頃までは著作権が死後50年までだから青空文庫で読める。三島も2021年ぐらいで著作権が失効して青空文庫で読めるのが、TPPの基本合意でできなくなった。

そもそもアメリカはミッキーマウス法案で50年で失効を70年に伸ばした。これは明らかな保護政策だ。（自然人とは違い法人は無期限に活動できるから死後ではなく公開から著作権の期限を数える）

半生をオペラ化したものでレーガンにスピーチのやり方をレクチャーしていたディズニーだから、共和党はこうしたこと（利害関係者の言うことを酌む）をやる。後はもう、前から話しているとおりTPPで保護政策に巻き込まれている。こんな属州化条約で日本もアメリカに合わせるようになった。

苦虫をかみ締める話より、ゴーストライターの話は意外に美談が多い。

『愛...しりそめし頃に...』の「神様の代筆」で『ぼくの孫悟空』を一晩で仕上げるために、両藤子と石森赤塚の四名が代原を描いたのが、作中時間で1957年。後に『オバケのQ太郎』を藤子不二雄と石森が描くことになり、フジオプロがああしたやり方をとるようになったキッカケかもしれない。

同じ頃に、関西方面で劇画工房が産声をあげる。

「これはもう講談の世界です。『一方その頃、西の方では辰巳兄弟が新しい漫画を生み出そうとしていた...』」と、センスで机を叩いているよ。

講談ひとつ作って、さくらももこのお母さん役の人（注・講談師の一龍斎貞友）に講談にかけてもらうとか、やりたいけどギャラが出ないならやらないね。

この講談を文書化して売っていたのが大日本雄弁会講談社で、終戦後にGHQが財閥を解体するみたいに出版社が解体されるのを恐れて、印刷部門を分社化、デザイン部門（当時は意匠部門

だろ)を分社化、製版部門も分社、さらに出版もやばいと思って光文社を作ったとか、作らないとか。大日本印刷は、分社化した名残だと思うけど、現在に続く出版社のファブレス体制は、こうした戦後処理が元になっているだろう。(大枠はだいたい正しいと思うが細かいところは出版に詳しい人に間違いが無いかな聞いてみてくれ)

話を戻して、もうひとつ手塚の代表作があるとすれば、つのだじろうとおとぎプロから転身した鈴木伸一も加えたスタジオ・ゼロが、テレビアニメの無理なスケジュールで作っている『鉄腕アトム』の「ミドロが沼」を虫プロから下請けして作った。これが今のグロス制作のはしり。

と、思われる。

こうしたグロス制作を小さなアニメ会社に発注することで、今日のテレビアニメの繁栄が(功罪も)ある、と。

う〜ん、アメリカ。

二月上旬

「『そして悲しいかな、劇画工房は多くの才能を集めながら、思想の違いでそれぞれの道を行くことにあいなった』と、これにて劇画工房の談、終わりにしたいと思います」(詳しくは『劇画漂流』を読まれたし)

手塚に出したハガキはなんだったのか、これでは壮大な前振りである。

お兄さんが東京に進出して東考社を設立して、そこから貸本漫画の作家たちに漫画を描かせて、それを「貸本劇画」として、手塚らの戦後マンガとの差をつけた。

## 皆仲良くやろうね

表紙が先に出来てしまうと本編がなかなか完成しないジククスがある。世界樹の迷宮のゲームレビューみたいに



あれは『あり思』第二巻の「セヴンスリーワン」で語るネタと、被っちゃったからペインティングしたんだよ。ただ、同じ事を語っていても、「ガープス」シリーズに展開しているから、別にいいかもね。

TRPGのルールブックに書かれている文章も、できればやりたい。販促本である本書ででき

そうだけど、『世界樹の迷宮』のゲームレビューはたいして閲覧数が多くなく、完成しなくてもいいし、完成させなくてもいい。

なんとか県立図書館に行き、島本慶の文章を押さえない。

できれば国会図書館に行って、全て押さえない。

「くけー」

## 二月中旬

県立図書館に行き、「チューハイにカンペー」と行きたかったが、行けなかった。その心は、晴れる日を見込んで予定を立てたが、晴れずに雨が降り、「これはいけない」ということになった。

「PickUP!文読」はできそう、できそうと言っておきながら、できないじゃないかといわれる向きがあると思う。はっきり言おう。

そう簡単に出来ない。

いろいろ予定したものが分割になってしまったり、分割前のそれを収録しようということになり、

MEN'S ONLY02の日記に書いたものを盗用・・・自分で書いたモノだから盗用じゃない。クズカゴは盗用。ケンセイしておかないと、よくないので、とにかく、そこに書いたことをそのままコピー&ペースト。

原作の「人生相談ライトノベル」が可能なら、文章読本ライトノベル『文読』も可能では？

あっちの制作日記に書くべきか迷う話題だが、ためらわずにすると、自分の異常性欲を芸術に蛹が蝶に変わるが如く変態させた谷ザキ子とか、国粹主義で金閣に火をつける（修学旅行の回のクライマックスだがテレビアニメではアマゾンの坊主の出前に難癖つける仏教界に配慮して放送されない）三島ちゃんや、しゃべってる言葉が独自の表記法（旧字体・旧仮名遣いで慣れないと読みにくい）のサイコ丸谷などの三大文読が「文系」「体育会系」「理系？（自分から男権主義の社会におもねっておこぼれを与る小保方晴子的性格で欺瞞性に満ちた朝ドラヒロインの自意識を持つ悪）」という、「誰が買うんだよ」な内容である。（新左翼の人の「DV文読」）

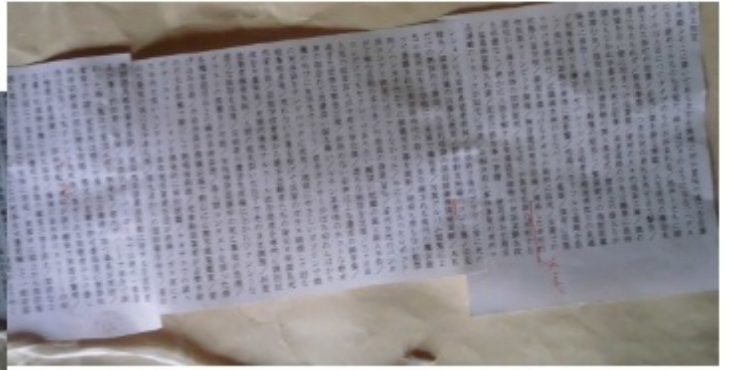
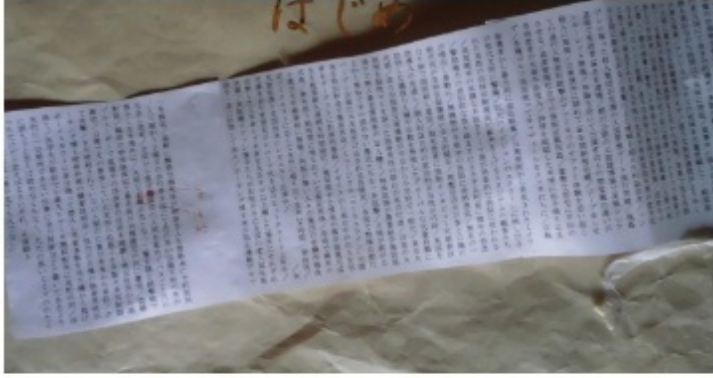
「売れたら勝ちだよ」と佐村河内くんのように囁かれたので、「読めば名文が書けるようになるライトノベルです」と、帯に書かれる。もちろん、小さく「個人の感想です」と書かれてもいるが。

## 二月下旬

別件で佐藤春夫の詩集が無いが、調べた。

無かった。翻訳作業が遅れた。必然的に文読の完成も遅れた。

## ちゃんと仕事してるよ 活字拾いっぽい



中原昌也の「誰が見ても人でなし」の引用が長文におよび、校正用に紙を切り貼りしてくっつけた

ノートの端にこの日記を書いているが、ふと、韻文性や文字数制限（調）は、お代をいただかないと、本当は触れちゃいけない話題だと気づいた。

オカネが無いから、完成が遅れているという現実的な問題があり、こんなに労働力を傾けているから、お金をもらわないといけないのに、もらえないからね。

### 三月前半

今まで、読者を甘やかしていた。

閲覧数は伸びないので、けっこうサービスをして、「これはお金をもらわないとまずいんでないかい」、というネタを提供してしまった。

今月から、日記も前半と後半、二つに分ける。

お茶を濁すために、“新左翼の人の「DV文読」”、すぐ死んで爪あとを残すキャラクターとしてひさ子が出てきて、タバコの火を押し付けられた虐待の痕を「はんこ注射のあとだから」と、誤魔化そうとする、「あの赤はぐきを殺せ」みたいなことを三島ちゃんが言い出して、谷崎子は心の中で卍的な性虐待を期待して、サイコ野郎は“問題は無い”と、むしろ親子中むつまじりと…（後日の話だが新潟の“糸”あたりの事件で屍狂事みたいなことが起きたがこの日記はデスブログだから、橋本五郎が危ない）

案の定、後日『ギャングズ』みたいに虐待されて死ぬ。

「日本よ、これが新左翼だ」

と、文壇に気を使わなくていいから、おおっぴらに書ける。

「文壇に所属していたら、こんなこと書けませんよ」

### 三月後半

ライトノベルの本のネタ取りのために、『下読み男子と投稿女子』をぱらっと読んだ。

フォント変えとか、書いていた。

あまりやったことがない。必要性も感じない。

テリー・プラチエットのディスク・ワールドシリーズの死神がしゃべる時は違うフォントぐら

いで、いいのでは？

四コママンガで殺伐とした、たとえば「お前を今から殺す」などを発言する場合に、HGS創英角ポップ体の丸文字風が役に立つぐらいしか、やってない。

それから「ピックアップ！文読」が遅れる理由を作った。

赤瀬川さんの「一行スナイパーといふもの」を書くために赤瀬川さんの本を読んだら、小松崎茂とイラスト交換してなくて、「それならイラストを描こう」ということになった。ライカの軍艦部と戦艦を描くのである。

そんなもの描いたら、完成するのも、完成しないだろう。

#### 四月初半

何をしていたかというと、「まんがタイムきらら」の付録を取り出すために、わざわざアイロンを使って、まるで自炊スキャナーにかけるように雑誌の背表紙を外して、取り出していた。



ペーセメの残滓がある部分を鉄で取り除いた わざと広告の部分を写真に写し宣伝になっている「私は宣伝の天才かもしれぬ」

こんな情報が載っている販促誌があっけないのか。

「いいんです」

これはどの番組か言えないけど、夏目三久ちゃんから交代したアナウンサーでは、「役者が不足（実力が足りない）」ので、「ああ、この番組おわっちゃうな」と思った。はやく、こちらも「文読書くの、終わっちゃう。もっと書きたいよ〜」と、なりたい。

#### 四月後半

「ノスタルジジイ五郎ちゃん」の資料が見つかった。

切り抜きをどこかにやっていたのが見つからなかったのだが、ひょんなことから出てきた。後はデスブログの回収である。

資料集めから一年経ったが、島本慶親方（独語でマイスター、このため秀磨マイスターと言われていたので邦訳おやかた）のテキストが見つからない。

「くけー」



執筆の方はよく言う順調に遅れている。

完成しても、別に売れる商品じゃないから、いくら遅れても販売機会が失われない。余計なことを書くと、児童文学だとクリスマスとかお誕生日とか、爺婆オジオバからプレゼントの機会がある。

まあ、そんなこと（文芸社以外には）どうでもよくて、そもそも文読が売れる商品なら、21世紀で何冊も出ている。

それだけの文豪（高橋源一郎とか）がいるし、これだけ皆が文章を書いている時代は無い。ただ、レベルの低い文章を書いていいという、ハードルが低く、140文字のつぶやきでどどんつぶやかさせる仕組みとか、そこでの文章は「文章読本を必要としないから書ける」のであって、文章読本を読んでうまい文章を書こうと思う気持ちはさらさらしない。

「くけー」

## 五月前半

原稿のだいたい7割から8割出来ていて、一度完成させてから校正を一ヶ月ぐらいかけて、いろいろして、なんとか完成させたい。

「ゴーストライターをさせていれば、もう完成しているのになあ」

先行で「ピックアップ!文読」をアップしたいな。

軍事探偵の話題が文読にされているので、その繋がり『ジョーカーゲーム』というアニメをぼんやりとながめていたら、観るこちら側を三話切りされてしまった。あるスパイが暗いところに入るために、片目だけに手をあてて、目を暗闇にならすというのがあったけど、それをまったく説明されないから、こちらはわからず、「このトッチャン坊やは何をしているのだろう?」と、いろいろ調べてわかった。

そんなこと説明されないとわからない奴（視聴者様）は切り捨てるアニメ。

つまり私は三話切りされた。

ジョーカーゲームにはめられていた。

こちらも説明不足で、不親切で読者を「三話切り」していないか、胸が痛む。パナマ文書でライブドアの名があって、ヒットマンを雇う金に使った（マネーロンダリング?）としたら、誰かが殺人の首謀者であったのか、オレたちのジョーカーゲームが始まる。

ジョーカーをつかまされたのは野口さんとか、仮に囑託殺人があったとしたら、それを挙げられない捜査機関はダメだろう。（司法解剖上は自死が確定）

## 五月後半

事後報告になっているかもしれないが、「ピックアップ!文章読本」を22日から26日まで、無料配布していた。

見たら、これは失敗だった。「分割前掲載」の記事は「引用文は製品版」というか、「引用文は本編で」というものを、入れ忘れていた。

広告を入れ忘れてるし、「PickUP!文章読本」という、ちゃんとピックアップを英文にした本には、まだ完成していないエッセイを入れて、販売促進になる本、フリーと有料の中間を作らなくちゃならない。

去年の五月には、何を書いていたかという、年末にはできると甘い目測を書いている。

「今年の年末に出来るかすら、怪しいよ！」

今年の年末に出せるかが、勝負だ。

去年は、今頃では「第三ライトノベル」で吸血鬼がどうのこうの書いているはずと思っていた。ネタが飛んでる。

ネタを舞台上で忘れることを「ネタが飛ぶ」という、演芸用語（おそらく隠語）があるけど、結構ネタを忘れ始めている。

## 六月前半

鈴木慶一の音楽業45年の\*\*\*番組じゃない、ライブ番組がよかったなあ。深夜の衛星放送でやっているのを、船をこぎながら見ていた。

最後に「8メロディーズ」をミュージシャン全員で唄うのに感動した。この日記のメモでは「子守唄」がどうのこうのと、余計な筆を滑らしていたが、ベストアルバムでやくしまるえつこが「スマイルアンドティアー」を歌っていて、このアイスクリームばかり食っている不健康そうな歌姫子（うたひめ、こ）が、あるキャラクターの声をあてていると想像させれば、読者もわかりやすい。

ぜんぜん文章と関係ないと思われるかもしれないが、歌詞の引用は出来たけどやらなかった。

文章読本は文芸批評だから歌詞の引用はできる。著作権料をジャスラックに払わなくていいが、批評すべき歌がなかった。「トキオ」と「スマイルアンドティアー」は同じ作詞者だけど、どっちがいいか、読み比べをするのは…これ以上は、悪口になるから言わない。

メモでは筆が滑って、いろいろ書いている。

そういえば、新潟市に赴いた際、調べ物のためにほんぽーとへ行こうとする道すがら、マンションを横切ったらゴミ集積場に広辞苑が捨ててあった。せめて新古書店で売って、お金を介在させて違う人の手に渡ってほしいが、これも仕方ない。本当は捨てられた広辞苑がほしくて、勝手にゴミを持ち出すと、資源泥棒になる。近くに交番もあるからトイレットペーパーになってもらうしかない。

「オレは、読書エリートになれなかった、落ちこぼれだああ」

合掌。

## 六月後半

なかなか、原稿は進まない。「三話切りされた」と書いているからと言って、欺瞞工作にはめられて判官贔屓してはいけないのだが、この原稿が進まないのは本当である。

少しずつ原稿は出来ていて、半分以上はできている。

ところが、急に引用文を足す要件が出来てしまった。

前に「ネタが飛ぶ」と書いたが、逆にネタを思い出したのだ。上橋さんの『夢の守り人』のテキストを「校正は人海戦術に限る」で引用する。これで守り人ファンはいや～～な予感がするが、気にしない。新しい版では、こっそり直っているはず。（後日文庫の方を調べたら、案の定修正されていた）

これから放送されるドラマの東出くんも、なっている。

文読の販促らしいことを書けてよかった。

受験生みたいに、今年の夏が勝負だ。

七月前半

ナショナリズムとナチズムは、正確には違う。

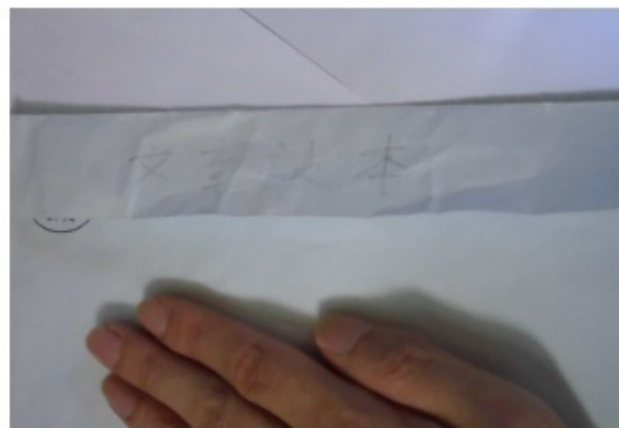
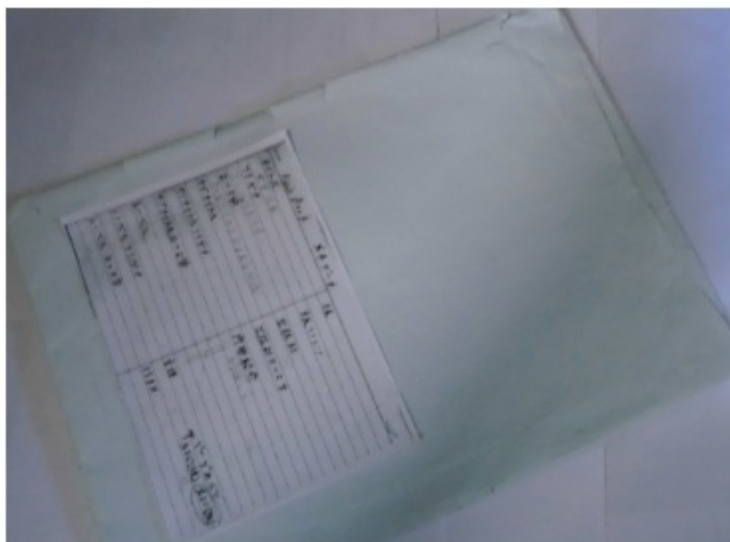
その点を文読に書いていると、文読が完成しない。

ナチズムはアリア人種しか国民として認めなくて、基本的にはユダヤ人が標的だがスラブ人やロマなどの少数人種から資産を横取りして、国庫に収めて自分たちの社会主義的公共財にしてしまおうという、「それはダメだろう」な思想である。ナショナリズムは人種が違って同じ国民だから、戦争になったら国民一丸でがんばろうとする。ところがナチズムは純血主義化してアリア人以外は非国民・二級市民扱いする。

ちょっと頭の悪い人は、こういうナチズムとナショナリズムの見分けが付いていないかもしれない。

ところがナショナリズムとレイシズムが一緒くたになった物が売り物に、商品価値を持ってしまふから悩みどころだ。

プリントアウトした紙を入れておく袋がボロボロになってきている。



**カット袋のようにプリントアウトした紙を入れて、図書館などの出先で固有名詞や引用文を書いたり修正している**

この袋、一年以上も使っているからボロボロだ。原稿が完成したら切り分けてメモ用紙に使う



エコロジー。（藤子ファンならエコロ爺…ダムに沈む村の話だっけ？ それは時間サーキュレーション爺じゃないのか？）

早く校正用プリントアウト原稿を入れる袋をパンパンにしたい。

## 七月後半

すすんでいない。

何をしていたかという、「ガンバレ！ピンポンフォロワー」の校正や修正をずっとしていたのである。『四畳半神話大系』が『四畳半神話体系』になっているのを直していたのだ。

あとは「重い」やつが残っている。

アニメーター業界では作画に時間がかかる仕事を「重い」とたとえる。

「『さよならアリアドネ』を読んだから、本当です」

書くのに時間がかかるものを同じく「重い」とたとえた。

上田万年のことを語られた『日本語を作った男』が一年前に出ていれば、よかったのに。それから上田本人の著作、東洋文庫所集『国語のため』を読めば、「語彙の多さは軍事力の高さ」はいらない。

「重い」やつがいらない。

『日本語を作った男』を読めの記述だけでいい。

『日本語を作った男』は、高橋源一郎なら『文章読本さん江』が出たから、完成間近の原稿を全没にして、一から書き直したのと同じ、インパクトが私にあった。

岩波書店の編集者が「やめて！ それだけはやめて」と思っただろうから、私は原稿を潰して書き直すことはしない。自分の中のフィルタリングが許さない。

そもそも文読は世の中にいないものだけだね。

上田万年派の勝利で、私もそちらの書き方で文章を書いている。

## 八月前半

暑くて、執筆が・・・すすまない。

なんだか、先月と同じ事を書いている気がするが、仕方ない。

騙し騙し運用していたエアコンが本格的に壊れ、フロンガスを注入しなくてはいけないのだが、フロンガスを買い、修理する人の人件費も払えない現状を

「こんなことで、『かくしごと』買えると思いますか？」

『かつてに改蔵』を読み返して、矛盾や数学や物理学の誤りを探さなくては。思わず読点抜き改行鍵括弧挿入をしてしまった。（本編を読むと活字拾…宣伝を忘れない）

たしか重力定数を入れ忘れたのは、読者から投書で発覚したのは、どこだっけ？ あのマンガでは地球に重力定数が存在しない世界だったのだ。キャラクターたちの主観で描かれた非物理の仮構された空間だからいいのである。

宣伝すると、上橋菜穂子が誤記をしてしまったのが、文読に引くことにしている。私は文読の鬼になる。

ちゃんと仕事をしているのだ。

昔は「なんで手塚治虫文化賞大賞をくれない」と思ったけど、こうしたミスがあることによ

って、選考委員の不興をかって、『地底国の怪人』のオマージュが捧げられていることはプラスにはならなかった。（もし『地底国の怪人』も読んだことが無い奴を選考委員にしていたら、それはスキャンダルだよ）

地下に潜っていく話が三百話の内、いくつかあるのも、『地底国の怪人』から惹かれていたのだろう。

パスカルの「円錐曲線試論」。

## 八月後半

いろいろ県立図書館に行ったり、新潟市のヨドバシカメラでガンダムのプラモデルを物色して、「ジャハナムがいいなあ。黒に塗ろうかな。海洋堂の大旦那が生きていたら新しいゴジラでも『赤く塗れ』と言うのだろうか？」と、くだらないことばかりしていたわけではない。

ちゃんと執筆をしていたのだ。

パソコンの前に座り、キー入力するも汗だくになったら水風呂、水シャワーを浴びて、校正用プリントアウト紙に赤ペンで修正して、また汗だくになったら水を頭から被り、まるで昭和の暮らしである。

「そんなことでいいのか、諸君！」

話を盛るとキーに汗が流れてすべって、脱字誤字が多くなる。

文読は昭和までしか寿命が無いから、正しい生活態度なのだ。

香具師だったらここで「文読を買いなさい」と、売り文句を言った後の営業に入る。それぐらい汗をかいて、紙を濡らして書いている。

でも、それが商品価値があるのは別だ。

それからエコロ爺じゃなくて、ノスタル爺だよ。Fの黒い藤子（藤本さんも全部白というわけではない）。21エモンによく似た宇宙飛行士がこれまたルナちゃんによく似たウスを…人間ではなく牛である。

七月の後半から暑くてやられている。レンタルCDを出先で置き忘れる等の不慮の事故があった。

これでは、いけない。山のように文読が売れて、エアコンを買えるようになりたい。

## 九月前半

「今の連載を読むと、秋の選抜で勝利し思わず塩見じゅんを抱きしめた葉山アキラはどこへ行ってしまったのか！」

レンタルビデオを一日延滞してしまい、延滞料を払うために後1円でたまるかくしごと基金から資金を切り崩して、基金が底をつきまたゼロに戻った。計算は違っているかもしれないが、円すいの問題で斜辺の長さ二乗足す底辺の長さ二乗を平方根で垂直辺の長さが得られるから、計算が合わなくても、いいのである。

「辻褄あわせなど、小物のすることだ」

このネタ面白すぎて、すりきれるまでつかい倒す。

東映の日下部プロデューサーが一回じゃ物足りないから、『ゴッドファーザー』のあのネタを何度も使うようなもの。

香具師だったら、「答えを知りたかったら、文読を買いなさい」と、言うだろう。オリエンタルラジオの中田くんは、インテリ香具師だ。パスカルの「円錐曲線試論」。

春日太一さんの著作を読んだ方が、早いけどね。

『あかんやつら』と五社英雄のことを書いた本、買った方がいいよ。（あからさまでなげやりな宣伝）

九月後半

だいたい、本の構成は次のようなものになる。

いわゆる台割りだ。

表紙

「序」

第一部 文読の近世

文章読本概観

大衆がプロスポーツを生み出した

人文一致主義批判

英雄趣味は人文不一致

文章力は肩書きは勝てず

第二部 文読の近代

文章教室的ネタ

校正は人海戦術にかぎる

語彙の多さは軍事力の高さ 自引→辞書編

語彙の多さは軍事力の高さ 候文→国語編

物量作戦はインフレーション

第三部 文読の現代

幽霊作家見参

History of Ghost writer

テープに吹き込めば誰だって名文家

絶筆はメメントモリ

文章礼賛

ここに「終」と引用、参考文献をつけて、裏表紙をつけて、だいたい本の見かけは完成である。

先行で、参考文献資料の開示が無いモノを発売しようか考えたが、思案中だ。

それをすると、何かいけないような気がする。

パスカルの「円錐曲線試論」のネタが無いね。

追伸 『なんくる姉さん』買いました。ねつもじ記者限定ギャグの“ごっくんボディ”の女性が活躍する、一億総活躍社会の見本のような内容で、現政権に気を使っているのかな、と的外れな感想で、締めくくる。

十月前半 「球根」

九月の末の話だが、『TATSUMI』を見返す。

貸本雑誌「影」の執筆のため、出版社が用意した一室でさいとうたかをらと集まってマンガを描くのだが、暑くて昼はマンガが描けないのは、八月に私が体験したことだった。昼は文読が書けなかった。

彼らは映画に行こうと、金があるが、こちらは『かくしごと』すら買えない。日銀マイナス金利のように、かくしごと基金（注・不正に蓄財した資金をとりあえず入れておくマネーロンダリングのスキームではない）がマイナス残高になっている。『君の名は。』を観ているのは、このためである。

笑いたいから。

お金があれば、TBSから出るギャランティーで、荻上チキみたいに二重生活、一夫二婦制、実質的に重婚ができる。「セッション22」で謝罪したらしいのだが、それを文章に起こして、原監督の謝罪文と共も、引用したい。

「あさがきた」の従業員にメカストーンを持たせて、本当（史実）は家に住まわせる話、彼（重婚メガネ）はどういう気持ちで、観ていたのだろう。お気持ちを表明されたし。

夏の日に戻ると、汗がだらだら出て、キーボードを濡らして、それで滑って打ちミスが多かった。ことになっている。

集中力が足りないからではない。

十月後半 須田ピン

今月が実は×切として、設定したかったが、どうやら完成出来そうにない。

出来そう、出来そうと言って出来なかった「PickUP!文読」は、ぜんぜん完成していない。それは夏に大詰めを迎えられず、伸びてしまったから、こちらの方もまた完成が伸びた。

少しデータも作らないといけないと思い、書籍データを作りつつある。この書籍データを電子タブレットにインして、何度も読み返して校正する。

まず校正の話題の前に、活版所で働く猫、活字拾いの話だ。

活字拾いの総労働力が出版物の総量。ここがボトルネックだった。だから、競争と選択が激しく、出版物にそれなりの権威があった。自然に権威がついた。

駄文差別があったのではなく、駄文は排除される仕組みがあったといえる。

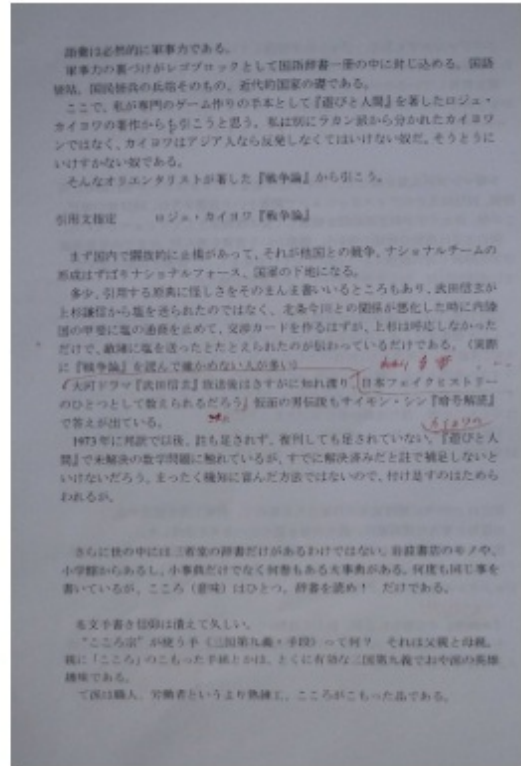
たいして校正は、校正者を減らして同じ出版点数、あるいは同じ人数で出版点数を増やせるから、ボトルネックではない。

語りもらすことになるサッカーと野球の関係。サッカーは意図的に語彙（ボキャブラリー）や単語を増やしている。フィールドをピッチに、ロスタイムをアディショナルタイムにしたり、していた。後発プロスポーツとして、プロ野球の知財的な量に追いつくには、言葉の生産・再生産（同じ用語を変更する）をしていく。

戦略性サッカーの思想。つまり数的優位の差を埋めようとしていた。後発プロスポーツだから、先発のプロ野球の言葉の多さに、圧倒的に数的不利があった。



表紙は前から作ったもの、少しずつ画像データを収録していく。



「こちらは校正用のプリントアウト、ここまでくれば掲載できる。」

いぶし銀やライパチに対して、中盤の底やトップ下で対応していく。メジャーリーグの用語もいろいろ輸入されているから、それにならって海外サッカーからの「フィジカルが強い」邦訳 → 「身体能力がある」にして、野球マンガでも使われるようになる。

なにがしたいかという、野球が言葉の生産量が相対的に減っている。サッカーから見たら20年ぐらい経って、やっと逆転しはじめてい…文読、年末には出せるといいな。

そう言うと、呪われたように年末に出せず、年を越す。(活版所で働く猫はザネリ…ジョバンニ)

十一月前半

やっとゴールが見え始めた。

だけど、見え始めたゴールテープは年内・・・にしたい。

去年とほぼ同じことを書いて語尾だけ変えたのは他でもない。校正にかかりきりになっている。

校正と事実誤認潰しの日々。人名固有名詞に誤字は無いが、豊崎さんのサキが「山に立ちの可」だと判明したりした。それが表記できない問題が発生していたりした。

それからもう後を振り返っている。

三大文読は工法が語られている。スープラストラクチャーやアーキテクチャーの作り方だ。「QA」の付録らしき「別冊文章読本」や『文章読本さん江』はインフラストラクチャーのことで、作っている文読もそちらの話だ。近代工法じゃなくて、近代工法で何を建築するかという思想の問題。

負ける建築の思想がけっこう文章教室的な気がしてきた。

東京五輪でレガシーと言い出した人(小池知事)がいるが、文読は遺産である。まだモダン建築を作る思想なのだ。

機関説をとるのも、近代文学の下部構造の工事が終わって、中心に言語芸術の美学を据えれば駆動するように、こころ機関を据えるしかなかった。

そうでなければ近代文学のリサイクルがうまくいくわけがない。

技術的に優れた文章も、自分の意に沿わなければ名文じゃない。

私のが加わって四大文読にはならない。

## 十一月後半

師走という言葉があるが、今年で文読にトドメをさせるのか、ギリギリだ。

本当は×切をぶちぎっている。他のやつも後回しにして、GRCだって、いろいろやりたい。

なんとかやり遂げたい。

こんな「何かやっていますよ」という報告をしている場合ではない。

ありんす言葉もやれなかった。

地方の幼子が女衞に買われて、姐さんについている禿の内に訛りを矯正するのではなく、訛っていてもいいしゃべり方（訛りを誤魔化している？）らしい職業弁で、実は『役割語辞典』は役に立っていないようで、役に立っている。“方言コスプレ”というのがあるらしいが、どうも花魁というコスチュームプレイをしたらこの言葉を話さなくてはいけない、苦界の中の方言だと、そこまで結論できる理路が通らかわからないので、本編ではこの話まで手が回らなかった。

奇説を唱えると、「（花魁）ありんす」から「（近代兵）ですます」であったのか、資料を集めたら、「まず落ち着いてください。ちがいますよ」になるに決まっているが、それをしている時間が無い。

そういえば、ダルのネット文言一致体を説明できなかった。ハッカー・エンジニアの役割をダルが与えられているから、ちゃんねら一用語を使うということが一種の役割語になっている。

だが、まず『シュタインズ・ゲート』（本当は中点じゃない）のゲームレビューをしなくてはいけない。それはさすがに原稿料が発生するところでない、できないから、断念せざるをえなかった。小林秀雄がランボーとの出会いを「神田をぶらぶら歩いていたら、いきなり見知らぬ男になぐられた」と言ったように、「アキバを巡廻していたら、いきなり未来の嫁とぶつかった」…ランボーとの出会いは、ラブコメだったのか。いい話である。

そんなことより「第四部 文読の未来」が無い。

文読の未来が無いではなく、出版界の未来が危ない。

うしろを振り返っている。

## 十二月前半

執筆期間がここまで長くなれば、ゴーストライティングしていないのは、明白である。

「販促目的の本書」でも書いたネタ、関川夏央さんが「オレの話をきけ」と、編集者たちを集めて一冊でっちあげる、タレントプロフェッサーが大学講義を講義録にして本にするような、省エネな執筆法もあったと思う。

週刊連載の仕事があって単行本をひとつ書き上げるとなると、大変。だから関川さんは許されると思う。私も許される。（“『ありえない未来の思い出たち』を描かなくちゃならないから”と書

くと、お金が無くて描けなくなったのに、描かないといけなくなる)

原監督の引用は駄文差別ならぬ謝罪文差別であったと思う。

文読とは排他的文芸美学域である。

何よりも、

「一笑いがほしいじゃない？」

だからネタはつめこめるだけ、もう詰め込んだ。それでも洩れたのが、「校正は人海戦術に限る」に載っている、キーボード時代になって打鍵能力が高くないと誤字脱字する話の続きである。

私は手元をチラ見しながらキーを打つタイプだけど、ブラインドタッチの方が誤字脱字少ないのでは、と思っている。画面を注視できないから、シャイクスピアと入力してしまっている。お隣のキーボードの打ちミスじゃない。画面だけに集中できるから、脱字誤字漢字変換ミスをすぐに修正できる。後は昔の『日本語練習帳』に書かれているような、「人名には特に気をつける」と語っていたのは、元記者らしいダブルチェックである。

キーをノールックで見ないと、どうも画面上で変換ミスしているのを見落としている。右肩と左肩を間違えるのは、ブラインドタッチでもふせげない。

この話はできなかった。

十二月後半 終了

年を越したら、誤字脱字事実誤認の修正ぐらいしか、載せない。

正月から何日か、あるいは正月を過ぎてから何日か、販促用の「ピックアップ!文章読本」が、福袋の代わりに閲覧できるようになっている。まるで宣伝だ。

大丈夫。「心配 入りません」。「PickUP!文読」になったのは、そう簡単に読めないので、2017年だけになるだろう。

本来、第三部の「文章礼賛」を水で薄めて一冊作るのがよかったのに、それだと何か足りない。それでゴーストライター問題が発生して、書けるんじゃないかと思って試みたら、長いレースになった。

年末の「ミセス、バツハ」のドキュメントが再放送されていたけど、調性音楽のはじまりから終わりまで、ゴーストライティングさせるのが、常套（いつも着ているコート）であったのか、そんなことでいいのかと思う。



校正のためにプリントアウトした紙をまとめるとこのぐらいの厚さになる。



パッケージから切り離して控えてはいたソルティライチの能書き。吉田戦車が「俺ボンボン」で能書きが好きだと語っていたが、やはりそれも塩である。

脱稿後に書いているが、達成感はない。

GRCの続きや「第三ライトノベル」を早くやりたい。ハーレムラノベが作れないから、「ハーレムって何だよ？ アラビアンナイトかよ」となり、たとえとしてのハーレムではなく、「それは本当の後宮」になってしまう。それはダメだろう。「紗翁浪漫」がそうになったらダメだろう。

「ぼくらの経世済民」は本来、「ぼくたちの経世在民」だったけど、“ケンポーに事故有り”みたいに、“オカダに事故有り”で、『ぼくたちの洗脳社会』のもじりではなくなった。

今まで書いた経済系の記事をちゃんとリライトして、送り届けるというものだ。



# 勝手に広告

ゲームソフトなんて買わずにaligoを買おう  
aligo買ってくらいならaligo買った方がいいよ  
(完全な敗北側の比較広告……)



年を越えなくてよかった。

翻訳の文章で一章を設けたら、絶対にやらなくちゃいけないSF小説とかで、改行せずに段落内にしゃべったことを表す「」がそのまま続く、翻訳SFのかほりする、これをカットしなかったら、今でも文読を書いている。

1月2日に修正したのが、販売できて表紙も変わっている。

まあ、電子データの献本が送られた方はお友達申請だと思ってください。こなかった方はそうでない方だと。それなりに。

ところで、値段の話をする、電子書籍でないと実は2千円は下らない。

紙の本で三・四千部刷ると、当然それ以上の値段になる。オチは一千部ぐらい在庫品になる。これを見越すと、損益分岐点を考えて三千円以上になる。

600円で税込み価格に絶対にできない。

そもそも「旧仮名遣いではない文読に、カネなど払えるか」というのが、文章読本の真面目な読者だから、在庫は運がよければいずれ裁断して再生紙になるが、ちょっと再生紙にむかない紙を使用していると、みそ先生の『オールナイトライブ』に描かれているようにケムリになる。

つまり経済学の論理が、言語芸術の美学に勝っている。

文読は美学の継承、伝承の部分があって、それが多いのは三島文読だが、「三島由紀夫の嫌う、グローバリズムを表す、ヨツムンガンドに負けました」という結末は出た。

だから、「近代文学は女子高生が小説を書くか、テレビタレントが小説を書かないと、誰も読んでくれなくなった」というね、文壇にいたら絶対に口にできないよね。プロフィールを見ればわかる通り、有名人の悪口を言う人間だから、ベッキーのことを「ご家庭デストロイヤー」と、一家に一台ほしいとか、くだらないことを書いている。

Kindle アンリミテッドは特殊な貸し本業。特殊な貸本業と言っても、レンタルそのものではなく、ペーパーバック方式のビデオレンタル店、動画配信サービス寄りな造り。というか、それはamazonプライムそのもの。

ところがこのペーパーバック方式になって、レンタル料金の何パーセントを権利を持っている人（自然人・法人）に払うことになって、ディスカウントが進みに進んだ。

Vシネは竹内力とか哀川カブトむし翔が出ている以外だと、かなり低予算で作られていて、花澤香奈という“菜”じゃない女優が出演しているものを観ると、「撮影資金が少ないのに奮闘している」と思う。ちゃんと子役を使って。パッケージの裏にあるテキストで“やさしさに”が“やさしにさ”になっているのは、校正に出す予算が無かったから。

話の内容は「お姉ちゃんをいじめる奴はわたしが許さない」という銃弾が飛び交わない姉妹愛（哀）あふれる復習譚である。谷崎。（後日このネタをやってしまったためにスプリングセンテンスをされてしまうのは、私に責任は無い）

実は一月十七日の日に、やや修正したものが、キンドルの方で配信されている。一月十七日の時点である。この頃はもう畏友では無くなった。

このように不真面目3割、真面目3割、技術的なこと4割ぐらいの配分で、いいのでは？

不真面目に眉をひそめてもらわないと、困るんだけどね。

真面目にやると、資料を調べるのがおっつかない。

「随筆の文章」をやるとしたら、近代文学者の流れと、伊丹十三さんの書いたモノを祖とする派と、それ以外（昭和饒舌体や小田島さんの駄洒落随筆）に分かれるんじゃないか、という疑いが出てきたけど、これをやると大変だ。

もしかしたら、グーグルサーチャーで調べたら、答えが出ている論文があるかもしれないが、伊丹さんが昭和流暢体？　そういうものを随筆でやって、清水義範さんらフォロワーがいて、それを私が知らずに偶然引用文献として引いた可能性もなくはない。

昭和余裕派と平成余裕派の違いが、伊丹さんと葉子様（説明不要のお性格がお悪い多和田葉子）ではないか。どのくらい性格が悪いかというと、自作小説の中編「リンク」の主人公ぐらい性格が悪い。

関川夏央さんもペシミストな部分が強く出る随筆もある。「21世紀になって吐き気がする」とか、そんなこと書いちゃダメだよお。と、思う。

2月7日の時点で「ジムノペディ」が修正されている。

裸の子供で、現在では児童ポルノにあたり、本国フランスでは演奏されないかもしれない。

川淵チェアマンがBリーグの総合的なことをしているが、やはりプロ野球との相対差を埋める作業をしようとしている。

川淵さんはJリーグでは「よくやった」と思うが下げ止まりを抑えるぐらいしか、できない。野球がマイナースポーツ化している時期とちょうど差し掛かっていたのが、Jリーグ設立期でその頃の熱狂がピークだ。

『1984年のUWF』を読むと、やっぱり語彙の生産みたいなことをしている。V1アームロックとか、Vクロス・アームロックとか、U系の技には文読を読むような人間をときめかせるワードに満ち溢れている。

今から思うと、川淵チェアマンはこうした思想性の影響を受けていたのでは？　U系が後にシュートに繋がるルールを丸パクリするような、70年代では全日との相対差を埋めるために新日（猪木）が劇薬に手を出し、80年代だとUが新日との相対差を埋める劇薬、つまりリアルファイトという一部の人を熱狂的に魅了する劇薬を使ったということだ。地域密着型も海外のクラブ経営を参考したと思うが、みちのくプロレス他のローカル団体からヒントを得ていないだろうか？

プロレスの言葉というか、文章を引用しなかったのは、資料が足りなかつただけだけど、有名な『84年』でも引用され、大吉先生の『年齢学序説』でも引かれているはずの佐山聡の「打・投・極」、26歳で書いたとされ、天才の証明になっている。（私はありえない未来の思い出七本

を26歳前後で揃えたけど、逆に自分が天才ではないということを決定付ける企画になってしまったが、『序説』を読み返したらタイガージムの着工年月日の時点で佐山は26歳)

この文章は単純明解に佐山を英雄視しているなら名文で、英雄ではないのなら駄文(新左翼にとっても駄文)。それはノートの真ん中に線を引いて、駄文の側か名文の側かすぐに判断できる。

そんなことより田中の嫁がやっていることは、こちらの営業妨害だ! 喜多嶋舞みたいに、驚かせてほしい。松本人志と共演NG(私は声優の桜井孝宏と共演NGなんだけど)になってほしい。

幼稚園ぐらいになった生まれてきた子供が、どう見ても田中くんじゃない見た目で、DNA鑑定してみたら、やっぱり違っていて我々を驚かす仕掛けをしていると切に願う。

こちらはヒキョーモノみたいになり、

「もう、昔の私ではないのだ!」

大吉先生の話を出したところで、『スーパーロボット大戦V』のコマーシャルによって大吉先生が人質に取られてしまった。救いに行かねば。そういえば大戦のプロデューサーをロリコンといじるのはギャグだけど、松山洋に対しては、(指でピストルのサインを示して)「ガチ」。

3月6日で少し漢字変換ミスを直し、参考文献の『らも』のところが修正されているはず。「巻き」がちゃんと「撒き」に直っていたり。

別にそういうことはしていないが、推敲するとか書き直しをどうするかは、18歳以上でないと読めない場所と全年齢対象に分けてかいてみると、修正箇所や問題点が見つかる。ここはアスタリスク(万能兵器)をしないといけない。ここは制限解除してディテール深く書かない(描かない)といけない。

そういうことはしていないよ。

「表向きはね」

カットしたネタで、「」内に雑誌名を入れるか、『』内に雑誌名を入れる、本によって違う禁則事項がある(ここまでは本編でした)けど、これは正典を単行本にするか、初出にするか、の思想的ちがいが出るいわゆる正典主義、正典問題がある。ブックデザイナーの鈴木一誌さんは禁則事項であらかじめ決めておくと、語っている。テレビ番組は基本的に「」だけで、繰り返し観られるようなドラマや作品性の高いドキュメントは『』になるよう、あらかじめ私は決めている。

基本、単行本や新書の方が普及しているし、手に入りやすい資料だから、そちらを「正典」にしてしまいがちだけど、ナウシカ論文でも指摘されているように、けっこう単行本化のときに加筆修正して、あんなに手塚批判しているのに「腕が手塚を思い出している」並に単行本では修正されていることもある。

事情としてはアニメ制作に追われて、原稿用紙にエンピツで描いて、全てペン入れせず製版に入稿して、罫(しきい)値変換してモノクロ製版を作り、それが雑誌「アニメージュ」に載っていた、らしい。それは単行本のとき、ちゃんとペン入れするよね。

ところが、マンガ史的には「結果的に赤本の描き版になっている」ので、モノクロ製版が「まるで手塚を思い出すように」になってしまう。

その話は、論文でやりゃあいいから、話を戻そう。

米沢嘉博さんや寺田ヒロオさんは雑誌名を『』内に入れるタイプ。米沢さんは莫大な資料を集めて、初出がわかるからこれができるし、テラさんは雑誌「漫画少年」に並々ならぬ思い入れがある。だから雑誌の方を『』内にして、作品名を「」内にする。いわゆる雑誌初出派。

ところが、なんで二重鍵括弧が鍵括弧の上位にあたる（らしい）のか、その起源がわからない。だから最近、上田万年の本を読もうと思っている。

もう文読が完成したから読める。

その功績は大きいのに、上田は知名度が足りないから『文芸ストレイドックス』に出ていない。

まあ、そんなもんだよね。

もう五月で、少し修正した。

参考文献の『上田万年』が、『日本語を作った男』の正式名称に修正されている。

木版活字と銅版活字を、木製・銅製にするか悩んだが、そのままにしておく。

副題「上田万年とその時代」を読んで、今落ち込んでいる。謡本の話とか、していなかった。

気を取り直して「発音は階級説」を補強するわけではないが、サンキューさんが…サンキュータツオさんが外国人留学生と交流すると、「日本語がうまいね」と言われるのが、外国人認定であって、悪意はなくとも差別されているような気分になるという。

カナダ人がそう話しているらしい。学校でそういうのは差別にあたると、教えられるとも。フランス語と英語二つとも公用語として認められている多言語社会と考えられるが、宗主国人からマウンティングされてきた歴史の反映、ではないか。クイーンズ・イングリッシュを話せるのは認めるが、植民地出身のキミは認めることはないというイギリス人の態度にあって、出身地を差別していた階級社会から根ざされた発言と思われる。

これが差別だと学校で教えていたのは、イギリス人が植民地出身者を実際に差別する際によく使う発言だから、気をつけなさいという、注意喚起で教えていると思われる。それを非宗主国の国の母語をうまく話せるときにも、適用していいのかは、疑問だ。

詳しくは『東京ポッド許可局』（繰り返し視聴に耐えうると判断して二重鍵括弧）のアーカイヴを聴いてもらいたい。

他にも、小林よしのりさんが学生時代にフランスに旅行に行ったとき、現地の店でおみあげを買う際に仏文学専攻だからフランス語を話したら、アジア人がフランス語をしゃべりやがったという表情を浮かべたという。

フランス中心主義、フランス中華主義、カイヨワの潜在的大ガリア主義、そういうものを持っているから、「お前、フランス語うまいな」とか、言うのではないのか？

現在の日本でたとえば、中国人の人たちとしゃべっていた人が協和語じゃなくて、流暢な標準語発言をするのも、そんなに眉を顰めるようなことはない。百田尚樹みたいな中国の人に何ら



かのものを持っている「漢文を教えるな」と主張する、太平洋戦争期で同じ失敗をしていたようなあ〜気がするの、気のせいなのだろう。

単に本当に感心して「日本語うまいね」と言っているのに、百田みたいなやつがいると旧植民地出身者を差別している発言だと、思われかねない。

満州国があった時代から遠く離れていない昔なら、本当に博士の人がしゃべる「であるだ」調（を少し訛った「デアルヨ」調）をそのまま話す人はいたかもしれないが、今はそんな人いない。それなら日本語がうまくて当然である。

上方の人は、関西弁に厳しい。

発音に厳しい。東北の人は、発音に厳しくマウンティングしない。だけど、自分たちがバカにされているような、影の農協の幹部みたいなしゃへりをしたら、逆に怒ると思うけど。

たとえになるか、少し苦しいが、犬のチャウチャウと「違う違う」の方言「ちゃうちゃう」は発音が違う。たぶん。

それを関西出身ではない人が発音すると、関西人は直そうとする。これが東北人なら、劇で東北出身者を演じる役者に方言指導する時に限られるだろう。

だから、上方が階級社会で上だったなごりではないのか？ そうして、紳士的態度は、実は女性蔑視の裏返しがあって、「あなたは素敵なレディですね」と、「あなたは英語がうまいですね」はほとんど等価だと、私が考えている。

『マイ・フェア・レディ』（これは映画のタイトルで戯曲名は『ピグマリオン』）は階級制度の攪拌。

『野ブタ』のテレビドラマを脚本した木皿泉は、原作の野ブタくんがドラマで野ブタちゃんになったのを、スクールカーストを攪拌することとして捉えていたとしたら、これはうまい。

そして『マイ・フェア・レディ』の正当後継だったのでは？

私は「ピグマリオン改題」で前（序幕）と後（終幕）にエピソードを足して、後はほとんどセリフを変えないで、演出で言語学者が同性愛者であることを確信させるシーン（手を強く握らない）を作って、狙って作るけど。著作権も国内では失効しているから上演できる。ドラマ版の『野ブタ』は狙って作ったのか、よくわからない。

「ピグマリオン改題」ができるなら、「戯曲の文章」にあたる「演劇台本とTRPGリプレイの表記ってよく似てるよね」を作っているよ。で、文読がまだ完成してない。

五月末日に、やっと画像が修正されている。

松本竜が松本龍になっているはず。

これが、まあ、ああいう、金美レイさんが言っていた躁病にかかっているかのような発言ができるのは、実はやっぱり奥さんの兄が工藤会（旧字体が出ない）の幹部で、ヤクザにケツ持ちしてもらっているから、ああいうことができたんだと。私もいい加減なことを言われたり、いいがかりつけてきた人間は、暴力団と繋がってないと、いまいち理由がわからないと思うようになった。

わかりやすく、つじつまがあわない。

普通、人はいい加減なことは言わない。

だけど、いい加減なことを言うという事は、いい加減なことをしても、大丈夫だからだ。それは暴力団のケツ持ちがしていないと、紳介みたいなこと、できない。女性マネージャーをケガを負わせる暴行をして、記者会見で嘔泣きして、裏で「チョロいでえ、世の中はあ」と、言っているに決まっている。

サイバーコネクトツーも、松山洋をののしってピョコタンがボコられていないから、もう繋がりは無いと思う。あったとしても、たまたま流通関係の企業舎弟からうっかりPCを調達したとか、そんな程度だろう。暴排法以後は、密接交際はやる方が難しい。

逆に特定危険指定暴力団と関わりがあったら、危ないよ。

ジョジョの第五部を肯定しちゃうよ。

6月9日の無垢の日ではない今日、少し、文章礼賛を修正した気がする。

「絶筆メモトモリ」に脱字があったから修正。

自動車・鉄道はあるのに、車のたとえやテキストが引用されていないのは、自動車に文学性が出るか、鉄道よりも趣味性の方が高いからだろう。国家主義というより車の趣味が出る。国家趣味である。

アメリカ車を日本が買わないのは、単純に最大の非関税障壁が、アメリカに憧れを持たないってことだろう。実際には排気量の多さで設けられたクラスで、非関税障壁があるとされる。排気量が無駄に多いアメ車はたくさん自動車税を払うクラスに分類される。

宗主国人の側からみたら、それは「不公平」だろう。「オレたちの車を買わせるために戦争した」のだから。

あって当然の戦利品が無い。

収奪を隠匿された製造品を買うのが、無い。

敗戦してアメリカに「負けたキミたちの自尊心をとり戻すにはアメリカ車を買え」を植えつけられていたのか、そこは…もうグラントリノを乗り続けることに、アメリカ人自身すら、あまりよく思っていない。イーストウッドの映画はよかったと書かないといけないけど、『トイストーリー3』でカウボーイもアストロノーツも、卒業しなくてはならない。

日本がアメ車（グラントリノ）を買わないのは、文読が廃れたことと繋がるか、それとも輸入品として米文学は非関税障壁（憧れが無い事）の前に商品価値が無くなり、他国の文学作品よりも優先されず、米文学は翻訳されないで脱落していることにつながるだろう。事実、最近アジア各国の翻訳が多い。

『疾風の隼人』が面白かったのに、普通の人にはGHQをやりこめている間しか面白くなかったのか、内ゲバ的に55年体制ができていく過程の話は、読み応えがあったのに、終わってしまった。

国粋マンガが支持を失いつつあるのか、ドッジと対立しながらも最終的にはドッジの愛弟子のようになっていく隼人に読者が感情移入ができなかったとすら、それは憧れが無いからではないか。

(後日、週文でいしかわじゅん先生は、ある「大妖怪の登場！」に理由があるように読者に読ませているが、意外に単行本の売上げが苦戦していたかもよ。仮にいしかわ先生説が正しいとしたら、日本は戦中に突入したということになる)

文章について無理矢理戻すと、カリフォルニアタイムズでは記事はAIに書かせるのを、やっている。

そこは憧れられるのか、心配。

繋がる話か、自分の男としてのプライドを、アメリカか暴力団に裏付けてもらうって、ぜんぜんカッコよくない。

単行本の売上げがよくなかったとしたら、「憧れのアメリカ車を作っている連中をやりこめること」が、あまり感情移入できることでは、なくなったのかもしれない。

今は何時だろう？

「参考文献 引用物 作品欄」を読んでもらえばわかるが、中原昌也の「誰が見ても人でなし」の発表年が脱字していた。

読み返して、“新解さんは以後はもっと便利になっている。”という一文があるが、何が「以後」、便利になっているのか、わからないので、削除した。

それを直した報告である。

忘れちゃった。第四版以後は、たしかアクセント表記がついて、便利になったのか、それを書き足すのを、忘れていたのでは？ 図書館ではだいたい版がそろっているのに、調べてくるのを多忙で忘れたようだ。

地名姓と地名を分けるために、発音が違う。他にも名前の緑さんと色の緑を分けて発音しているような、していないような。

一般名詞のときも、地名の固有名詞のときと発音が違う。新潟県内でも新幹線が通る燕を、鳥のツバメとなんかやや裏返って変な「ツバメ」と発音する。

区別できるのはいいけど、

ともかく、こうしたアクセントについて補足されたことで三国との相対差がつく、というのが新明解の付加価値だったのか、しかし実用性は職業的に方言の使い分けをしないといけない役者やアナウンサーぐらいしか、いらないのである。

ムック本の「現代視覚研究」でミリタリー好きの人の記事を読むと、「おります」が陸軍でセクト主義だから、海軍だと「あります」みたいなことになっているかもしれない。

軍隊の中に封じ込めた階級制度的差異が無くなってきた、逆にそれが何が名文で駄文か、上位と下位を決める「制度」が崩壊する。

もう八月である。

ナンバーの創刊号じゃなくて、9号に掲載されたのが「8月のカクテル光線」である。



後は、PL的な、パーフェクトリバティー、を足さないといけなかった。司馬遼太郎の『街道を行く』文庫第三巻「河内みち」を読めば、著者がピースフルリバティーと誤認している。ついでに醜男の話も読みたまえ。

戦中に弾圧されて、戦後PL教団に名前を変えたひとの道。『永遠のPL学園』は、宗教的な名文、宗教によって名文を裏付けるような、それが現代では難しいということが書かれている。

球道即人道の中村順司監督はキレイゴトしか言ってない。

おそらく、多くの問題を揉み消してきただろう。17・18歳の子供に、後輩に「はい」か「いいえ」しか言ってはいけないような「権力」を与えたら、暴力事件どころか、性暴力もあったのではないか。

だからジャニーさんのように、洗礼、よく記事になる民事裁判でも賠償を払うことになったという、あの事が、教団内でおこなわれているのではないか。元ジャニーズ事務所所属のタレントが麻薬事件を起こすのは、性暴力によって心的外傷を得て、それを紛らわせるために薬物に手を出しているんじゃないか、長年懸念して、そしてそれは清原もそうではないのか。

清原が覚醒剤に手を出したのは、現役時代の故障による後遺症で体が痛むから「麻酔」としたのは、筋違いだったのでは？ と考えている。身体の高い清原を少年が支配するには、性暴力による恐怖支配が手段で選ばれたかもしれない。弾圧された宗教団体は、おかしくなる。ヒザが痛むのに、お遍路をまわる清原に「PL教団は、仏教系統なのか？」と疑問に思った。

田辺エージェンシーがスマップ四人の受け皿になるのか、それで恨みを買ったのか、有吉と夏目ちゃんのデマゴギー・デマゴグが流された…と考えられる。真実は、インサイドの情報がえられる芸能ジャーナリストでないと、はっきりしない。ともかく、田辺社長と夏目ミクの情報が出た事によって、報復報道があったとするのが、妥当だろう。

踊らされた因縁があるから書くが、麻薬に手を出すのは、性暴力にさらされてきたからではないか。個人の意見として、障害者の射精介助をできなければ、障害者の味方ではいられないように、先輩の射精介助をしなければ、本当の後輩と言えないのではないか。

私がこの件を映画にするなら、この件を絶対に描く。映画にできないなら、舞台演劇になる。

これもよくジャックスの理論武装だけど、「麻薬に手を出すのは、弱い心を持っているからだ」という、麻薬に手を出してしまうような体制であることを批判されないためのエクスキューズではないのか。

ギークに近いナードの私には、「よくわかりません」。

トシちゃんが独立した後、「オレぐらいのビッグになると、子供も大変だ」みたいなマスコミ受けするリップサービスを、「増長している」「天狗になっている」と、批判報道したのは、ジャニーズ事務所寄りのメディアではなかったか。

これは、マスコミを使えば、名文ではないものも、名文にしてしまえるのでは、ないだろうか。

それが文読であったかもしれない。

西崎さんが正確に西崎ではなく、“西サキ（山に立ちに可）”となっているはず。

ワードソフトで表記できないと思っていたが、意外にも“さき”と入力したら山に立ちに可の崎が出た。石に大に可の碕も出る。山寄も出る。

だけど、あえて崎は使わず、（山に立ちに可）という事にした。禁則事項である。ソルティライチに書かれている能書き、丸谷の表記法とは違う。

「『（ら括弧を一桁目に入れるか、入れないかは禁則事項である。だけど、どうも紙に余裕があるときとないときの、違いに過ぎないかもしれない。

単純に短編の時は、括弧系を一桁目に入れなくてもいいが、長編の場合、括弧系を一桁から入れる。それで単行本になったら二・三ページ、詰められるときがあって、それで一枚や二枚紙が浮けば、経費が少し下がる。

一万部だけだと、一部20銭ぐらいだと仮定して2000円のコストカットだが、ミリオンセラーになったら、20万円になり、千部ぐらい余計に増刷できる。

これは単行本や文庫の話で、雑誌や新聞掲載は余裕があるから、一桁置いてから括弧系を入れているのではないか。

出版業界なら、常識的で、答えが出ている。

たいしたことなかった、と。

気づいみたら、だいたいこういうことだったと思われる。電子書籍の時代は、そんなことを考えなくていい。文字情報は一文字1か2バイトで、本のデータ様式に拠るけど、10バイトか20バイトの違いにしか、ならない。紙だともしかしたら一枚、二枚削れる。

業界の外にはあまり出ていなかった情報だったのでは？

それから新しいキーボードを買わないと、入力がうまくいかないとわかった。シフトキーの反応が悪くなっていたことに、気づかなかった。

十月になって、「PickUP!文読」がアマゾンで公開されている。

作るのを忘れていた、と思われても仕方ない。

忙しくて、ずっと放置していた。

放置しているといえば、石原慎太郎の話をしないと、いけない。

『天才』の最後あたりに、田中角栄に関わる資料が出ている。この資料には、百条委員会で発言した平仮名が使われているか、ということになる。

そして確実に「暴君しんちゃんの口述筆記」があったはず。仮に口述筆記でないと、偽証したことになる。検証したほうがいいが、忘れた平仮名を石原が原稿に書いていた場合、知っていた…つまり豊洲問題の責任が問われる。

田中角栄を取り上げた番組なんて出ていたけど、もし『天才』の中にある文を引用、それも名文としてとりあげたら、赤っ恥である。

なんで口述筆記やスピーチライターを使っていないという、見得をはらなくてはいけないのか、よくわからない。（談）にすると、売り上げが落ちるのか。

そして、資料を読めなかったというなら、誰かに読み聞かせしてもらったのか、それともそもそも資料を読まず、ゴーストライターをさせていたのか。

この件を誰もつっこまないのは、字を忘れた老人をいたぶることになってしまうからだろうか

。

だから、文読が作れなくなる。

そして、ペイメントはできない。

文読は売れない商品であった。

名文なのかというと、名文なんだけど、赤瀬川原平さんがヒーローでないと、別に意味（価値）のあるセンテンスがキャプションに書かれているわけではない。

元被告である赤瀬川さんの文章を引いて、「これが名文です。その理由はこれこれこうで……」と書きにくい。ニセ札を芸術として創った人を称揚したり、普通はしない。（包装紙として裁断する前の紙が必要だった）

実を言うと、それ以外にもためらう理由があって、皆さんもご存知の通り『こいつらが日本語をダメにした』の作者の一人だから、名文として何かを引用するのは、ためらいがある。

ただ、尾辻克彦という筆名作品の場合、芥川賞を取った文豪のために、名文引用もできる。「文章力は肩書きに勝てず」ということだ。よって、短編「出口」はすでにねじめ正一が名文として引用している。

しかし、そこは老人力である。著作『老人力』にあるように、老人力が限界まで達すると死ぬと書かれているように、御本人が宇宙の缶詰では詰められないところへ行ってしまった。

そういうお悔やみを書く場ではないので、赤瀬川さんは路上観察していて、面白みのある物件をカメラで撮影し、写真にキャプションをつけている。

そのキャプションが名文である。

1980年代のコピーライティングとは、似たようなもので趣がある。赤瀬川さんはパームボール、コピーライターたちはチェンジアップの球種。どちらもチェンジオブペース、人生のチェンジオブペースである。老人力が備わると、落差がすごい。二階からまるで投げ下ろしたようである。違うか。

くだらないことを書いていないで、キャプションをカタカナ辞典（外国語辞典）で引くと、「字幕」とある。「表題」ともある。

では、赤瀬川さんのキャプションを路上に赴く気分で、探訪しようと思いつく。カメラストラップを首にかけ、いざカメラをジョイントに仕掛けようとしたとき、ストップ。

写真はそのまま掲載できない。

写真の批評をしているわけではないから、その著作権法の引用の範囲内なのかということ、「自分でも疑問がある」と思う。

そこでイラストを描いて、著作権問題をクリアしようという小賢しい真似をする。

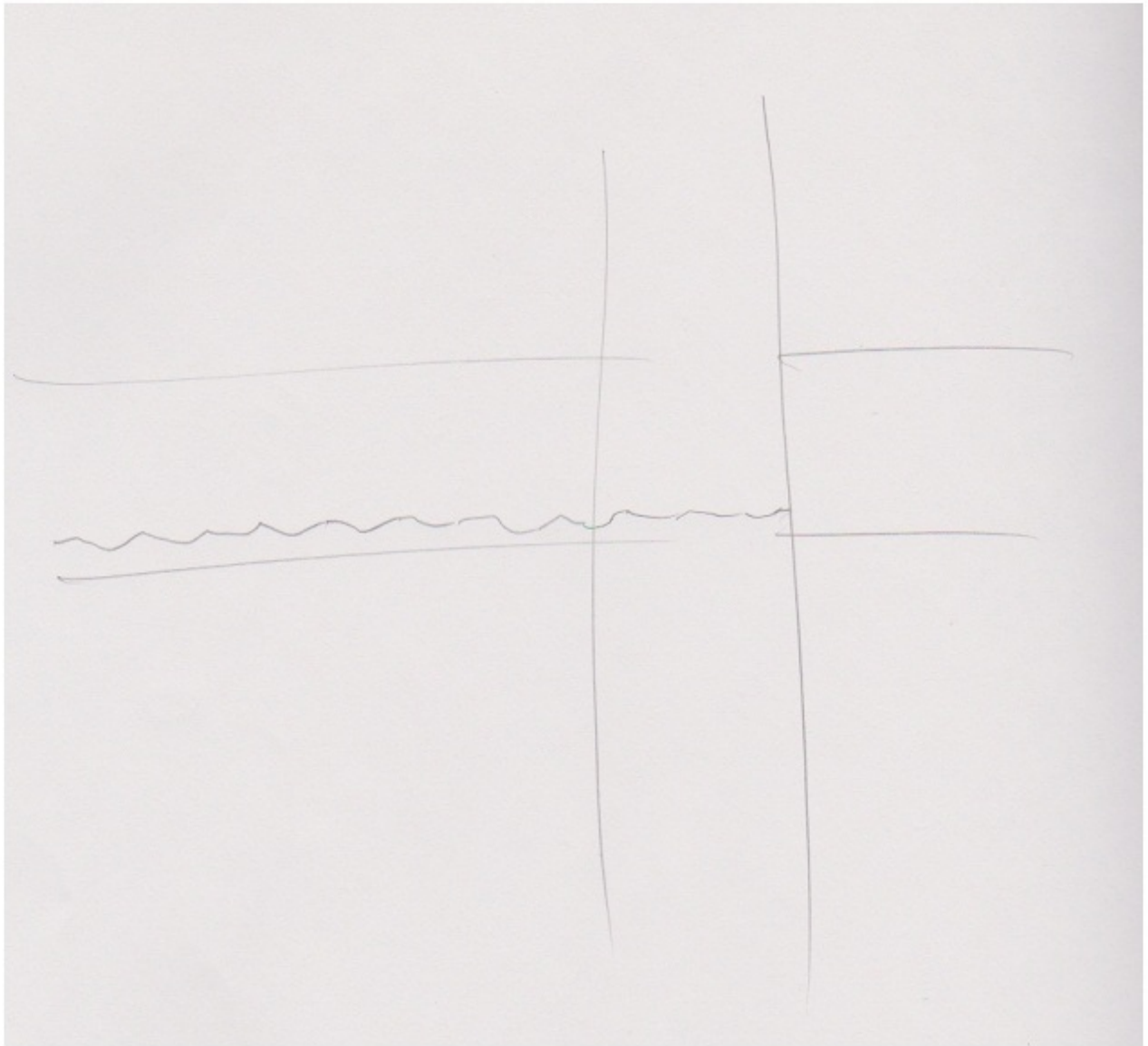
物品の前に花を置いて、撮影して「表現」になったから撮影者の著作権が発生するような、黒をグレーに塗るテクニックである。どうしても赤瀬川さんの写真を見たいなら、直接本を買って読んでもらうのが一番。要は写真をそのまま掲載できない代替案がヘタなイラストであり、そこは読者と著者のお互いが了解しあうということにしてほしい。どうしても写真が見たいなら本を買うべき。

「本を買う」というのが、大事だね。



**いまなお現役  
井戸端会議は踊る**

赤瀬川原平『老人力』ちくま文庫  
123頁の写真より



セメント表面に  
あらわれた  
トマソン心電図

赤瀬川原平『老人力』ちくま文庫  
177頁の写真より 初出1998年



## 洗濯衛星

低空飛行の人工衛星に、洗濯物を掛けている。宇宙干しとでもいうのか。一瞬のうちに、シュン！ といって乾きそうだ。

赤瀬川原平『老人力』ちくま文庫  
225頁の写真より



さすがにこんな落書きイラストでは、現物の面白みが半分くらいしか伝わらないが、いくつか見て、面白いと思うはず（実際の本にあたってみればもっと面白い）。

本格的なものは『老人とカメラ』である。

最高ケツサクが「オレのウニにドロをぬりやがって」という、野球中継が途中で放送を終えてラジオをあわてて聞いたなら、すでにサヨナラ打を決めていた時に出た名言がある。（注・『老人とカメラ』に載っているわけではない）

通称「ウニドロ」だ。

そんな赤瀬川さんが『老人とカメラ』では見出しに、「豪華な飛び出し」とか「ここは地球だ」とか「毎日が勝利だ！」などのキャプションを写真につけ、諧謔精神溢れて面白い。悪口に聞こえるとまずいけど、赤瀬川さんの真剣な美術批評は、それほど面白くない。真面目すぎるのである。美学校の教え子たちも「理屈っぽくてとっつきにくい」と言う感想を語っている。（私も『芸術原論』を事ある度に読み返すが全編読了に到らない）

こういうことは、『販促』だけに収録しておく。本編では、ロラン・バルトに触れているとか、さすがに書かないとまずいけど、別に販売促進であれば「価値はキャプションがなんとらカンタラ」と書かなくていい。

ロラン・バルトの説明が面倒であるからだ。

ここでリンクが貼ってあると、便利である。ロラン・バルトの説明が書かれている記事がリンク先にあればいいのである。（いちいちリンクを作らないけど）

「べんりな よのなかに

なったものよのお」

と、日常的に使う慣用句が出てくる。

油断していると、反則球のビーンボールが飛んでくるぞお。

販促なだけに。

“一行スナイパー”赤瀬川さんの影響で、自分も撮影した写真にキャプションをつけてみようと思う。

ライカのようなお気に入りのカメラではなく、単なるデジタルカメラに写した写真に、ありきたりなキャプションをつけてみる。

キカイ式カメラの味が出ていない。ということは、バルト氏の言うとおり、キャプションに頼った、化学調味料のような合成された味である。たまにゲルダが撮影した写真の構図を拝借したり、いろいろである。

だいたい、今書いている本書は「この人が文章読本をダメにした」である。

本編の『文読』が「これから私が文章読本をダメにする」本であるから。元々出版業界は幽霊作家を常習的に使っているから、もう名文引用が出来ない。中條さんのギリギリ二十世紀の『文読』は心配になる。幽霊作家の書いた文章を名文として褒めたりしていないか。五木寛之みたいになっていないか。

ちょっとこの場のテーマとは外れたけど、販売促進のためにやっているから、いいのである。



# うなぎを食べた～い



うなぎ家という、まストレート  
な店名にこちらも思わず  
食べる前から舌鼓  
仕事帰りに一杯引っ掛けてから  
と、その前に予約を入れて  
出来上がるの待つのも舌鼓

# 轟け



万国に轟くわが国の産業  
最近は鳴りを潜めているが  
虎視眈々と再起を  
狙っている

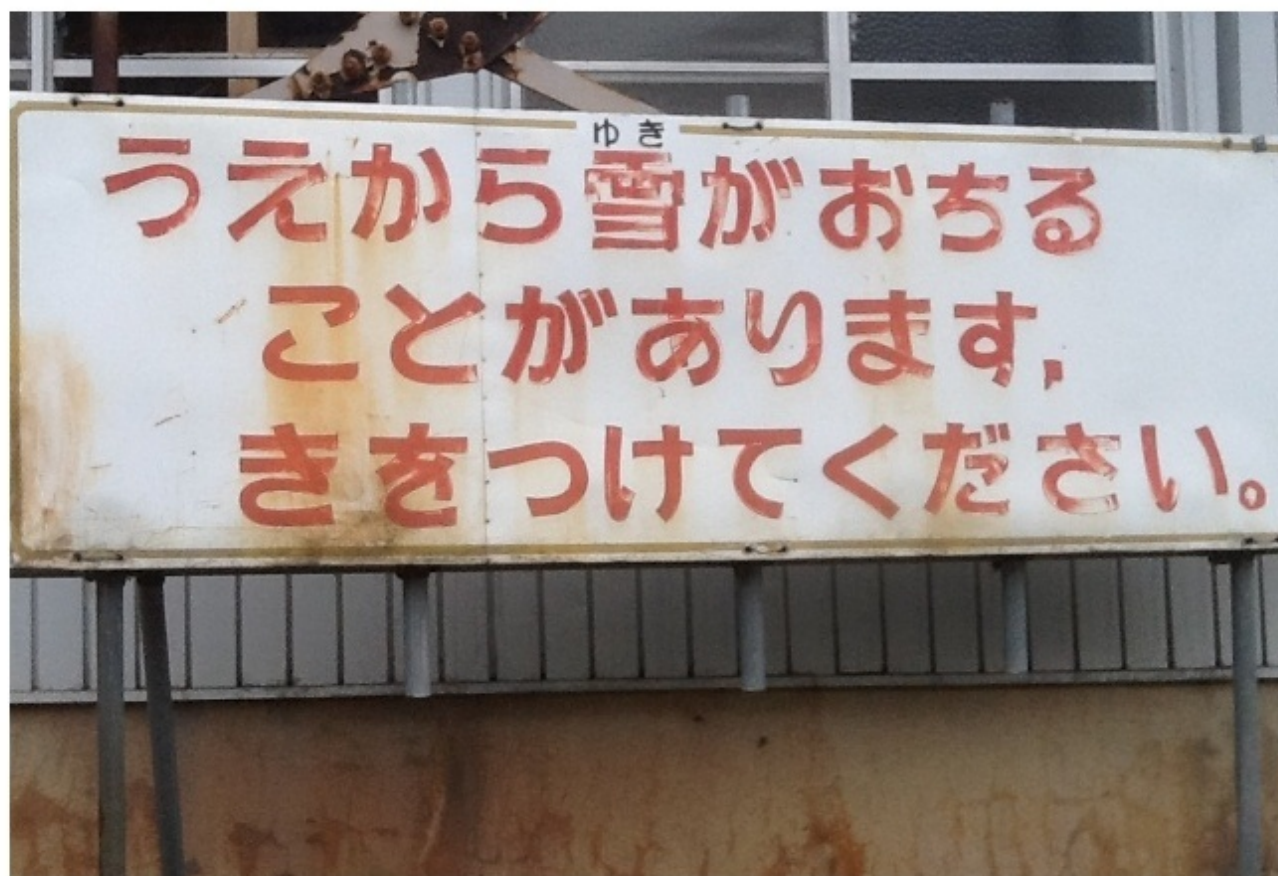


# 見切れてるよ



看板が斜めにうっかり  
切り取られている  
カメラの画角を変えても  
自動的に見切れる優れもの

## 落雪に注意



これが本当の  
上から来るぞ  
気をつけろ！



## ご近所のみつせ川



割れた瓦を置いて置く  
場所が小川の側面である  
瓦の川原・・・  
そこから連想して再のかわら



こんな近くにあの世があって  
寿命が近いご老人も逝きやすい  
バリアフリー化が叫ばれる昨今  
お年寄りにやさしいなあ

本項の場合、楽しい記事内容を目指す。

失われた学童漫画の現代版、正統後継者の「楽しい児童漫画」のような楽しいほのぼのとした記事を書く。

インテリゲンちゃんこと高橋源一郎曰く、

「ダメな文章を読むことで名文を書く素養を養う」

ということで駄文を引くというか、原文とはちょっと違うけどさ、ブツダの言葉を弟子が勝手に解釈して、一番悪いのは葬式なんてするなと言ったのに、ハナムケがほしいから葬式はじめちゃったりと同じで、ちょっと信用してほしくないんですけど。（潮出版からリイド社に移って、描けるようになった…）

ウソを言っているわけじゃなくて、ゲンちゃんは左翼だから、それでいいけど、本当は海外に輸出すべき言語芸術はハルキ・ムラカミではなく、ヒデユキ・クラタだと思う。（…どうしても「たぶん」をつけたくなるが、私にもためらいというものがある）

倉田英之さんは私にとっての英雄だ。

先生と呼びたい。

でも、文章読本の本編には引かない。

引けない。

でも、ヒーローだから、引きたい。

正直に言うと、単行本に収録されている記事じゃなくて、雑誌（ムック本）に書いてあることだから、引きにくい。

引きにくいよ。

反則であるがプロレスだって「五秒間だけなら、ベビーフェイスの鼻にせんぬきを押し付ける」こともしていいので、この場だけで、特別サービスでインテリゲンちゃんがよく『セックス障害者たち』のテキストを引くようなもの。

お葬式したっていいじゃないか。カルトだもの。

### 引用文

なんというか、何が書いてあるかよくわからないんですけど、解説すべきだと思うし、だけど解説なんて必要なんですかね？

ブルーレイ（「ガウルイ」と発音するのがオサレ）を購入してそのブルーレイにまつわることを書く連載記事であり、その第三回である引用文は『ブレードランナー』というSF映画の中でも特別形而上学的わけわからない担当のビデオソフトを高画質になったブツ（ガウルイ）を観て倉田先生（それにしても久米田康治ことクメダルマ親方に先生をつけないのに、どうして倉田英之さんには先生をつけてしまうのだろう。オオヤケの場では荒木先生に先生とつけないのに、プライベートではちゃんと先生をつけているということだと思ってほしいね。プライベートで「久米田康

治先生」と一度も言ったことがないけど)が記事をお書きになっているのである。

『〇のリグレット』となっているのは、引用者注的に言えば、『風のリグレット』です。(ちゃんと論文調で書かないとね。谷崎の『文読』を読めばですますの起源がわかる)

これは四書五経を読むが如く全裸で正座して読まなくてはいけない。

全裸待機の語源である。

こういうデマゴギーを混ぜておくのも、乙と言うもの。

本項が倉田テキストに似ているのは、谷崎の文章を読んだあとの清水義範さん(先生が付けられるようになるまで、がんばってね。応援しています)みたいなものだから。

文章読本の販売促進だから、文章についても、語らなくちゃならないよね?

メンドウだよ。

そんなことしなくていいと思うし、いったいそれを誰が読むんだらう。

高橋源一郎がインテリゲンちゃんの名づけ親糸井重里に「日本語の特徴は何ですかね」と、インテリゲンちゃんが病気休みしているときに訊く。(原宿の大患)

お見舞いに来た糸井さんは反射神経で、「そりゃ改行でしょ」と、言ったのを思い出しちゃうね。

突飛な考えだけど、Mr.KURATAの「改行無し文章」は、改行が無いから、世界文学に近いのでは? 翻訳されたものを読むと、ワンエピソード(ひとくだけ)で一段落くらいのまとめかたをしている。

国内では段落を形成するというを基本、小学校国語教育で習う。近年はセンテンス複数の段落を作ろうとしない。消費者が求めているから。それは高橋さん自身が言っているように、スピードを求めるようになった。

本をなかなか読み進められないことに、読者が劣等感

ミンキーモモという業界ではクレイジー首藤の作った天国へ行く方法で、神父も昇天なアニメ解説がある。

## 引用文

改行していることで、イキオイ、ノムさんが言うとおりに、  
「力よりもワザ。

ワザよりも知恵。

知恵よりもイキオイ。

イキオイよりも萌え。

萌えに勝るもの無し」

と、後半改ザンしたラジオCMのフレーズ通り、イキオイが改行というコーナリングで減速されている気がする…わけです。(相撲取りの勢の下の名前ってなんだっけ?)

小回りの効く小型自動車という日本の設計思想が、言語芸術の分野でもあるというより、こう



した改行による小回りが、軽自動車などを生み出してきたのだらうなんて、文章読本の本編なら書くんだらうなあ、きっと。

ここは、そんなシカツメらしいことを書く場所じゃないから。

だけど、こういう改行が無いとか、少し進めると段落が無いとか、その極北が福永信の『アクロバット前夜』になると思うけど、これどうかなあ。引用不可能だし、シカツメらしくなくても、どうしても触れないといけないし。

だって、こういうことを知っている人間が文読を作っているんであって、こういうことを知らない人に劣等感を持たせないように販売促進しているのに、「知識を持たない人に気を使って劣等感を持たせないように楽しく書こう」という手段がもしかしたら、「段落なんていらぬんです。面白おかしければいいんです」と、心から願っているのかもしれない。

それにしても、Mr.KURATAの「改行無し文章」と福永信の『アクロバット前夜』を比べるなんて、私にしかできない。樂さんみたいに、悦に浸る。

広告の章といふこと

# FREE GRC vol.1

## 収録記事

- ・大足派の避難場所
- ・鬼切り鶴子の因縁語り
- ・テレビジョンの仮想敵
- ・映「割」のラマヌジャン

# GAME REVIEW COMPLEX

amazonKindle版には vol.1

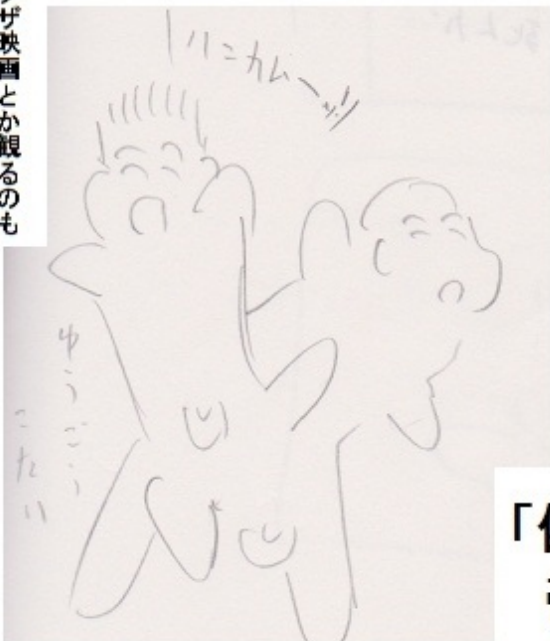
- ・トマス・デイとその仲間たち
  - ・任天堂自社株買い問題
- も収録されている

こんな見た目の春日太一さんは  
今年(2016)「オレたちのB」論」  
をサンキョータツオさんとの  
共著で発売します

「カードキョウターセウ」が  
好きな春日太一さんのために「買いなさい」

## 勝手に広告 のコーナー

「僕たちも応援してます  
帯に出してよ☆」

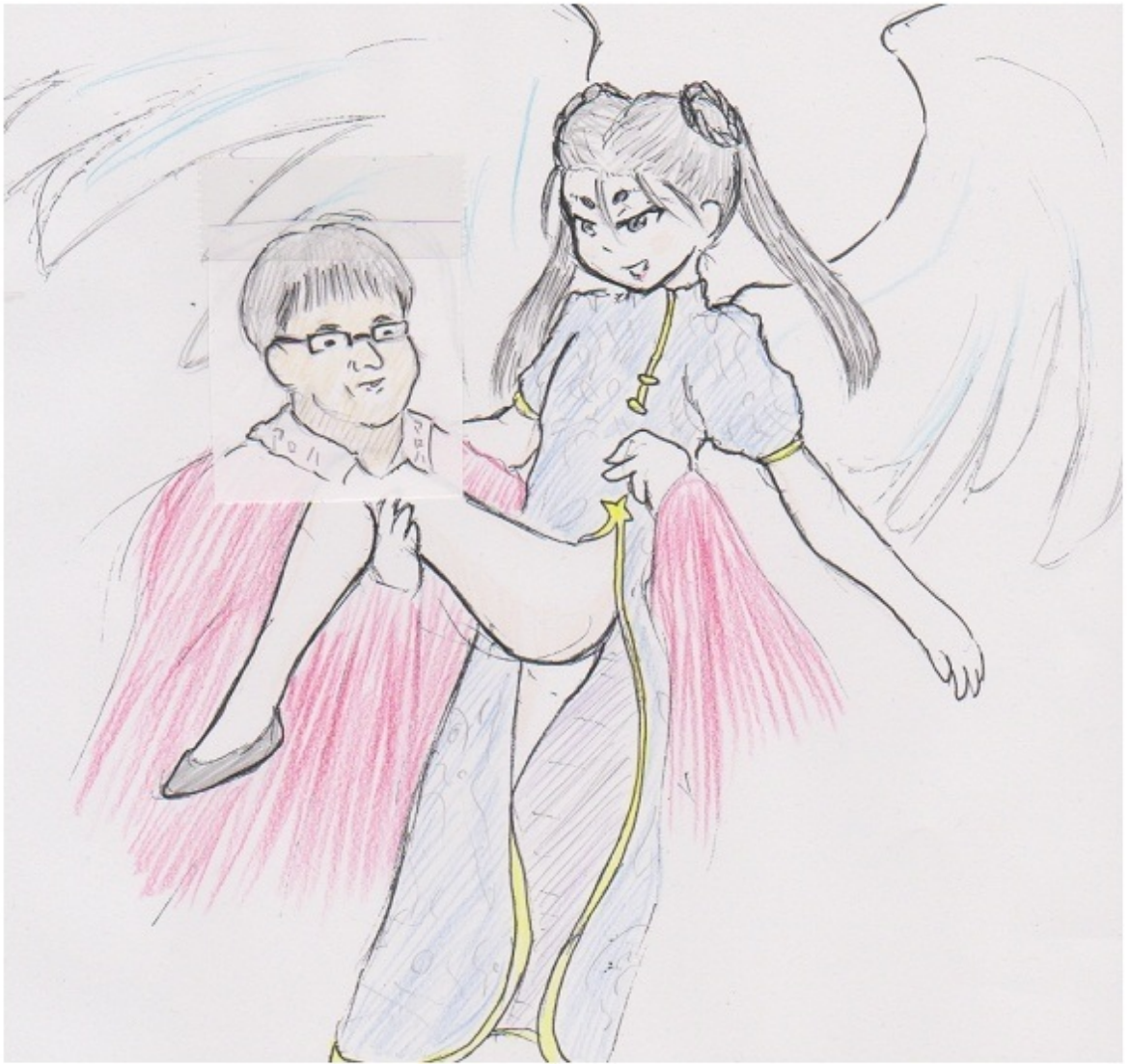


ヤクザ映画とか観るのも  
ヤクザにリクルートされそうに  
なったことがあったからでは……



# 勝手に広告

勇者死す。買って下さい



おことわり

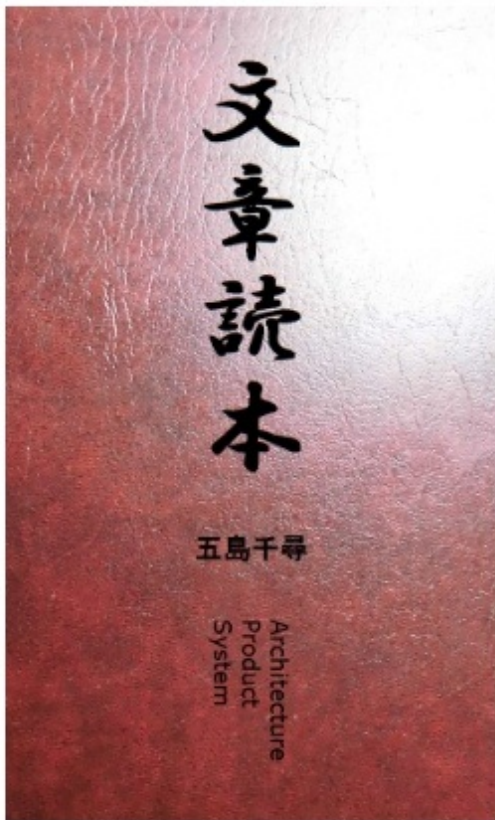
梶田省治さんに金銭の受け取りや仕事の  
斡旋を要求してはいません

それを行っているのはいしかわじゅん先生  
だけです

もし今、文学者が文読を作るなら、業界のコネクションを総動員して誰がゴーストライティングさせていて、ゴーストライターを誰がしているのか、調べないといけない。

amazon Kindle

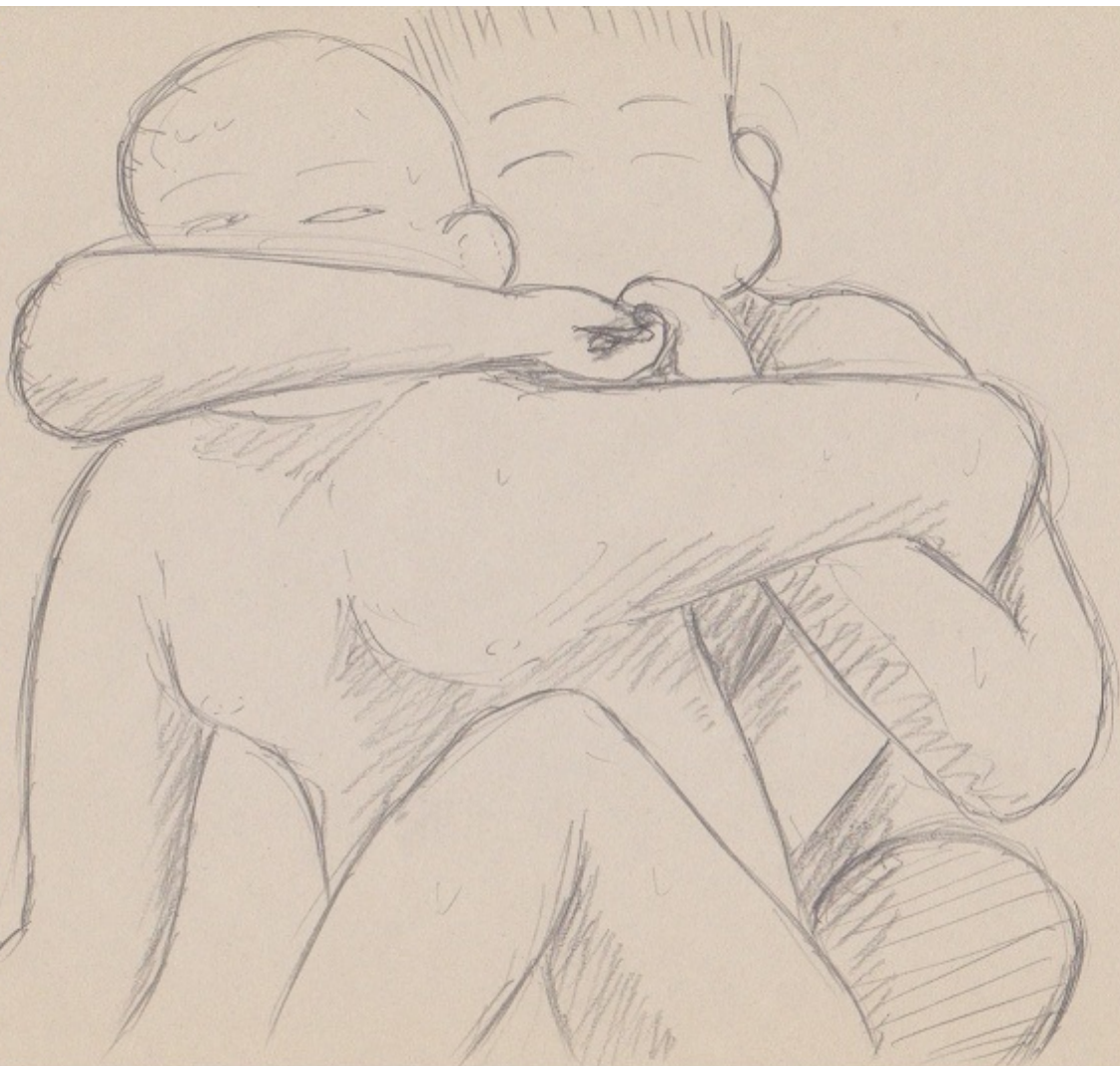
税抜き600円



[amazon BUNDOKU](https://www.amazon.co.jp/BUNDOKU)



プロレス「U」をやめて  
UWF「U」をやめて



寺田克也が描いたタイガーマスクの表紙が目印  
柳澤健『1984年のUWF』文藝春秋  
「マットに滲んだ汗というインクで描かれたノンフィクション」

勝手に広告

注・U系の技は大変危険です。足の靭帯の損傷、ハイキックの受けすぎによる脊椎の損傷でチャタレイ氏になっても、Architecture Product Systemは一切責任(庭番のNTRを含む)を負いません。



悪口だから本編に掲載できないよの

# 章

## 「ボク、ラクえも〜ん」

樂吉左衛門さんは、貴族的でエリート的である。茶の湯という知的な活動をしている奥様やお嬢さんにとっては英雄的で、だから批難（全否定の意）の対象である。

樂さんは黒い樂茶碗を製作した長次郎を開祖とする、樂家の十五代目にあたる（書き損じで十八代目と書いていて、パソ入力の際に気づき、あわてて直した）。陶芸職人の貴族階級である。

芸大といえはこの大学という、東京芸術大学の彫刻科の出身で、本によるとイタリアに留学までしている。海外留学組のエリートでもある。

大衆のこの世に批判されるために生まれてきた出生と、大衆の僻みを一身に受けねばならない経歴である。（老婆心ながら書いておくが、冗談である）

本編の『文章読本』で文章を引用しないということは、彼の書いたモノはけして名文などではないということだ。少なくとも倉田英之先生の書いた文の方が、質が高い。

彼の文章を、写真と文の書籍『ちやわんや』から見てみよう。その内容・価値は赤瀬川さんの『老人とカメラ』の百分の一も無い。（老婆心ながら書いておくが、冗談である）

出てくる茶碗とか、「どこの織部焼き？」と思うような茶碗で、「お前のオリジナリティを見せてみろ！」とエラそーなことを、門外漢だから言ってしまいそうなる。単に織部焼きの手法を試しただけの、茶碗を残しているだけなのだが。

ではその『ちやわんや』に樂さんがどんな文章を書いているだろう。

攪 乱 ・ 恋 歌	山鬼思友恋歌也	山鬼は山の妖精 友を思う恋歌なり
	乗赤豹兮従文狸	赤豹に乗って斑毛狸をしたがえ
	辛夷車兮結桂旗	辛夷の車に桂の旗
	被石蘭兮帯杜衡	石蘭を着て 帯は杜衡
	折芙蓉兮遺所思	馨草を折って恋しい人に贈ろう
	表獨立兮山之上	ただ独り山上に立てば
	雲容容兮在下起	雲は容々在下に起こり
	杳冥冥兮羌晝晦	杳冥冥として昼さえ日毎い
	東風瓢兮神靈雨	東風が瓢と鳴き 神靈の雨が降る

なんだこれは。

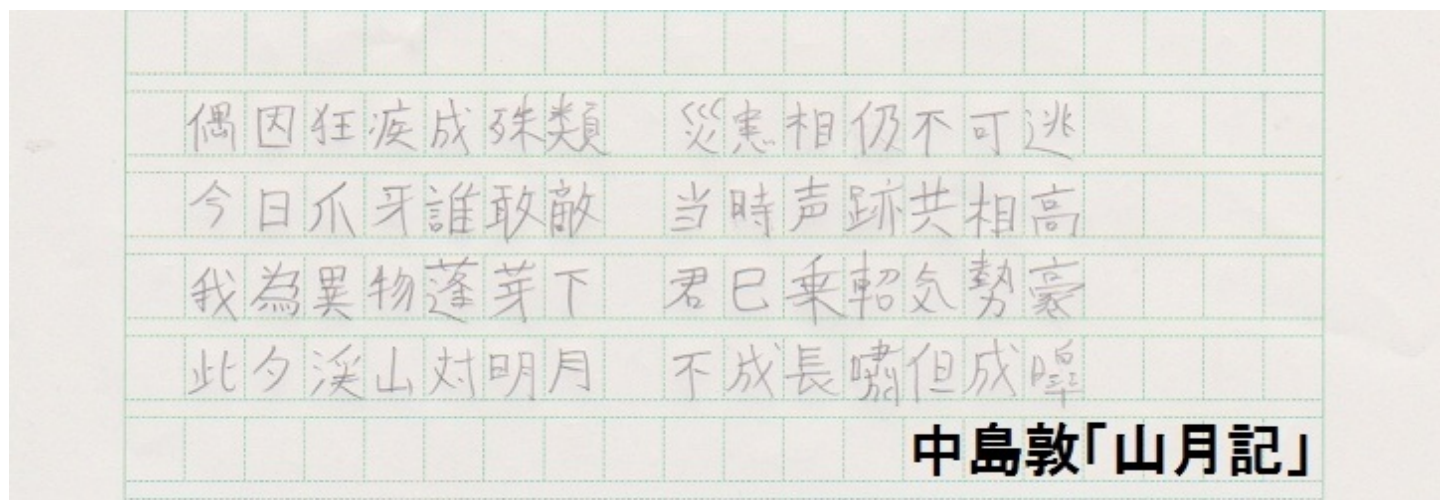
漢文を書いている。「ボク、ラクえも〜ん」と悦に浸っている、樂さんの顔が見える。“ラクきちぎえもん”だけど、これだと語呂が悪いので、「ボク、ラクえもーん」の方が、ボケた大山のぶ代さんも言いやすいだろうし、この場ではラクえもんというアダナで通させてもらう。（普通の

雑誌ではフィルタリングが厳しいのでお年寄りがボケたと書けなくなっている)

漢詩や漢文法に弱い人は、「ハハっ」とひれ伏すだろう。そのための額縁でしかない。漢字が可哀想也。

それにしても、よく考えたら樂家に生まれて、専門じゃない文章をケナされるなんて、樂さんの心情を考えると、察するにあまりある。

次に引くのが本物の文学者、中島敦の短編「山月記」より、虎となった李徴が吟じた漢詩である。



どうだろう。

漢文法を知っているなどの知識が無いと、相対評価はできない。

中島さんの創作した漢詩と、樂さんが「ボク、ラクえも〜ん」と言いながら作った漢詩、どちらが優れているだろうか？ 多くの人間がその評価をすることができないのが、ねらいかもしれない。漢詩には、名文であるという再評価を与える人が希少すぎて、定まってもいないのに「名文である」という評価が固定化してしまう。

丸谷才一の『文読』にも、擬漢文の引用がある。もちろん丸谷は名文として評価しているが、検証されにくいという問題をはらむ。

この時代に漢詩を書くというのは、額縁効果である。

陶芸家と文学者の額縁効果対決である。

一応私は文学者寄り人間なので、中島敦に軍配をあげる。そこにえこひいき以外の理由など存在しない。(しかし才能が無くて虎になってしまった李徴の詩を評価するとパラドックスが生じないか?)

言堂堂我非道也

「どうだ、オレは酷いやつだろう」みたいな意味である。

座右の「向心仁心洗心初心の四心を懐に入れるも、未熟故いまだ一周せず」の漢詩を作った人間の作ったいい加減漢詩である。

つまり漢詩を書くことが額縁効果しか生まないと、私自身が知っているのだ。

これから書くことは、危険なこととわかって書くが、ラクさんの作る茶碗も、漢詩がわかる人以外が評価できないように、茶碗がわかる人にしか茶碗を評価できないのでは？ つまりラクさんの茶碗は恐ろしいことに樂家の人が作ったから価値があると思われているに過ぎず、本当に真価はあるのか、それは大衆の時代以後に全員にわかるものなのか？ 漢詩だとか織部焼きの手法に頼らずにそれを認めさせることができているのか？ 私はここまでのことしか書けない。身分制度が無い時代に世襲陶工の作る物に全て価値があると、盲目的に言えないのだ。

問題はどんどん根が深くなり、金銭的な「市場価値があるからといって、本当に価値はあるのか？」「市場価値が無いからといって、本当に価値は無いのか？」という問題も出てくる。私は後者だけど、樂さんの場合前者だ。

こういう件は、他ならぬ樂さん本人が一番悩んでいる。

樂さんがまったく苦勞知らずの人間かというと、そうではなく、渥美清のように片肺である。

よりによって

末期の肺ガンを宣告されたのは僕の31歳の誕生日。

僕らは桂にある病院まで

なぜか桜花爛漫の嵐山をさけて看病に通ったが

それもはや新緑。

樂吉左衛門『ちやわんや』

だけどさ、同情はできないよね。

まったく感情のこもってない言葉で言わせてもらおうと「私ラクさんのちやわん好きよ」と、思う。織部焼きのオリジナルの方が数寄であるが、それに近いものを作られても、と思う。

先にフォローを入れておいたから後は叩くだけだが、これって、伝統工芸の後継者や継いだ人だけでなく、21世紀で近代文学の後継作を作る人たちにもいえる。又吉くんの悪口を言っているわけじゃないけど、それほどつまらないものないじゃない？ さらにもっと古い安土桃山からあるものを作り続けなくてはならないわけじゃない？

伝統芸・伝統工芸の担い手は大変である。そこは同情できる。

新しいモノを作ったら叩かれるだろうし、かといって近世時代からあるモノを縮小再生産してもつまらないと言われる（織部焼きのマネとかまさにそう。樂家の人間が織部焼きなんて焼いてんじゃねえ）。それに生まれてきたからずっと、他人からの期待値が高い。先代を越えなくてはいけないと誰かに言われるわけじゃないけど、先代を乗り越えていかないと先が細ると思われる。

焼き物の素人でもいえることは、初代長次郎は獅子を造っているが、同じく焼き物の獅子を造った方がいいと思う。温故知新で考えてみる程度ならいいが、真に受けて本当に造ったら、「馬鹿じゃないか」と思われるけどね。（長次郎の作品ラインナップを見ると織部焼きの起源となるのも焼いているから、私の批判は単なる根拠の無いいちゃもんである。訂正・撤回はしないけど）

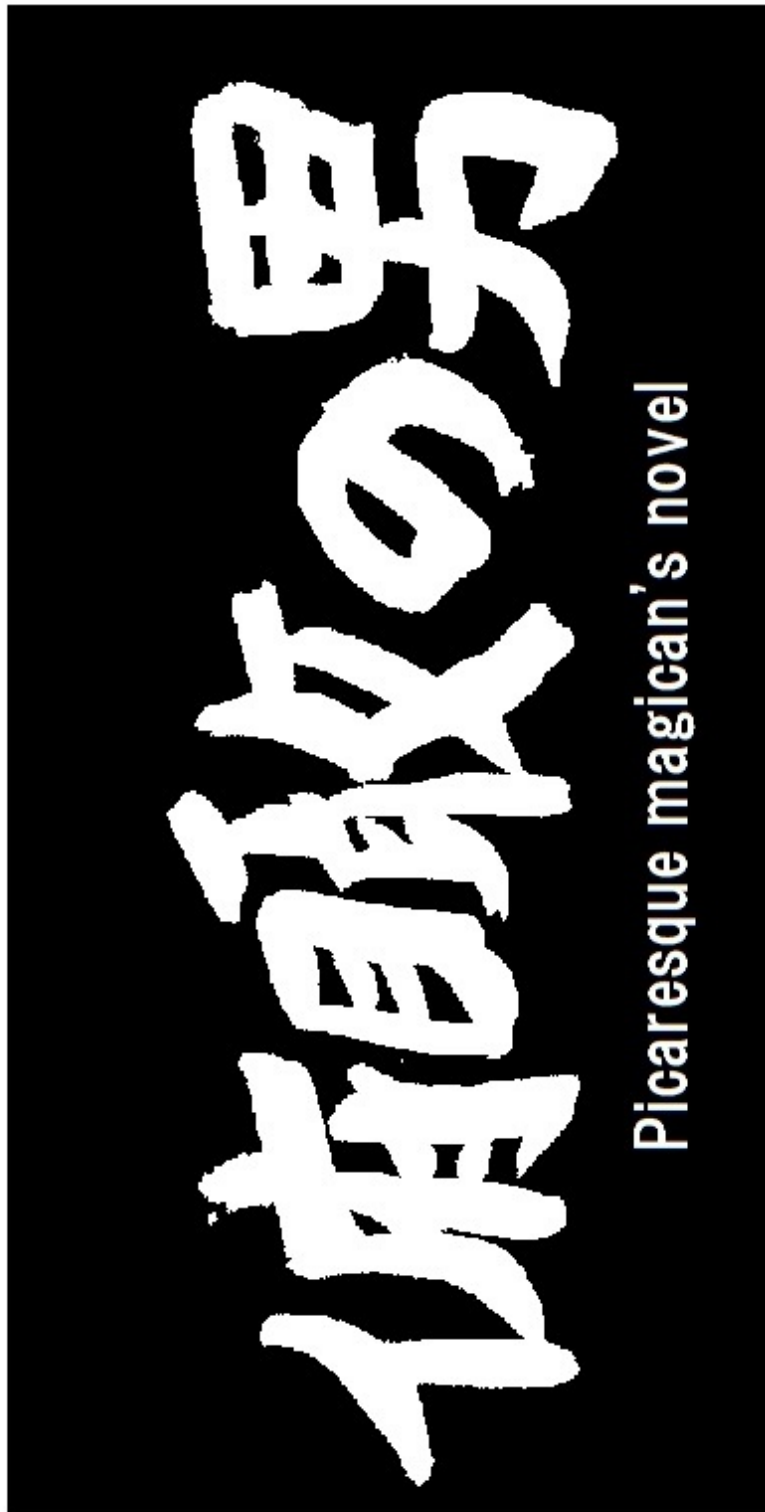
それにしても、肺がんで苦しんだことがある人に酷なことを言う私は鬼である。

狐狸の類を連れず、ポケモン（ポケットモンスターのパチモノ）を連れてくる。「上下左右

自在」の旗を掲げて、宗教弾圧の血の雨を降らせる、そんな私。

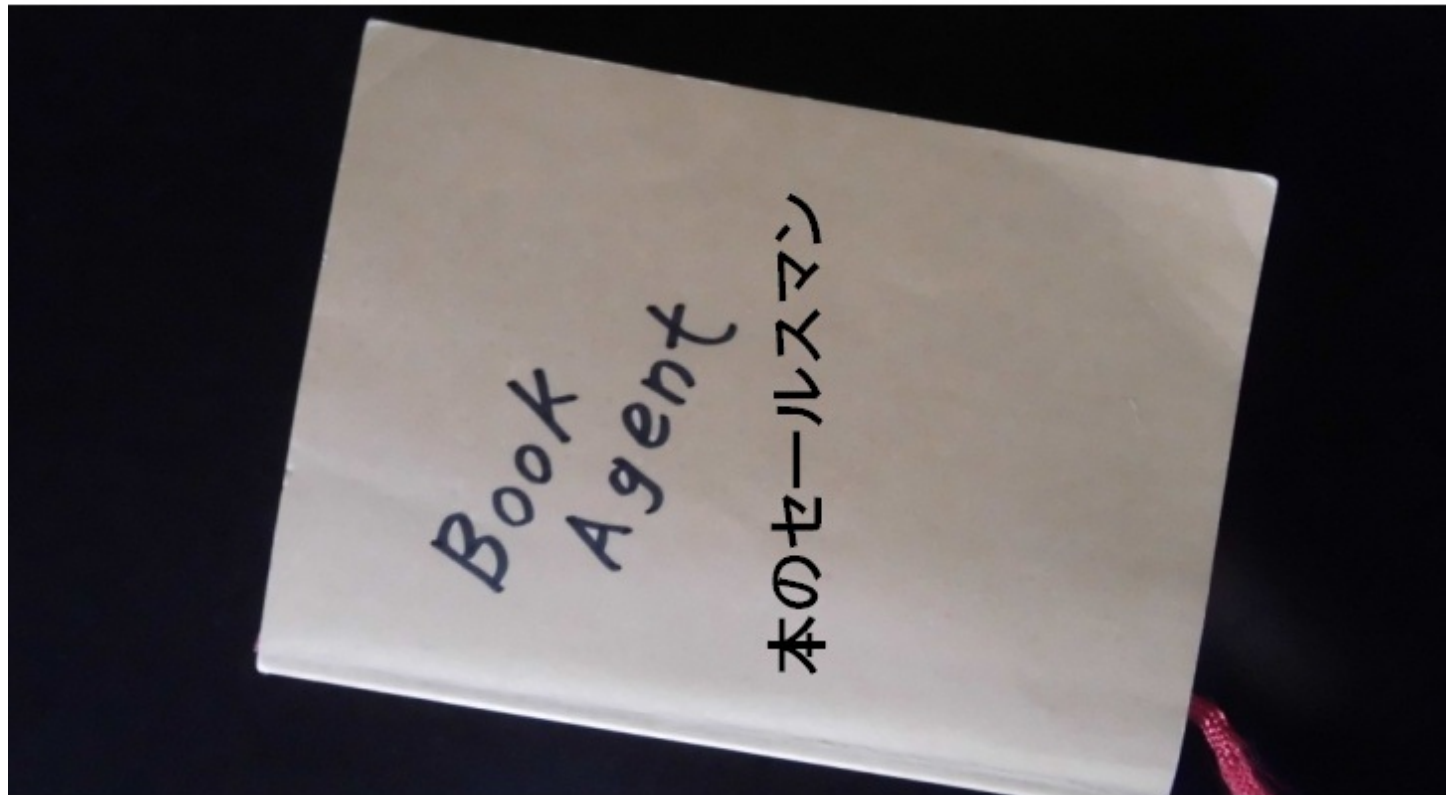
結論は、けして織部焼きのパチモノを作ったことを揶揄しているわけではない。老婆心ながら書いておくが、これは冗談である。今の時代に漢詩を書くような人間は、価値を捏造しようとしているかもしれないから、眉につば付けて警戒しろと、言っているだけなのだ。

広告



The man of the overlooking  
を全部収録





広告  
バンドデシネレビュー  
メビウスリング・ザ・オリジン  
『ARZACH』メビウス

作者メビウスは多くのマンガ家に影  
響を与えまくって、翼竜に乗って天  
国に旅立ってしまった 文中より抜粋



ブックログのpapierにて販売

¥20

Architecture  
Product  
System



## 堀井の“ブンブン”調査

---

ゲーム『ドラゴンクエスト』の中には、名文は存在しない。

というよりも、「ドラクエ研究指針」に収録している「80年代のテキスト空間」の読者でないと、堀井雄二の書いたモノを高く評価できない。それがドラクエの国内外格差を作っているという評価は、実はもう古い。勇者文化を形作ったドラクエを楽しむには、勇者文化そのものを知らないといけない。

海外にはその勇者文化は無い。

ファンタジージャンルの勇者（この言葉自体「元ネタはコレ！」と私は言える）というより、SFのスーツヒーローはアメリカ人ならおなじみだが、容易に置き換えられるものではない。一から学習しないといけない。

そもそも「ドラゴンクエスト」の商標は先にとられていて、仕方なく海外タイトル『ドラゴンウォリアー』として販売して、人気が出ずにおわる。この『ドラゴンウォリアーI』はセーブ機能があって、ロトの子孫が右や左に上下に向く仕様となっている。

最近リメイクが発売されるという『ドラゴンクエストVIII』の海外版だと、国内版には無いキャラクターのセリフに合わせて声をあてている。これは国外には通用しないドラクエテキストのテコ入れである。

それもわざわざ俳優にロシア訛りなどをやらせているらしい。しかし、たいして売れなかったというのが、悲しい結末である。コレクターズアイテムとして国内ユーザーもほしがらないモノだった。どうでもいい話だと、ある洋画を字幕で観ていて「この人英語ヘンだな」と思ったら、ロシア移民がニューヨークで働いているという設定だった。

リメイク版ではちゃんと国産声優を使って、声をあてている。（もしかしたら3DSのリメイク版が海外に販売されたら、それをほしがる人はいるかもしれない）

いちいちそんなことしなくても、いいのに。

音読しないから、面白いということはない？

後は日本語の駄洒落の問題、『アッサンブラージュ』でも語られる翻訳問題があり、「お話があります」「袖を掴んでください」「お放しっ」は、同じ意味に英訳・仏訳・スワヒリ語訳するのは、難しい。

このような翻訳されると失われるものが詩といわれる。

世界文学の逆の定義である。

本編で本来、一章もうけて翻訳文問題をやるべきだったけど、韻文問題や七五調（サービスしすぎだろ）を翻訳文で同じニュアンスを出そうとすると、困難な翻訳作業になる。

音読すると失われるものが、ドラクエテキストかもしれない。

調べると、「マザーグース」の谷川俊太郎訳は、名訳なのかもしれない。

この話はもうしないけど、漱石は翻訳されているが、ハルキ・ムラカミのように売れているわけではない。だから海外では日本文学を専攻している学生か、教えている先生ぐらいしか知らない。反対に日本でいえば、ロシア文学を専攻しているか『風雲児たち 幕末編』の読者ぐらいしか、「日本遠征記」を著したゴンチャロフのことを知らない。要はゴンチャロフ並に漱石はマイナーということ。（これに対して反論が無いわけではなく『世界文学としての夏目漱石』を読むと海

外での漱石の受容について分析されている)

実はこれが『ドラゴンクエスト』と『ファイナルファンタジー』の国内外格差とよく似ている。

漱石が国内で知れ渡っているから、海外でも知られていると思ったら、大間違いであるようにドラクエは海外のゲームファンには、存在を知られていない。海外のマンガファンは『ドラゴンボール』の作者がサイドビジネスでゲームのキャラクターデザインまでしているのを「存じ上げております」だけど、ゲームは「プレイしたことはございません」というのが大半と思われる。

他の作品との相対評価、MY FARST TER...MY FARST RPGが『ファイナルファンタジーVII』と言う外国人はいるが、『ドラゴンクエスト』が最初にプレイしたRPGと言う、外国人はたぶん極めて少ない。(MY FARST T...=ぱふぱふ)

で、国内では批判的に「五百年後ってなんだよ!」と言われて海外では売れているFFは、何かに似ていないかと言うと、村上春樹に似ている。

何故か、国内で批判されちゃうと、何故か、国際競争力を持つ。どの分野でも起きている。どの国内市場でも絶賛が多いものは輸出がよくない、ガラパゴス化が進んでいるようなのである。

懐かしいオールドスクールとたとえられている...ドラクエみたいに戦闘がターン制でいちいちコマンド入力するのは、海外では古典RPG、もう古くて遊ばれなくなったタイプのゲームジャンルなんである。

テキストだけじゃなくて、すでに時代遅れで売れないものが、JRPGで、それが好きという海外ゲーマーがいるだろうけど、あきらかなに少数派である。

とっちらかってきたから、ドラクエテキストの話題に戻ろう。

「『DQVIII』の中古価格、高止まりしていて、なかなか手が出ないなあ」

そういう話題ではない。

高止まりしているのは、いい評価を得ている。早解きして中古買取価格が高い内に売り抜けしようとする、せっかくのゲルダを育てられない。

そんなこと書くべきじゃない。

だが、もう責任が発生しないから。

『MOON』でヨシダが、

「キミの集めたラブが、キミをここまで運んでくれたんだ」

と、名言を残している。これ以上の名言・名文を堀井は書いていない。作者の木村さん自体、「ヨシダを越えるキャラクターを生み出していない」と述懐している。それはこの発言を越える名言を本人も生み出していないという、自覚から来るのだろう。荒木飛呂彦が「Fire-Ball」以上のマンガを描いていないようなもの。それは新古書店で「ソフトと攻略本セット」で7000円で売られる。

ヨシダのセリフは「サイレント・エフェクト」でオマージュしている。たいして、ドラクエテキストは...となる。バカにした物はあったかもしれないが、オマージュを捧げたモノは無い。

もう責任が発生しないから書けるけど、ドラクエテキストは私でも書ける。

なぜなら、ヨシダ以上の名言・名文を書いていないからだ。

このことを考えてみると、スクウェア・エニックスに入社できなかった人間でも書けるモノだから、誰でも書ける。

不況で全体的な労働力の価値が目減りしている。

つまり、ドラクエテキストの相対的価値をスクウェア・エニックスが低く見積もっているということだ。誰でも書けるという評価を下している以上、これは否定できない。

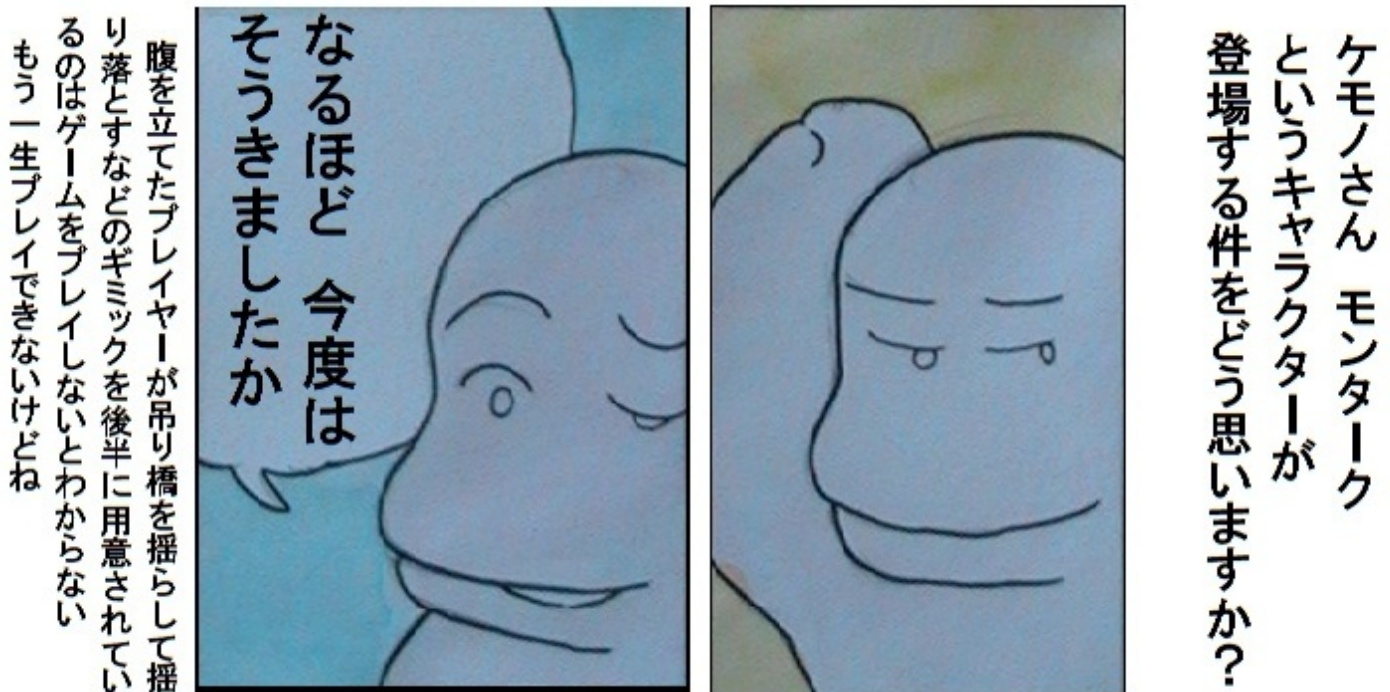
ドラクエテキストのフォロワーとして作られた「コトバを食べる、ケモノ。」は、まったく評価されない。「泣いちゃってるよ、もう」とか、「おうワサはひろまっているようで」などは、なんとなく元ネタ（ヒント・町の隅っこで用を足している人）がわかるように書いている。

それから、多根清史が「グーでなくっていいですか？」と、“いきりたっておそいかか”りたいサマルトリアの王子をちょっとオマージュを込めているけど、評価なんてされない。川上にドラクエテキストがあって下流にコトタベテキストがあるのは、読めばわかるだろう。

「ドラクエの評論を書いた人がドラクエテキストのデータベースから抽出しないわけがない」ところが、そのコトタベテキストが紙製である本として出版されて市場に出ていないことは、そういう評価を受けている。（そうした評価を下した文芸社から後日連絡があって、あんまりこういうことを書きたくないけど「バカにしてんのか？ ふざけてんのか？ テメエ！」と本気で思った）

自由市場経済下であるなら、資本を投入したということが評価だ。

どんどん製版技術が上がって、手塚フォロワーが存在できない戦後マンガ界、と、たとえていいか。



『俯瞰の男』にクリアバイブルの写本があるみたいに、わかる人はわかるように作ってる。イタリアの夢だよ。こちらは『ルパン 最後の恋』の“理の書”が元ネタだ。

こうして元ネタをわかると、大衆娯楽のブリコラージュ（器用仕事とされるがそれだとわからないのでは？）である。宮崎駿のテキストとイメージボード、メジャー作品にある。すると桃尻娘というピチピチギャルの起源が、翻訳されていないというのが、ネックになる。

村上春樹の話題をまた出せば、フォロワーがたくさんいる。たいしてドラクエテキストのフォ

ローワーは、ゲームソフトの大容量化で、どんどん少なくなっている。堀井雄二だけ、俳句や甚句や短歌の文字数制限のレギュレーションの“詩”を作っている。すでに90年代後半の段階で、詩作的文字数制限であること（これはちゃんと出典があって『ゲームの話しよう』永田・平井の対談）は、言われている。

つまりゲーム批評が、商売が成り立つほど止揚されなかった。雑誌「ゲーム批評」の休刊はそれを表し、皆がゲーム記事を求めていないかは、実は求めていなかった。では何を求めていたかという、笑わせてくれるバカ記事を読みたかっただけじゃないのか。

駄目ゲー、クソゲーの話題とか、そういうものが作られる環境にノータッチで、ゲームのデータベースを積み重ねず、中川大地さんの批評までつながるようなことは、なかがわ無かった…なかなかなかったのである。

ミもフタもない事を言えば、こうなる。攻略記事と購入していいかの判断基準となるわかりやすく、買いか無しかの二進法。買ったら攻略記事、好きな人はファミレスで語るけど、場合によっては早解きによって早く売り抜けしたり、大衆消費物として源氏鶏太（性表現が似ているか？）みたいに著者の死後残らないという、血肉にはならない「消化のいい食べ物」だった。

そうすると、輸出できないガラパゴス商品になっていく。

『ポケットモンスター』はドラクエテキストを継承する部分を控えめにして、『スタンドバイミー』のオマージュというハリウッド映画を下敷きにして、そこから世界中の少年たちの「目線の低さ」を調整している。

目線が低いから、虫≒ポケモンを捕まえられる。昆虫採集の模擬だから、そこまで調節しないといけない。

世界中の昆虫少年に訴求力を持つ。『肝心の子供』みたいにブッタの孫が虫を捕まえるような、カプセルのような容器に入れて、もしかしたら、子供が生まれて自分との違いをポケモンのある無しに見ていた、ポケモンを反射板にしていたのでは？ ポケモン世代と自分のギャップがあることを予想できて、それをシャカと孫ぐらい離れる…こんなところで純文学の批評を書くことはない。

ここで磯崎さんの話をしても、文学者の事は、皆知らないから、仕方ないからドラクエの話題をする。現代文学者のことも知らない読者に向けて記事を書かなくちゃならないから、非常に表層的なことしか語れない。（つまり磯崎さんが文読を書いて出版しても誰も読んでくれない）

国内でそもそも、研究が進んでいなかった。

韻律学的なことは言われているけど、実際のところ、どうなのかは、誰かやっただろうか？ 二人称を誤読させる手法とか中川大地さんが語っていたけど、それもやっと最近になって活字になった。元は「ほぼ日刊第二次惑星開発室」のウェブテキストである。

東浩紀のように、現代文学として大学で麻枝准の作品や『うみねこが鳴くころ』をやるけど、古典文学の専門家が、古来からある文字数制限の相対評価、七五調的に空白を空ける表記など、真面目にやった方が有意義だと思う。

そもそも論として、容量が少なかったから文章量も少なく、それは文書として記録に残せる竹簡木簡の表面積が小さい時代から歴史がある漢文を読み下す、日本独自の文化に繋がっている。（漢学者ならドラクエ訓読文化と名づけるかも）

ドラクエテキストの国体詩（？）と新体詩の違いなど、やろうと思えば文学研究ができないこ

とはないのだ。

(正直、これはやってもギャラが出ないからだろうけど、逆に海外のゲームを取り入れた教養カリキュラムならドラクエテキストに言及して、世界文学や国内のドメスティック性に目を向けさせられる)

真の日本語学、狭義の国学に収斂していく。

これを加えると韻文詩のようなダジャレ(低年齢層向け)、海外出身の日本文学の専門家が甚句やいろいろある日本文学、つきつめていくと、ルドロジーの力学(帝国主義化)ではなく、パイドロジーの脱力学で作られている。

パイドロジーのカベの内に留まっていて、超巨人のようなルドロジーの力学でないと、カベを越境できない。

こうしたカリキュラムを日本国内で作ることが、はっきり言ってできない。ジャパンアカデミーはゲームが嫌い、ひいてはドラクエが嫌い。嫌悪していると思われる。ヘンにここで表現を和らげても意味が無い。

シリアスゲームについての研究が海外で流行っても、東大が国際化しようとしたら反発されて鎖国したり、学会が軍事利用される研究はしたくないと表明したりして、ルドロジー研究を怠っている。

文章読本はだいたいプロパガンダだから、やらせてわかっているコントほど面白いものは無い。

『文章読本さん江』で、たとえとして、やらせてわかってしまった。プロレスでレフェリーが暴露本を出して内幕をばらしたようなもの。そうすると、格闘技・プロレスファンにしかわからない事だけど、UWFのような運動をしなければいけなかったのを、やってなかった。

自分も名言を残せるとしたら、短編「白き異邦者」の原作者である筒井康隆さんに頼んで「親を泣かせるのが子の務めだ」と、言わせることはかなわなかった。糸井さんの「昼間のパパは、ちょっとちがーうー」は忌野清志郎に言わせないといけない。

TVコマーシャルができるぐらい予算があるところなら、できるかもしれないけど、日本国内ではちゃんと予算がついている『龍が如く』ぐらいしかできない。(コマーシャルに名越さんが出てくると笑う)

そもそも、もうビデオゲームに名言・名文はなくなっていく。

その意味では近代文学と同じかもしれない。

百年以上前の近代文学は、21世紀の今、通用しなくなっている。

・・・さすがにフォローしないと、まずいだろう。

必要ないと思うけどフォローをすると、ドラクエは名シーンを生み出している。

『IV』のラストシーンで導かれし者たちが集結するシーケンス、『VII』でペペがずっと自分を見守っていた人物に会う(とってつけたように「遠景が素晴らしい」とか、『VI』のあの空飛ぶベッドは名シーンというか「あれは名言、名文なんじゃないのか?」)だけど、メアリー・ノートのパクリ(この程度の元ネタぐらいわかるだろう?)だから、除外。

CDなどのオリジナル音源を編集したものは、聞き返すと音響演出が優れている。それは中村光一の手柄だろうと、評価するのは、いけないことか? 腑分けしていくとドラクエテキストが占める割合って減っている。

それはどういうことかということ、意外にも、名文・言葉じゃなくてストーリーテリングと演出が優れているのが堀井雄二で、劇画原作者小池一夫の弟子筋というのも、後日知って納得した。

オルテガの息子・勇者ロトは、その研究はもう終わったから「次のことをしろ」と、「ドラクエ研究指針」で書いているが、売れないからね。ただ読みできるところしか読まない。

メジャータイトルのゲームソフトの「謎本」の類ですら売れない。それでゲーム批評、その小区分のテキストが成り立つわけが無い。お金を払ってもまで、ゲーム批評を読むことは無い。

ちょっともう、まとめに入ろう。

ゲームプレイヤーはドラクエテキストの評価は高い。

しかし、世間的な評価は低い。

作ってるゲーム会社の評価も低い。一般の人は超低い。

このギャップは埋まらないだろう。漱石の国内評価と海外の評価が埋まらないように、永遠に埋まらないだろう。

文章読本を書く人間がドラクエテキストを本編で名文として引用しないということで、その差のみで埋めるプロパガンダもやらない。

本編になんで『MOTHER3』の引用があって、ドラクエシリーズのテキストの引用が無いんだって、そこは“ヘコキムシのきおく”のリダが語った記録を、新漫画党のメンバー園山俊二の『ギャートルズ』で“「ヘイ・ジュード」をかけながら読め”と書いたように、「ジムノペディ」をかけながら、引用文を読めと言いたいじゃない？ そういうことをやりたいと思うほど、ドラクエテキストには引用する動機を持たない。そんなものは非正規の社員に書かせれば良いというスクウェア・エニックスの評価と同等になる。（もう一度書けば資本を投入していないので、「隗よりはじめよ」をしていない）

昭和末期の映画業界と同じ事になっている。正社員のスタッフと非正規で雇われた人は待遇と技術差がひらいていく。映画産業が衰退して経営効率化が進んだからこうなったが、ゲーム業界も同じことが起こっていないか？ それで伊丹十三さんが作ったうまい飯で撮影スタッフは恭順してしまう。「このうまい飯が食えなくなると思うと絶対に逆らえない」と、獄から出てきた囚人みたいなことを言っているから、映画スタッフは普段、獄に繋がれた生活を送っているんじゃないかと、思われる。（それで予算をちゃんとつけて角川春樹が映画を造るとやっかまれて、『金田一耕介の冒険』でそれをパロディにする）

結局、文読で引用せず Kult ガエンジンのテキストよりも低いという……

Kult ガで思い出した。クマトラって誰のことを指しているのか、わかるんだよ。リダは矢沢永吉ではなく、しろいふねって何かわかるわけだ。とはいえ、リダの話は『成り上がり』で矢沢永吉の話聞いた経験があるから、書けたらうけどね。



散々とっちらかしておいて結局何が言いたかったかと言うと

ドラゴンアカデミー  
ぷらすで フォズ  
大神官が……

クマ！ それ  
以上いうと  
殺処分するぞ

CRYSTAL FANTASYや  
ようこそへ魔王軍も

**オススメ**

SMAPのゴローちゃんのテレビドラマは、散々である。低視聴率に落ち込み、「あんたホントにSMAP？」と雑誌に書かれるぐらい、散々なのだ。唯一覚えている『二十歳の約束』は佐野元治の「キミはSMAP？ ホントウなのかい？」としか覚えていない。

読売新聞の解説員の橋本五郎ことゴローちゃんも散々である。

小林よしのりが「高橋源一郎がSERLDsを集めて民主主義の話をしているようで、実は新左翼運動のオルグしている。それをノスタルジジイ（高橋）が騙されやすい純粹まっすぐ君にしているのである。何かの運動をさせて、実態はオルガナイゼーション（通称オルグ）して新左翼陣営に引き入れる。

文読を読めばわかるが、「歴史修正主義者はお前のことだ！」と

ゴローちゃんも同じである

今までの文読や、文章教室系で

英雄趣味は、人文一致主義しないというのが、

だいたい、奥さんにしたことを鑑みて、中島らもから小林秀雄、原辰徳は人文一致なのかというといわれると……（最後まで語らず）

吉田清治の証言、慰安婦ではない人物だから嘘であっても、自分は傷つかないと思ったら

慰安婦さんの証言が、裁判がある程度公正さが求められる場であれば、証言が採用されない発言をしている。有名な発言が一致しない人、歓楽街があってその娼館で働いて軍人さんが客にいただけなのに自分は慰安婦だと言ったり（従軍して前線基地の後背にいないじゃん）、「さすがに嘘はまずいでしょう？」を、性的な被害を被ったから、正しいに決まっていると、ゴローち「ミヤネ屋」で言ったりする。

パラドキシカルな問題として、戦前には身分制度や階級社会があった。裁判などで、どこまで不公正があったかは、記録を見ないとなんとも言えないが、華族士族の序列があり、爵位があった。

そうした環境から発生する労働力の先物売買を人身売買と西洋の人たちは言いたいらしい。

自由で民主的なアメリカと言われるが、建国からリンカーンが起こした南北戦争まで、白人は奴隷の黒人女性を犯して出来た子供を、奴隷市場に売っていた。彼らが言う、人身売買である。

同じことを日本はしていたワケじゃないのに、過去にこのようなをしていた白人のアメリカ人が日本の過去にとやかく言われるのである。

アメリカの建国から南北戦争までが、日本の近代国家設立から太平洋戦争までではないか？  
自分たちの人類史としておかしいことを全て日本に押し付けていないか？

アジアで三角貿易みたいなことがないと、自分たちが過去にやったことを批難されかねないと、スケープゴートを日本にさせようとしていないか？

これって、ゴローちゃんと同じじゃない？

新聞に読者は戻ってこない。



資料集的な章

## メモ紙の写真コーナー

---

基本的にゴーストライターはマズいという立場をとるから、こちらはゴーストを雇ってテキストを書いていないということを主張しようというコーナーである。プロパガンダである。

本当はゴーストライターを雇って書かせるほどお金は無いし、そもそもメモ書きを見せても、それがゴーストが書いていない保証にはならない、パフォーマンスに過ぎない。

なんだろう。

夏休みの思い出作文コンクールに出したら、賞を取ってしまい、

「全部お兄ちゃんに書いてもらいました」

というのを言い出せないような、そんな夏休みの楽しい思い出である。

うっかり、ギャグでケムにまこうとしたが、たとえ動画サイトなりに執筆中の姿を撮影したビデオを配信・中継しても、パフォーマンスにしかない。

たしかにプリントアウトした原稿に朱を入れているのを写真撮影はしている。

しかし、それでゴーストライティングさせていないという、根拠にならない。

どうしたものかなあ。



近代女子エリート(6)

文章の時代

文章で「自分」の文章が中心となる  
早稲田時代

中世に比べて、文章の中心が、  
エリート層から、  
近代エリート層、  
国民は、  
国民は、  
国民は、

中世の階級社会、近代の国民国家、  
文章の時代、  
文章の時代、  
文章の時代、

白痴の主張

高橋信彦が、

文章の時代、  
文章の時代、  
文章の時代、  
文章の時代、

文章の時代、  
文章の時代、  
文章の時代、  
文章の時代、

文章の時代、  
文章の時代、  
文章の時代、  
文章の時代、

文章の時代

文章の時代、  
文章の時代、  
文章の時代、  
文章の時代、

文章の時代、  
文章の時代、  
文章の時代、  
文章の時代、

文章の時代、  
文章の時代、  
文章の時代、  
文章の時代、

文章の時代、  
文章の時代、  
文章の時代、  
文章の時代、





### 文芸のヴァルハラ

私の三番目のありえない未来の思い出である『シルエットアクター』では、岩松了をモデルにしているイワマツ団長の劇団がナンジャモンジャ劇場をランチサイズにしている。(岩松了率いる劇団は東京乾電池だっけ)

そこは演劇のヴァルハラだ。

少し前に劇団員の構成をしたが、それは私にとってのドリームキャスト、生前の吉田玉男や伊丹十三をモデルにした人物がいた。個人的に、心の力の話は、演劇論を語っている気がする。

第三舞台に所属し、将来を囑望されながら交通事故で亡くなった岩谷真哉の似顔絵と同じ見た目のアルト。

生きている人も山崎清介などの演劇人、文士劇の方からは前川麻子や古川日出男がいる。

時間が経てば、彼らは皆ヴァルハラ的英雄となる。(注・残念ながらゲームソフトの中にあるそのヴァルハラ空間に彼らを封じ込めることはできなかった)

これらのことは今日ではなく、数年前に文章読本を上梓できていれば、そんなに大きな問題ではなかった。

元々、山際さんや鴨ちゃんなどの、前から亡くなられた人たちの文を入れるつもりだった。

赤瀬川さんが亡くなった辺りで、文章読本は上梓した直近なら、そんなでもないが、時間経過でどうしても「文芸のヴァルハラ」になってしまうと、気づいてしまった。

1999/11/18

ヴァルハラと月に似ている ずっと前から



エピソードのストーリーを再現してほしかった。うらなは存続のコンセプト

「アニマルパンチ」や「丸齧り」というスキルを取得できるベットのクラスタになっているのは、異論の余地は無いだろう。

【アニマルパンチ】などの空手技を得るだろう。この変形がマスターし依存ではないが「アニマルパンチ」や「丸齧り」というスキルを取得できるベットのクラスタになっているのは、異論の余地は無いだろう。

属性系もガーブスを手本としている。「叩き」「切り」「刺し」で防御点を引いた後のダメージがそれぞれ、「1（注・ガーブス無し）」「1.5」「2」倍のダメージボーナスが得られる。これは叩きでは皮膚表面しか損傷が無く、切りでは出血、刺しでは内臓などの重要器官が損なうという、解剖学的な理由からである。（そのため内臓の無いモンスターのダメージボーナスがつかない）

これを『世界樹』では炎と氷と雷などの属性と等しく扱い、「断」「斬」「突」として置換して、弱点であればダメージが増大、耐性があれば半減やほぼ無効に体系を施している。さらにガーブスにはヒットポイントが設定され（生命力の半分）、『世界樹』では腕封じ足封じ頭封じの封じ状態という、状態~~変化~~の一種に取れている。これは極めていい。  
Wizにおんぶにだっこしたゲームシステムではなく、ガーブス・ペーシックをビデオゲームに、紙からケイ素にコンパイルした手続は、高く評価できる。

D&Dに比べて、ガーブスは相対的に科学的である。→  
D&DはSFは（ルール上）表現できないが、ガーブスではSFを（文明レベルを設定すれば）表現できる。したがってシナリオ上も科学的にSFを表現できる。（Wizでも「VI」の途中から唐突に、『VII』ではもはやSFとなる）  
ゲームシナリオはゲームシステムに規定される。私は古い人間なので、その逆はあってはならないと考えている。なぜなら駄目ゲームが生まれると知っているから。  
ゲームシステムに即さないゲームシナリオを作るのは、近年でもよくある。それが『ドラゴンクエストIX』だ。

小さい字  
ガーブスシステムを主に触れたが、他のTRPGからも職業のアイデアに吟遊詩人の魔曲がボードのスキルに、仙人の禁術がカーメスカードのスキルに取組を回っている。これらにも触れると煩雑になるので、各自で調べられたし。ちなみにレンジャーが出てきただけで、伊藤計劃さんが遊ぶ。

このように、校正下読み用プリントアウトには「ガーブス・ペーシック」を見つけた後に修正した朱が入れられているが 私は『世界樹の迷宮』のゲームレビューを完成させなくていいし、完成しなくていい。（宣伝）

see Genetic Universal Role Playing System  
この意味のプログラムはデータを元にしたものだ。

『世界樹』のスキルポイントはガーブスのキャラクターポイント（CP）だ。このキャラクターポイントを消費して能力値を上げ、特徴を取得するのがガーブスだ。もちろん技能を取得する際にも、CPを消費する。余談としてICPにつき二百時間の訓練をしているというのがゲーム内での設定だ。『世界樹』はWizから受け継がれた伝統にして既存のレベルシステムに、このキャラクターポイント制をうまくはめこんだ。正確に言えば、『禁断の魔筆』あたりから、スキルシステムはWizにて導入されていた。『世界樹』ではより洗練されている。どんな技能も好き勝手に得られるわけではなく、前提条件が必要となる。

「A」の技能を取得するためには、BとCの技能水準が~~それ~~以上が条件。2という技能は多々ある。これも『世界樹』では体系化されたスキルツリー（技能のユグドラシル）として、名残が残っている。後述する格闘動作、技能と魔法をスキルと一本化し、もう一度職業依存に還元している。  
こうした技能的な起源も、ガーブス由来が見受けられる。技能<応急処置>があれば、戦闘後にHP回復の後処理（傷口の洗浄・止血処置をしたとになっている）が一度できる。これが『世界樹』ではメディックの戦後手当になっている。

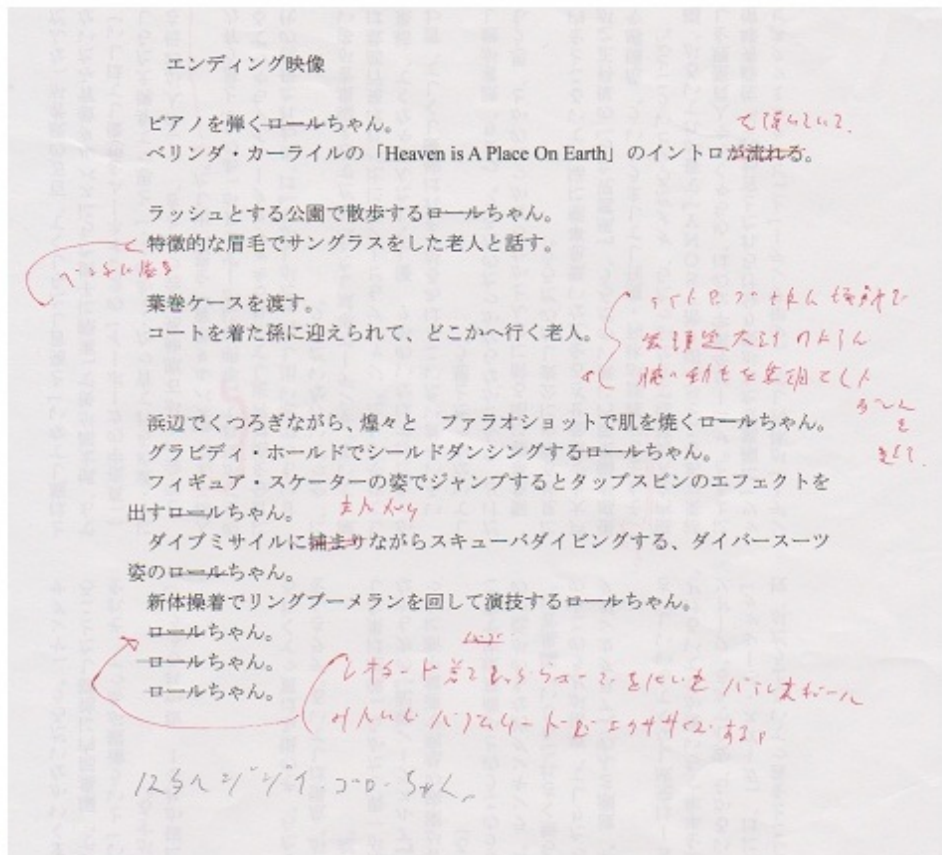
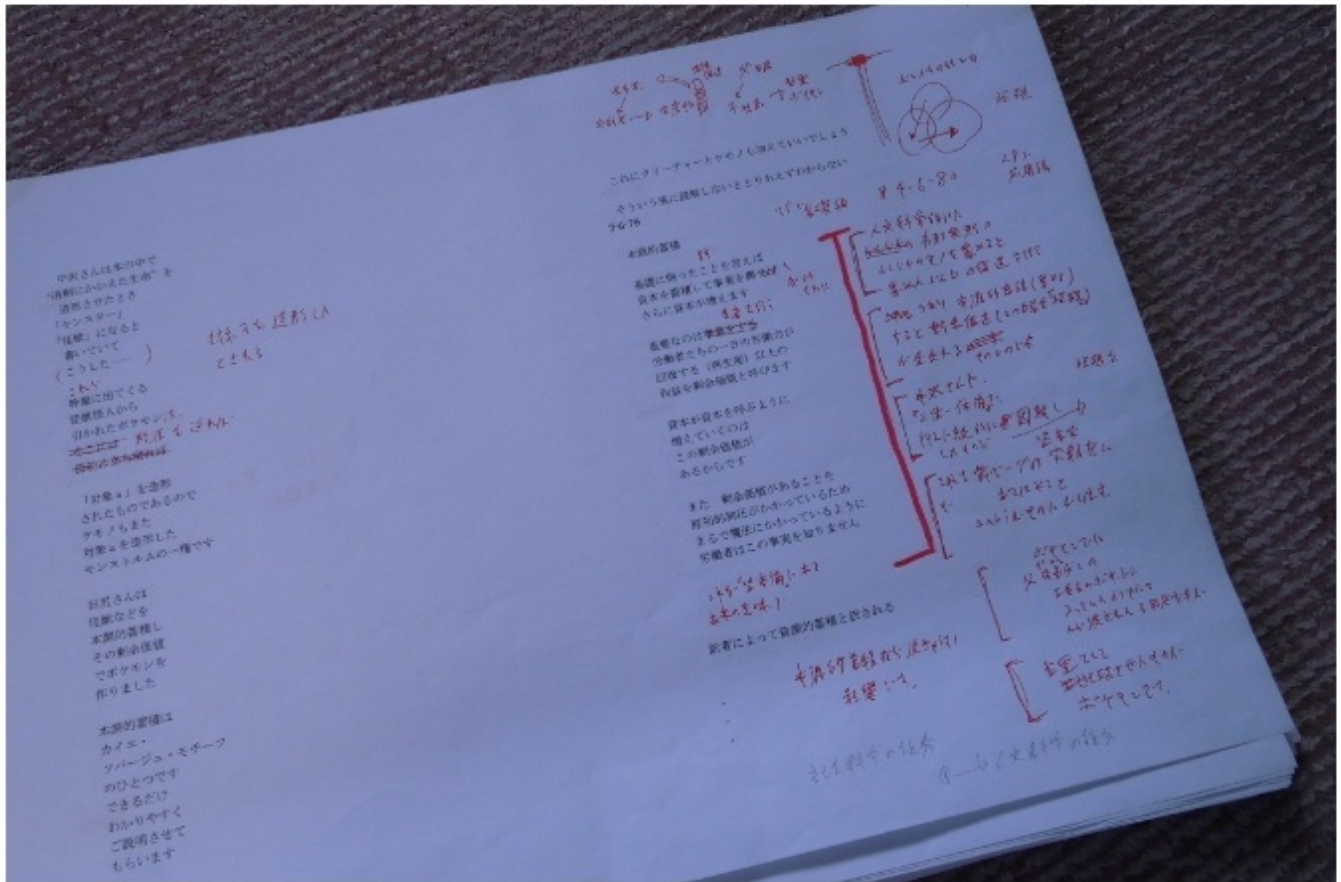
括弧について説明を要するが、ガーブスのルールブックでは<>の山切り括弧内が技能名を表し、曇付き括弧【】内が格闘動作名を、魔法は二重山切り括弧である《》の中に魔法名をおさめている。（二重の山切り括弧が技能には必要のないマナの~~必要~~を寓意している？）  
これらを統合して『世界樹』ではスキルに一元化し、さらに特徴も含めて統一している。

レベルシステムの下部構造は、上部としてスキルシステムを~~まじり~~まじりまじりして、レベルシステムにあった種を選んでいる。と、まじりまじりまじり、を~~まじり~~まじりまじり、剣技や斧技といったものは、ガーブス・マージナルアーツからルール設定された格闘家の動作であろう。

ガーブスはルールの基礎を詳述した「ガーブス・ペーシック」があり、その基本部から枝を挿し木できるように、格闘家のキャラクターを作成できる「ガーブス・マージナル」、マジシャンから高次のウィザードのキャラクターを作成できる「ガーブス・マジック」、超能力者を作成できる「ガーブス・スーパー」がある。（当時未邦訳の「ガーブス・スーパー」の代用品としてグループSNEが「ガーブス・妖魔夜行」を作ったのはあくまで余談だ）

その格闘動作が依存される基本技能（<空手><柔道><格闘>）を『世界樹』の場合はnマスタリーとして設定している。  
仮に『世界樹』に格闘家というクラスがあれば、職業固有の空手マスタリーがあり、そのスキルがレベルが1なら【キック1】、射打ち1、レベル3なら【後ろ回り





こういう風に  
 マングのセリフ(ネーム)表を  
 プリントアウトして  
 朱を入れるだけのはずが  
 どんどん付け足していくのは  
 いいのだろうか？

とつとつの方がいいのか  
 それとも裏紙にして  
 再利用したほうがいいのか  
 このプリント代だけでも  
 ペイできるぐらいぐらい  
 電子書籍が売れてほしい

ミスターXと会ってるぞ

# 文章礼賛 最近 見つけた資料

— かんじんの帝国  
高岩公義彦

『文章読本』の役目は終わ、こり了。

『文章読本以後』では、文字者の主張を引いた。

ビズネスがとら引いた。エリート主張の  
民主制度を支える市民でもなし。

みんなもエリートも、互いまでしてこり了。

「生かすかいいかいいの無能」

「死かいいかいいかいいの生かすかいい」

「クレオール礼賛」

文章をクレオール状態に一担して、それから。

文字者でいいものか、選り出し立てておきた。

関川夏央

(しかわじゅん)

安西水丸

赤瀬川源平

藤森照信

森村泰昌

吉田戦車と久米田藤治

中原昌也

猫田道子

高橋源一郎

鴨志田穰

山際淳司

桜井雅博

多根清史

田尻智

多和田華子

笠野道子

杉浦日向子

糸井重里

基本的に

✓ 文学者の文章は取り上げにくくこり了。

(多くの他の道人がほめこられるが)。

エリートの文章も同様だ。

優等生会

現在(2015年)と  
ほとんど引用する方の  
ラインナップは同じ

これは本編の巻末に収録される、引用文献・参考文献とほぼ同じ内容である。

何を引用したのか、だけがわかる。

引用文そのものは、書籍にあたってもらい、引用文の書誌データを書いてある。そういう、コーナーである。

広告だから。

結局「本のセールスマン」と同じような記事になってしまった。

買わずにすまされたら、業界の経済的理由により困るので、アマゾンで買えるものには、ブックリンクが貼られるかもしれない。

預金通帳にたくさん現金をおさめて、ついでに買えるように準備をすませてから、読むようにして下さい。

宣伝だから。

---

## 第一部 文読の近世

### 大衆がプロスポーツを生んだ

山際淳司「八月のカクテル光線」

角川書店

初出 雑誌「Number」創刊号 角川文庫『スローカーブを、もう一球』収録

スポーツ・ノンフィクション 雑誌がナンバー（数）だったから、山際はあんなに数（球数）にこだわったのだろうか？ 記事名に数字が入っているのが多いのは、そのためじゃないか？ 今でも「Number on Number」という連載がある。

辻井喬 堤清二『叙情と闘争』

読売新聞

初出 2008年4月12日付け朝刊

初出 2008年5月31日付け朝刊

回顧録 中央公論新社にて単行本、文庫本が出ている。

こんなくだらないことに引用される堤さん（辻井喬）が可愛そうだ。今回引用して批評できなかった吉田戦車の解説文（『ジュ・ゲーム・モア・ノン・プリユ』）には読点抜き改行鍵括弧挿入があり、伝統踏襲されている。よかったね、辻井さん。



夏目漱石『吾輩は猫である』

初出 1905年同人誌「ホトトギス」にて掲載し1906年まで連載される

小説 『坊ちゃん』の与太郎に対して、猫は書生の人称を与えられているとか、どうでもいいことを書いてみる。カン・サンジュンあたりなら、黒猫の最後に「足をすべらせた大日本帝国（出世した書生たちの集合）の末路を予感させる」と、好き勝手なことを書くんだらうなあ。

## 人文一致主義批判

いしかわじゅん『秘密の手帳』

書誌データ

角川書店 後に角川文庫所収時『業界の濃ゆい人』に題を変更

初出 「新刊ニュース」1995年から2000年まで連載

エッセイ エッセイと言っても、氏の交遊録が正しいだろう。

北方謙三をパロディにした小説を書いたものだから、本人のエピソードを周りの人が面白がっているいろいろ教えてくれたらしいが、ある理由でマセラッティを二台買ったとか、ステキなエピソードが書かれる。

関川夏央『汽車旅放浪記』

新潮社

初出 2006年 書き下ろし？

文芸批評 文士たちが書いた汽車、鉄道記事を評した文芸批評でも少し特殊である。内田百聞が汽車に乗り遅れそうになっているのに、走って乗るのは乗り鉄の沽券にかかわるとして見送るとか、そういう文士の心得がピックアップされている。

多和田葉子『ゴットハルト鉄道』

書誌データ

講談社

初出 「群像」1995年十一月号

小説 ドイツ語圏を旅した葉子様が思い出の旅の出来事をブンガクにしている紀行小説だろうか。

よく考えたら、葉子様のご性格と内田百聞の“意地でもいそいでやるもんか”は同じだ。猫を飼っていなくなって探したら女百聞である。あとはクロサワ監督の『まあだだよ』みたいな『もういいよ』の映画を撮られればいいが、こういう文芸批評的に現代作家と近代文学者を比べるって売

り物にならないんだよね。

いしかわじゅん『今夜、珈琲を淹れて漫画を読む』

書誌データ

小学館

初出 週刊文春連載「漫画の時間」 (もしかしたら毎日新聞の方かもしれない)

マンガ評 いしかわ先生はマンガ家だから、マンガ家と直接交流があり、佐藤優と直接会えば、なんとなく答えが見える。

外務省は荒谷二中なのか。

英雄趣味は人文不一致

原辰徳

読売新聞社

初出 読売新聞2012年6月21日付け朝刊

謝罪文 原監督が不倫問題を起こしており、それをネタにゴトを仕掛けられて、その顛末を語り、ファンに謝罪すると言う、最高に笑える文章である。人文一致主義を主張しても、無理があるだろう。こんな奴が指揮を執っているから、野球賭博とか、選手がするんだよ！ 「よくやった！ 清武」と思う。(.....違う記者がスッパ抜いたけど)

原辰徳はプロ野球人としては、どうかと思うけどエンターテイナーとしては「ダブルゲッター」である。一度に四つもアウトがとれる。

清武英利『切り捨てSONY』

講談社

初出 「FACTA」2013年10月号から2015年3月号まで連載

ノン・フィクション 清武さんが会社側から希望退職を要請されたソニーの社員を取材した内容である。

ソニースピリットから外れて、不採算を取り除こうとするコストカット型経営に転化したとき、ソニースピリットもまたカットされてしまう。

中島らも『しりとりにえっせい』

講談社文庫 (所収)

初出 夕刊フジ 1990年5月29日から9月30日 単行本は講談社より1990年刊行

エッセイ しりとり の要領で、テーマの語尾が頭にくる単語を書き繋いでいく面白エッセイ。

これを四ヶ月も続けたらもさんには脱帽だが、内容も脱帽である。私は山一戦争というものをこのエッセイで知った。

しり。

### 文章力は肩書きに勝てず

野田秀樹『野田版 鼠小僧』

初出 年初演 雑誌「せりふの時代」より

初出 2003年初演 雑誌「せりふの時代」より

戯曲 平成中村座によって舞台にかけられた鼠小僧の歌舞伎。

「消すに消されぬ深夜番組」とか、お奉行様（大岡様）が言ったりするが、花組芝居からこういうのはあるので、耐性が無いと小屋から出ていく。

野田秀樹『白夜の女騎士』

新潮社

初出 1985年初演

戯曲 今回、データをきちんと原典からとれなかった。

そのため抽出したのはセリフは蜷川幸雄『演出論』にあるモノを孫引用という形になった。前に失敗したので、正確か心配。

深沢美潮『フォーチュン・クエスト』

角川書店

初出 平成2年 書き下ろし

小説のサブテキスト 第三巻の巻末付録「モンスターポケットミニ図鑑」

この小説は清水義範『柏木清二の生活』みたいな内容らしい。是非、博多大吉先生が主演で映画化してほしい。

## 文章教室的なネタ

伊丹十三『ヨーロッパ退屈日記』

書誌データ

新潮文庫（単行本刊行は40年文芸春秋51年文春文庫）

初出 雑誌「洋酒天国」および「婦人画報」内連載 昭和三十年前後

エッセイ 映画撮影のために渡航し、その地での出来事や観察した旅行記のような、強いて言えば「紀行文」。

現在は映画監督として名が残っている伊丹さんは俳優として有名である。しかし『スウィートホーム』で黒沢清といろいろモメてしまったとか、余計なことは書かなくていい。私も伊丹さんのような記事を書きたいものだね。

清水義範「文体の坩堝」

文春文庫

初出 1990年「QA」4月号 別冊文章読本

随筆 清水さんはライターズライターで、物書きは皆例外無く好き。しかし、一般的にはメディア化作品があっても、知名度は無い。

文章の書き方なら、まず『清水義範の作文教室』を読もう。ほめて甘やかしてくれる。そういえば、偶然同じ章に引用に引用したけど、伊丹十三さんの文章に似ているね。

校正は人海戦術に限る

上橋菜穂子『夢の守り人』

偕成社

初出 2000年一月書き下ろし 引用は第一版

ファンタジー小説 テレビゲームなどのファンタジー作品への影響がある。もちろん守り人シリーズの思想は抜かれている。娯楽向きじゃないから。

本編に書いてある通り、新潮文庫と読み比べてもらうしかないが、正典はこちらである。

語彙の多さは軍事力の高さ 字引→辞典編

見坊主幹『三省堂国語辞典』第三版坳特装版

三省堂

初出 1985年書き下ろし

国語辞書 生涯三十万件の用例を採集した見坊豪紀先生の辞書。

本編で書いた通り○内に漢数字が11以降無いので、○内にアラビア数字で代用している。よく見たら、特装版で第三版ベーシックだが、少し誤植が修正されている内容かもしれない。

山田主幹『新明解国語辞典』第四版

三省堂

初出 1989年書き下ろし

国語辞典 新解さんで有名な辞書。山田忠雄先生が主に編纂。こんな本を読む人間には説明不要だが、ケンボー先生の下について辞書編纂を手伝ったのは、あまりにも有名。伝統主義者だから、女性に保守的な生き方を求めている用例が書かれ、女の子を教化するおとぎ話のようである。国語によって近代人に教化する国語辞書の役割と似ているね。

岡本綺堂「戯曲と江戸の言葉」

河出書房新社

初出 1932年舞台のパンフレット？ 河出文庫『江戸のことば』収録

演劇時評 原典には“ぞんざい”に振られている傍点は、事情により傍点を抜かれている。

文読において戯曲の言葉とつながる話であり、「言葉は正しく」とか、昔からこういうラング警察はいたのである。

『古典落語（続）』・編

講談社学術文庫

初出 1972から1974年間にかけて出された本の再編集版

落語 解説によると、「妾馬」は宝永年間に出た書籍を落語の根多に翻案したとある。今度はその本を改めるのが必要だが、今回はできなかった。

個人的には志ん生の「妾馬」を聞いたことがあるが、「ウマにきいてくれ」までのサゲが無い、時間短縮版である。

語彙の多さは軍事力の高さ 候文→国語編

見坊主幹『三省堂国語辞典』第三版坳特装版

三省堂

初出 1985年書き下ろし

国語辞典 パロール派のケンボー先生が口について語っている。

新明解第4義でも触れられている第十三義、浄瑠璃の始まりの部分は最近使わない。岡本忠成の人形アニメ「おこんじょうりでも観てみよう。ついでに衝撃作「チコタン」も観てみる。

山田主幹『新明解国語辞典』第四版

三省堂

初出 1989年書き下ろし

国語辞典 新解さんが口のことを語っている。

シャープが四角内に数字である。第一義、第二義の上のカテゴリーらしい。

さすがに用例のことに触れないのはまずい。「一の口から出る」など、経世家なのか、無用に社会批判をしたがる。四角内二・第二義の器機の算え方は、グリルの数を算えると出ている。形状が口の形をしているからだろう。

座談会「幻想の今日の質をもとめて」笙野頼子・小川国夫

河出書房新社

初出 「河南文藝」2003年夏号 収録『徹底抗戦！ 文士の森』

対談 まあ、大塚英志ってたしかにインチキ臭い。

座談会なのかというと、ほとんど笙野さんの独演会だ。

ロジェ・カイヨワ『戦争論』

法政大学出版局

初出 1974年訳出 2013年りぶらりあ選書として復刊

評論 邦題『あそびと人間』で有名な人が、なんで戦争論なんか著しているのか、不思議かもしれないが、ヨハン・ホイジンガの頃から「遊びと戦争」は論題にあがっている。戦いごっこがどんどん高度になって（ルドゥスアップ）戦争になる、ということである。

カイヨワはオリエンタリストだから、正戦論で劣っているとみなした側を侵略していいと思っている。そのために東洋理解をする。



## 物量作戦はインフレーション

高橋源一郎『ジョン・レノン対火星人』

講談社文芸文庫

初出 1983年に雑誌「野生時代」に発表後 1985年に角川書店より単行本として刊行

小説 又吉君も好きな小説である。作者が本人に会ったときに挙げた物が、よりによって『ジョン・レノン対火星人』とは。作者の文芸小説第一作がこちらで、デビュー作は『さようなら、ギャングたち』であるという、ややこしさもさることながら、デビュー作からの詩人が頭に浮かんだ言葉を、改題名にしている。その前のタイトルは「すばらしい日本の戦争」だった。無論、アイロニーがこもったタイトル名である。

T・Oはティータム・オニールという人物名のイニシャル。「ガロ」は21世紀を越せたか、「漫画サンデー」は近年に休刊してしまった。「プリンセス」はプレゼントを発送していると、虚偽を働いていた。感慨がある。アスキー・メディアワークスからアンケートの懸賞が届いて、「堅実な会社だから経営が厳しいのかな」と心配した。

五島千尋『石油を浪費するホドの人生か!』

アーキテクチャー・プロダクト・システム

初出 無し 2011年頃公表

小説 愛すべき官能小説家たちである。

ここに収録されなかった人たちは、悲しい思いをしているかもしれないが、自分で自分を慰めてあげてください。上からの物言い。よく見たら、睦月影郎がいないじゃないか。睦月影郎はマンガ『ケンペー君』の作者でもおなじみ。活字拾いよろしく漢字を拾うのが、難しかったのだろう。

中原昌也「誰が見ても人でなし」

文芸春秋

初出 文学界200612月号 2008年2月出版『ニートピア2010』に収録

短編小説 さすが、最後の文士にして「ふざけているか、天才か」が書いた物量作戦。我々の似非文士の書いた原稿のマスを埋めるだけのモノとは違う。けして、どうでもいいことを並べ立てているわけではない。

これぐらいのモノを読んで「文学ってわからない」と言ってほしい。

伊丹十三『問いつめられたパパとママの本』

中央公論社 1968年 中公文庫に収録後に新潮文庫にも収録

初出 婦人公論の連載

エッセイ 子供たちに何か聞かれたとき、親が科学的に説明できるようにするための随筆。他にも夕焼けにどうしてるのか、本人作画のイラストが添えられ、それがうまい。伊丹さんがけっこう、黒難解が流行る60年代でかなり力を抜いた文章を書いていることに、まず、驚く。難しければ難しいほど価値ある風潮に、少し抵抗がある気がする。

よく考えたら、『かくしごと』は“職業を問いつめられたパパのマンガ”である。

---

### 第三部 文読の現代

#### 幽霊作家見参

博多大吉『年齢学序説』

幻冬舎

初出 書き下ろし

タレント本 タレント本なんだから、ゴーストライターにスピーチライティング的に原稿を書かせてすぐに出版すればいいのに、三年かけて仕上げた畢生の大作。そのため、他のタレント本のような軽さはない。巻末年表を見ると、松本仁志の年齢ごとに出来事を刻んでいるので、「上役を立てなくてはいけない中間管理職の悲哀」を感じる。

こういうことを書くと「社内の空気が悪くなるので、できれば書かないで下さい」と大吉先生本人に言われるだろう。諍いのあるタレント二人を「キミたちは似たもの同士なんだよ」と諷めるように、丸く収めてほしい。

神山典士『ペテン師と天才』

書誌データ

文芸春秋

初出 朝日新聞 2014年4月1日付け朝刊

ノン・フィクション 巻末付近に再掲載された新聞記事である。

この問題で二重苦の文読が三重苦に陥ってしまう。調性音楽は初めから、ゴーストライターがいたのか、『クラシカロイド』で描かけない話だ。

詠みびと知らず（享保年間）

初出 享保年間

狂歌 伝・太田南畝作と伝えられる。『風雲児たち』情報によると平賀源内に見出され、滑稽本を書いていた。

このような洒落は現在でもしてはいけない。近年の安倍晋三に、似顔絵にチョビひげを描いてはいけないどころか、読売新聞は自民党に政権が返ってから風刺漫画を載せていない。自民党政権寄りであるのは記事を読むと明確で、「それはどうなんだろう」という議論もされない。チョビ髭じゃなくて八の字のヒゲでマリオに扮すれば、よかったと思う。

詠みびと知らずとは、作者不明という意味だといちいち説明しなくてはいけないだろうか。

テープに吹き込めば誰だって名文家

糸井重里『「長い旅」を聴きながら』

小学館

初出 1978年『成り上がり』内収録

編集後記？ 批判すれば英雄趣味に淫したい、西武百貨店のコピー群の「消費活動に疑いを持たないで」という、後の作風がすでにある。うそのようなほんとをみたい。だから、後にポストモダン文学的ストーリーを書いたのだろうか。

不思議大好きだから、後の『MOTHER2』でピラミッドが出てくるとか、それは語られない。

岡本綺堂「戯曲と江戸の言葉」

河出書房新社

初出 1932年舞台のパンフレット？ 河出文庫『江戸のことば』収録

演劇時評 この勝と榎本武揚の取材で、彼ら江戸出身の元武士に江戸っ子のしゃべりが生きているのがわかる。

批判として書いておくと、有名人の言葉と市井の人の言葉に本当に差は無かったのか、疑いがないわけではない。

尾辻克彦「芥川賞授賞式挨拶」

新潮社

初出 1981年芥川賞授賞式 芸術新潮2015年2月号 赤瀬川原平特集内記事

スピーチ記事 珍しくスピーチを本人自ら、テープリライティングしてコクヨの原稿用紙に書いている（文字起し）。普通は逆にスピーチを話すためにスピーチ原稿を書く、あるいはスピーチ

ライターに書かせる。発表するあてもないのに、反芸術的なことをしているのは赤瀬川さんらしい。

特集記事の中には直筆原稿も載っていたので、ゴーストライティングしていないのは確実。

### 糸井重里『MOTHER3』

任天堂

初出 2006年販売

ゲームソフト コピーライター糸井がシナリオを書いたことで、「テキストのクオリティーが高い」「テキストのクオリティーが高い」とは言われているが、具体的にそれを腑分けすると、戦後の左翼思想が中に入っている。

安易にテキストをほめると、新左翼思想称揚になってしまうから、気をつけないといけない。『さようなら、ギャングたち』がその部分を引いても、本来読まれるものだから、文芸的な価値は揺ぎ無い。

### 糸井重里『「長い旅」を聴きながら』

小学館

初出 1978年『成り上がり』内収録 書き下ろしと思われる。

編集後記？ 矢沢が忙しく、まとまった時間が取れないので、いろいろな場所で録音収録した逸話だが、ゲーム批評的にはいろんなシークエンスを繋げた『MOTHER』シリーズの世界観、『ドラゴンクエスト』で言えば完成慰安旅行先で次作のネタを拾っていたようなもの。

中川大地さんがいうように、こういうことは語られてこなかった。『がんばれ森川くん二号』のようにディープラーニングのAIのゲームがあっても、アルファ碁で参照されない。莫大なデータベースがありながら埃をかぶっている。

### 「大塚某氏のしくみ3 主語の混濁」 笹野頼子

河出書房新社

初出 2005 『徹底抗戦！ 文士の森』

批評 たしかに大塚って、変だよね。という共感の文である。

佐藤優と同じ臭いがする。

絶筆はメメントモリ

## 伊藤計劃「屍者の帝国」

河出文庫

S F 小説 大森望責任編集のS F 短編集『NOVA』にこの絶筆部分は掲載された。この書きかけの絶筆部を書き繋いだのが円城塔さんの手による『屍者の帝国』である。

ある映画を観てイスラエルのことをよく知らないということから発想して、できたのが“禪じゃないから恥かしくない”である。

桜井政博『桜井政博のゲームについて思うこと』編集協力井出大

KADOKAWA エンターブレイン刊

初出 週刊ファミ通信2003年9月12日号、9月19日号掲載

コラム 普段ゲームのことに楽しく触れている大変ためになる記事連載。ところが『星のカービィ』のアニメでの、業界では有名な最終話秘話が語られる。女性向けのフィクションでは、キャリアか愛かという問題を突きつけるが、実は男性もキャリアか愛かに悩むときはある。

一応、編集協力のいーです井出の名も併記しておいた。苦渋の決断。

鴨志田穰『日本はじっこ自滅旅』

講談社

初出 「月刊小説現代」にて 2003年頃に血を吐きながらとびとび連載

紀行文 血を吐きつつ旅をする鴨志田の実録風紀行。

土佐日記に比べれば、歴史には残らない。鴨志田が酒乱で人文一致主義ではない。海外に行きたいのに、国内で腐っている姿が本人の筆で活写される。

私小説史では、私マンガの桜玉吉、それから鴨志田穰の私的紀行文。そして西村賢太というのが、流れと思われる。それは小説読本のネタ。

鴨志田穰「邂逅」

講談社

初出はウェブサイト「寿郎社 WEB SITE」2007年三月二十日 『遺稿集』所収

絶筆 命日に書かれた、妻との邂逅を書いた文章である。

テレビ番組でサイバラとカモちゃんの話は語られているが、本当はこうだと思う。

西原理恵子『ばらっちからカモメール』挿絵内記述

スターツ出版



収録 『ばらっちからカモメール』

初出 オズモール「ばらっちからカモメール」2002年2月～11月頃

挿絵内の記述 息子さんが観ているテレビの内容である。エロマンガ雑誌の編集者さんが「文章になっているなあ。もっと便所のラクガキを書いてもらわないと」と発言したのを横で聞いていた西原さんは、ものすごく説得力があったと語っているから、そのエーキョーだろう。

## 文章礼賛

のど飴

カリー屋カレー

KURUTOGA MITSUBISHI PENCIL

商品の能書き 清涼飲料水のソルティライチの能書きも引用したかったが、長いので割愛した（カットを柔らかく表現）。

こういうものを引用しなかったから、駄文差別が生まれ、贖罪に引いている。

野田秀樹『キル』

新潮社

初出 初演1994年 単行本1995年3月25日

戯曲 英留学を終えた野田が凱旋公演としてNODAMAPを設立してかけた舞台劇。初演は堤真一や羽野晶紀などが公演した。

“七年もうろうと旅して私は”の「もうろう」に傍点が引かれている。

赤瀬川原平『健康半分』

deco

初出 「からころ」2006年から2011年

エッセイ 待合室に置かれた冊子「からころ」で連載していたもの。

連載中から病身となって、あとがきは確実に死の床についていただろう。本当は赤瀬川さんが難解な美術理論の文章から読みやすい文章に変わっていったのは、体言止めを使うようになってからではないか、などの変遷を追っていくのをしたかったが、そんな余裕は無い。

### 猫田道子『うわさのベーコン』

太田出版

初出 1998年「クイック・ジャパンVOL.26」 後に『うわさのベーコン』として単行本化

小説 アウトサイダー・リテラチャーとして後年、アウトサイダー・リテラチャーの女王が書いたモノとして研究の対象になるだろうが、サドの小説もアンドレ・ブルトンが言及しているから、間違いじゃないと考えられる。

高橋源一郎が『ニッポンの文学』で「これは文学ではありません」とお墨付きを与えている。メインカルチャーは、アウトサイドの文化を植民地にしないと、維持できず、衰退の道を歩むとしたら、駄文差別が文読の植民地先を潰していたのかもしれない。

### トマス・ピンチョン『メイスン&ディクスン』 訳・柴田元幸

新潮社

初出 原本は1997年 2010年訳し下ろし

小説 言わずと知れたピンチョンの小説である。

ピンチョンは米文学でも有名な方。それも覆面作家としてだ。寡作でもあり、研究者のおかげで素性の表面はさらっとなぞれる。しかし長年新作を書けなかったのは、謎。バートルビー症候群に罹ったのか、憶測を書いているのか、気が引ける。

### 糸井重里『MOTHER3』

任天堂

初出 2006年販売 ほぼ書き下ろし

ゲームソフト <「せかいの おわり」>の続きである。この地がどこか、わかってしまう悲しさがある。イカツチタワーが主体思想塔だと、わかってしまう。セルフパロディなのか、金一族にあたる人物も出てくる。

原始共産社会への憧憬、それがタツマイリ村だったのだ。

[www.mother4game.com/about.html](http://www.mother4game.com/about.html)

初出 日時不明

ホームページ・テキスト 『MOTHER3』の続編を海外のファンが作っている。ポケモンウラニウムが潰されてしまったので、『MOTHER4』も潰されないか心配。

平坂読『妹さえいればいい。』

小学館

初出 文庫書き下ろし

ライトノベル 原典では“日和った”には“ひよ”とルビが振られているが、設定を日和ったわけでは  
ありません。

本編と同じ事を書くが、元ネタが同じ会社の『魔装学園H×H』みたいなことをすれば、よかつたということか。『景色』シリーズ、新作を楽しみにしている。“墮天使の献身”にはリリムキスと原典ではルビが振られている。

永井愛『ら抜き殺意』

而立書房

初出 1997年紀伊国屋サザンシアターで初演 書き下ろし

戯曲 90年代後半の日本語ブームに煽られたと見える舞台劇。

実は『ら抜き殺意』は未見。『荻家の三四枚』は余貴美子版も渡辺えり子（当時）版も観たことがある。

関川夏央『「坂の上の雲」と日本人』

文藝春秋

初出 文春の編集者を前にレクチャー 2006年より前 単行本発刊は2006年三月

語り聞かせ？ 関川さんの語りだが、伊丹さんの方言作文がうまいことを語っている。

おそらく息子へのはげましのはずだが伊丹さんの大江光への想いというのを捨てきれないため“息子か甥”と関川さんは語ったのだろう。これだけで、いしかわじゅんさんの関川夏央評が垣間見えるはず。

島本慶

テキストを控えていなかったなので、下記リザーバー。

ふに一。

春日太一『あかんやつら』

文芸春秋

初出 2013年11月15日 書き下ろし

ノン・フィクション “まだまだ足りなかった”って、あかんやつらだから、「どーかして  
るぜっ!」。東映という会社が如何に任侠の精神で出来ているか、こんなことを書いている春日  
さんはフェミニンなので、男性ホルモンを摂取するように暴力表現を摂取しないとバランスがと  
れないのか。

くけー。

丸谷才一『文章読本』巻末「わたしの表記法について」

中公文庫

初出 昭和五十二年九月 中央公論社刊 と巻末に書いてある

文章読本 お題通り自身の表記法について丸谷が書いた、ソルティライチの能書きと同じもの。

清水義範さんが「猿蟹合戦といふもの」でパロディにしている。斎藤が丸谷の話題をすると、  
必ずこの表記法でバカにする。

からかいの対象。

こういう風に、からかわれるのが、イヤだったらはじめから文読を書いちゃいけない。

---

参考文献 などなど

テレビ番組

- ・BSプレミアム シェイクスピアのドキュメント
  - ・同じく バッハのゴーストライターのドキュメント
- 二つとも、題名を控え忘れる。海外のドキュメント番組。どちらも「巨匠」の代筆説に肉迫する。こんな番組を海外から買い付けてくるなら、佐村河内にも気づいてほしい。
- ・放送大学特別講義「文学の数量分析」
- 元ネタなので、本書の内容がバレる。
- ・BSプレミアム「ケンボー先生と山田先生～辞書に人生を捧げた二人の男～」
- 一月九日の時点では、二人はまだ畏友だったという、ドキュメンタリー番組。
- ・関西の方のテレビ局「ビーバップ・ハイヒール」 ゴーストライターの回
- 筒井康隆のゴーストライター自白やタレント本の作り方など、いろいろな点がわかる。

書籍

- ・三大文読

言わずもがなの、谷崎、三島、丸谷の文章読本。その他の文章読本は役に立たない。それから、本書を含めて、四大文読と呼ばれることは、未来絶対に無い。

- ・『辞書になった男』

この本をゴーストライターが書いていたら、どうしよう。

- ・『上田万年 日本語を作った男』

「この本は読みませんでした。読んだら、せっかく作った原稿を一度捨てて、一から書き直さないといけない」

- ・『文章読本さん江』

この本の所為で文章読本が出せなくなった。

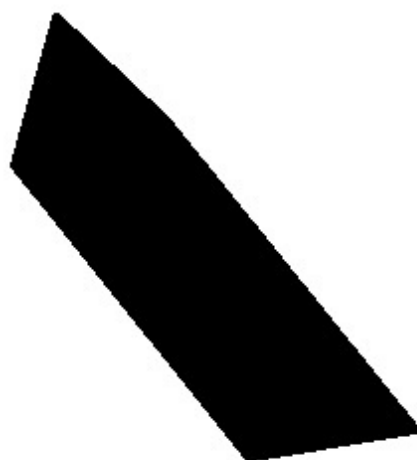
雑誌・ムック

- ・「QA」90年9月号 別冊文章読本

「残念ですが、国会図書館に行けなかったので、読んでおりません」

後で継ぎ足しがあるかもしれない。心配だ。

# 文芸のおわりについて





私の三番目のありえない未来の思い出である『シルエットアクター』では、岩松了をモデルにしているイワマツ団長の劇団（岩松了率いる劇団は東京乾電池だっけ）がナンジャモンジャ劇場をフランチャイズにしている。

そこは演劇のヴァルハラだ。

少し前に劇団員の構成をしたが、それは私にとってのドリームキャスト、生前の吉田玉男やすでに故人の伊丹十三をモデルにした人物がいた。特に伊丹さんは『スウィートホーム』の心の力の説明は、そのまま本人の演劇論を語っている気がする。

ふと気づくと、故人が多いことに気づく。

第三舞台に所属し、将来を嘱望されながら交通事故で亡くなった岩谷真哉の似顔絵と同じ見た目のアルト。

そして『ハロルドとモード』でタイトロールを演じた俳優。

生きている人も山崎清介などの演劇人、文士劇の方からは前川麻子や古川日出男がいる。こうした生きている人はできれば本人に声をあててもらおう。

後づけでは、最近近衛秀麿を音楽担当者、コノエとして登場させようと思う。作中でもかかる「三文オペラ」の序曲を指揮したからだ。

ドリームキャストたちが集うナンジャモンジャ劇場は、演劇のヴァルハラ宮殿である。

団長を含む劇団員たちは時間が経てば、彼らは皆ヴァルハラ的英雄となる。（注・残念ながらゲームソフトの中にあるそのヴァルハラ空間に彼らを封じ込めることはできなかった）

日本の伝統演劇（能狂言キーン・文楽タマオウ・神楽歌舞伎ダンゴベエ）も封じ込められており、輸出品という付加価値もつけようと画策した。ゲーム内には登場しない蜷川さんの演劇がシェイクスピアをジャポニライズされているのを、翻訳せずに提供する海外公演のようなものか。

ともかく、一度幕が開けば彼らの演じる舞台はキャストスタッフ全員を動員したラグナロクである。

ふと、これは文章読本でもいえることではないか？ と、思った。

文章読本を書く者は、性別が違えどヴァルキリーと同じ役割をすることになる。

小泉八雲流の表現では死者の国だけど、海外の人に文章読本を説明するためには、戦乙女たちが英霊をヴァルハラ宮殿に集めているという北欧神話を例にあげれば、わかりやすいのではないかと思う。逆に言えば、文章読本は海外に輸出できない。

これらのことは今日ではなく、数年前に文章読本を上梓できていれば、そんなに大きな問題ではなかった。

元々、山際さんや鴨ちゃんなどの、前から亡くなられた人たちの文を引くつもりだったが、赤瀬川さんが亡くなった辺りで、数年前に上梓できていた直近なら、そんなでもないが、時間経過でどうしても「文芸のヴァルハラ」になってしまうと、気づいてしまった。

その神話にハッキングをかけて、ラグナロクという訳語では「神々の黄昏」なり「終わりの日

」とされるモノに死した英雄たちを動員する。

フェンリルらと戦うためである。

このフェンリルとは何か？ 世界文学を代入するか？

一応は対立すべき敵、となる。文章読本の作者で違う敵となる。

谷崎ならフェンリルという獣であり、これは自分の美学を理解できない人たちである（川端もほぼ同じ）。三島は経済中心主義、拝金主義を嫌っており、今ならグローバリズムの象徴という解釈のヨルムンガンドであろうか。

丸谷はわからない。ミナ坊はテクスチュアルハラメントで、それにあたるのは、フレイヤがシルに化けるとか、そういうものだろうか？（ヴァン神族が意外にも女流文学を象徴するかもしれない）

私の場合、炎の巨人スルトか？ そのものずばり文学を焼き尽くす存在。

あるいはゴーストライターかもしれぬ。

だが、私はスルトに手を貸している。

スルトこそ私かもしれない。

今までアース神族の側からの文読しかなかった。

もう、よるべきものがなく、絶対的名文など存在しない。それをムリに生み出そうとするには、宗教で支配するか、科学で支配するか、そのどちらかである。「大きな物語」の代用品として、北欧神話を捏造でもしないといけないと、わかっている。

そして、すでに「大きな物語は死んだ」のだから、それに意味は無い。

先行者がハッキングをかけているとすれば、私はクラッキングをかけているのである。

宇宙樹とは何かというと、もしかしたら、この「大きな物語」かもしれない。普通なら、高橋源一郎を私淑している人間だから、「たった一つの文学という物語を文学者全員で書きつないでいる」という言葉の“たった一つの文学”が宇宙樹に見立てるはずだが、そうはしない。

ガイ・モンターグにしてボダン大司教、焚書官にして異端審問官、それが私だ。すでに文芸の宮殿は炎に焼かれ失っている。

文章読本にとって、終わりの日とは昭和最後の日だろう。

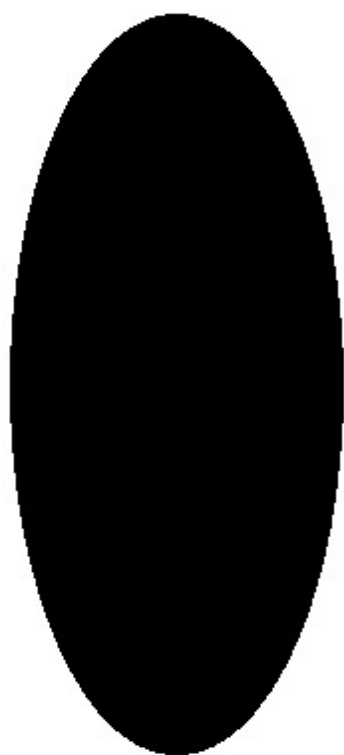
昭和が始まって15年におよぶ戦争（日中から大東亜）に突入した頃に谷崎が書きはじめ、菊池寛が続いて、戦後も川端（『新文章読本』）や三島が書き繋いだ文読。しかし、本格的な文章読本はもう作れないだろう。それは本格的な文士を皆、焼き殺されたからだ。

今、終わりの日の向こう側に立っている。

そこに名文は存在しないかもしれない。

その事実を突きつけるために、最後にして終わりの『文章読本』を書いているのだ。

謝罪



## 謝罪

---

本書に掲載されている記事「堀井の“ブンブン”調査」の画像にて、『魔王軍へようこそ』が『ようこそへ魔王軍』になっておりました。

関係者各位、とくに開発者の方々に多大なご迷惑をおかけしましたことを深くお詫びいたします。

## 販促！文章読本

<http://p.booklog.jp/book/97529>

著者：ゴトチヒ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gotochihi1980/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/97529>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97529>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ



